

東京外国語大学記述言語学論集

思言

第8号

論文

- 韓国語の副詞‘aju’に関する考察 ―書き言葉コーパスの分析から― ……安 智恵 (3)
- ジンポー語の動詞文標識にみられる sa-の機能 ……大西 秀幸 (21)
- 中国語におけるオノマトペの述語用法 ―2音節のオノマトペに焦点を当てて―
……………黄 慧 (41)
- フィンランド語の E 不定詞具格形として現れる動詞の意味特徴 ……坂田 晴奈 (65)

修士論文 要旨

- 宮城方言における「なら」意味領域 ―共時的体系と通時的変遷― ……内海 優 (83)
- ジンポー語の体系的記述 ……大西 秀幸 (93)
- ニヴフ語における時の副動詞 (temporal converbs) について ……蔡 熙鏡 (103)

卒業論文 要旨

- ナポリ方言語彙使用の世代差 ……板久 梓織 (115)
- ドイツ語の純粋与格と日本語の対応表現について ……鈴木 真衣 (123)
- フィンランド語における属格と接格・向格の統語的・意味的機能の類似について
……………高橋 健太郎 (131)
- 文末の「し」の用法について ……中澤 明恵 (139)
- ブラジル・ポルトガル語の動詞による可能表現 - poder, conseguir, saber, dar について -
……………安田 彩 (147)
- ベトナム語の《動詞+目的語/(ϕ)+方向動詞 lai》 ……山本 一八 (155)
- 東京地方の若者世代に使用される「動詞の命令形+シ」の意味・用法と使用実態について
……………山本 ちひろ (163)
- タイ語の方向動詞が担う意味・機能 ―動詞と共起する場合― ……若山 絢子 (171)

2012 年

東京外国語大学

総合国際学研究科・外国語学部

記述言語学研究室

序文

『思言』の第8号をお届けする。その内容とレベルに関しては十分なものと言えるかわからないが、読んでくださる方々の評価をまちたいと思う。言語学の進展に何か少しでも寄与するところがあれば幸いである。

今回も印刷・刊行に関して東京外国語大学大学院の競争的経費を申請し、その援助を賜うことができた。記してお礼申し上げる。これに深く感謝し、より質の高い論集を目指して今後も努力を重ねてゆきたいと考えている。

他方、外部から広く投稿を受け付けることや、その査読体制の十分な確立などは今年度も課題として残されたままである。当研究室での研究会に関しては、学内レベルでの公開は行っているが、これもまだ広く一般から人に聞きに来ていただけるようなレベルには至っていない。外部との交流を深めるとともに、さまざまな刺激を受けてやっていくようにすること、より広く世界に発信し、通用するような研究体制を構築する必要がある。まずは最低限、この現状を維持し、論集の刊行を継続できたことを喜びたいと思う。

今年度は、吉岡乾君が博士論文 *A Reference Grammar of Eastern Burushaski* により博士号を取得したことも喜ばしいことであつた。

今号の編集にあたっては、小山内優子さん、高橋健太郎君が中心になって尽力して下さった。ゼミの院生・学部生諸氏もよく手伝ってくれた。ここに記して感謝の意を表したい。英文題目のチェックをして下さった John Phan 氏（国立国語研究所／日本学術振興会外国人特別研究員）にもお礼申し上げたい。

上記のように拙いままお届けする本号であるが、読んで下さった方々からは、今後も広く御批判御叱正を賜りたい。前号でもいくつか御意見を賜うことができた。これをうけて改善に努めるとともに、御意見を下さった方にはこの場を借りて深くお礼申し述べたい。

2012 年 12 月 1 日

風間 伸次郎

思言 第8号 目次：

論文

韓国語の副詞‘aju’に関する考察－書き言葉コーパスの分析から－

A Consideration of Adverb “aju” in Korean — Based on an analysis of the written language corpus —
..... 安 智恵 (3)

ジンポー語の動詞文標識にみられる sə-の機能

The function of prefix sə- in the Myitkyina dialect of Jingpho..... 大西 秀幸 (21)

中国語におけるオノマトペの述語用法－2音節のオノマトペに焦点を当てて－

The usage of onomatopoeia as predicate in Chinese — Focus on disyllabic onomatopoeia —
..... 黄 慧 (41)

フィンランド語の E 不定詞具格形として現れる動詞の意味特徴

The semantic features of verbs as E-infinitive instructives in Finnish..... 坂田 晴奈 (65)

修士論文 要旨

宮城方言における「なら」意味領域－共時的体系と通時的変遷－

A descriptive study on conditional forms corresponding to “nara” in the Miyagi dialect of
Japanese 内海 優 (83)

ジンポー語の体系的記述

A descriptive grammar of the Myitkyina dialect of Jingpho 大西 秀幸 (93)

ニヴフ語における時の副動詞 (temporal converbs) について

A study of temporal converbs in Nivkh 蔡 熙鏡 (103)

卒業論文 要旨

ナポリ方言語彙使用の世代差

Generational differences in dialect vocabulary use in Naples 板久 梓織 (115)

ドイツ語の純粋与格と日本語の対応表現について

The dative case without preposition in German and corresponding expressions in Japanese
.....鈴木 真衣 (123)

フィンランド語における属格と接格・向格の統語的・意味的機能の類似について

Similarities between the syntactic and semantic functions of the genitive vs. adessive and allative cases
in Finnish高橋 健太郎 (131)

文末の「し」の用法について

Sentence-final usage of "SHI" in Japanese中澤 明恵 (139)

ブラジル・ポルトガル語の動詞による可能表現 - poder, conseguir, saber, dar について

Expression of the potential in verbs in Brazilian Portuguese安田 彩 (147)

ベトナム語の《動詞+目的語/(ϕ)+方向動詞 lại》

“Verb+Object/(ϕ)+Directional Verb lại” construction in Vietnamese山本 一八 (155)

東京地方の若者世代に使用される「動詞の命令形+シ」の意味・用法と使用実態について

The meaning and usage of ‘Imperative Form + Shi’ by young people in Tokyo District
.....山本 ちひろ (163)

タイ語の方向動詞が担う意味・機能 ー動詞と共起する場合ー

Meaning and function of serial verbs in Thai - The case of verbal co-occurrence-若山 絢子 (171)

論文

韓国語の副詞 ‘aju’に関する考察

－書き言葉コーパスの分析から－

安 智恵

(東京外国語大学大学院博士後期課程総合国際学研究科)

キーワード：韓国語、副詞、程度副詞、陳述副詞、修飾関係、モダリティ

0. はじめに

本稿は、韓国語の副詞のうち、‘aju’¹を考察対象としている。副詞‘aju’は多くの研究で程度副詞として分類されている。しかし、徐尙揆(1991)では‘aju’には程度副詞と様態副詞²の両面的性質があると指摘されている。本稿では、徐尙揆(1991)を再考察しつつ、副詞‘aju’がもつ程度副詞としての意味的・統語的特徴と程度副詞ではない場合の‘aju’の意味的・統語的特徴を明らかにすることを目的とする。以下、韓国語のローマ字表記は河野六郎(1979)³に倣っており、韓国語の日本語訳及び、グロス、下線、囲み線、網掛けは全て筆者による。

1. 先行研究

1.1 では辞書における‘aju’の定義を、1.2 では‘aju’の意味的・統語的特徴について述べられている先行研究をまとめる。

1.1. 辞書における ‘aju’の定義

辞書における‘aju’の定義をみてみる。辞書としては『연세 한국어 사전』(延世韓国語辞典)と『표준 국어 대사전』(標準国語大辞典)を用いる。

『연세 한국어 사전』(延世韓国語辞典)

아주 ¹부 ① 매우. 무척. 대단히. **아주** 새 차를 사야겠다.

② 완전히. **아주** 우리는 이런 점을 **아주** 잊고 사는 경우가 많습니다.

③ 전혀. **아주** 실패를 모르는 인생이나 고통이 **아주** 없는 생활이 결코 바람직한 삶은 아니다.

¹ ‘aju’は日本語の「とても、全く、完全に」に当たる副詞である。菅野裕臣ほか共編 (1988) 『コスモス朝和辞典』参照。

² 徐尙揆(1991)は韓国語の副詞を「様態」と「陳述」に区別しているが、その区別に関する詳しい記述は見当たらない。本稿では先行研究における「様態」という用語はそのまま引用する。

³ 河野六郎(1979: 96-97)における韓国語のローマ字表記は

母音: ㅏ[a], ㅑ[ia], ㅓ[e], ㅕ[ie], ㅗ[o], ㅛ[io], ㅜ[u], ㅠ[iu], ㅡ[y], ㅣ[i], ㅘ[oa], ㅙ[ue], ㅚ[ai], ㅜㅓ[ei], ㅟ[oi], ㅠㅓ[ui], ㅡㅓ[yi], ㅞ[iai], ㅟㅓ[iei], ㅟㅓㅓ[oai], ㅟㅓㅓㅓ[uei]

子音: ㄱ[g], ㄲ[gg], ㄴ[n], ㄷ[d], ㄸ[dd], ㄹ[r], ㅁ[m], ㅂ[b], ㅃ[bb], ㅅ[s], ㅆ[ss], ㅇ[‘, ng], ㅈ[j], ㅉ[jj], ㅊ[c], ㅋ[k], ㅌ[t], ㅍ[p], ㅎ[h]である。

④ 영원히. 영영. ¶ 그 같은 높은 동네서 **아주** 쫓아내 버려야 한다.

⑤ 어떤 일보다 더 나아가. 이왕이면. ¶ 그걸 전기로 쓸 것이 아니라 **아주** 자서전 형식으로 써 주었으면 좋겠군.

아주² [감] 남의 잘난 체하는 행동이나 말을 비웃을 때 쓰는 말.

¶ **아주**, 그렇게 말하니깐 성인군자 같군.

‘aju¹ [副] ① 大変. 非常に. とても ¶ **最も**新しい車を買おう。

② 完全に ¶ 我々はこのようなことを**完全**に忘れて生きていく場合が多いです。

③ 全然 ¶ 失敗を知らない人生や苦痛が**全然**ない生活は決して望ましい人生であるとはいえない。

④ 永遠に. 永久に. いつまでも ¶ 彼みたいな奴は町から**永遠**に追放しなければならない。

⑤ どうせやるからには ¶ それを伝記として書くのではなく、どうせやるからには自叙伝の形式で書いてくれたらいいのに。

‘aju² [感] 他人の偉そうな顔をする行動や語をあざ笑う場合に用いられる。

¶ なんだい, そんなふうに言うから聖人君子みたいね。

『표준 국어 대사전』(標準国語大辞典)

아주¹ [부] ① (형용사 또는 상태의 뜻을 나타내는 일부 동사나 명사 앞에 쓰여)

보통 정도보다 훨씬 더 넘어선 상태로. ¶ 이번 시험 문제는 **아주** 쉽다.

② (동사 또는 일부의 명사적인 성분 앞에 쓰여) 어떤 행동이나 작용 또는 상태가 이미 완전히 이루어져 달리 변경하거나 더 이상 어찌할 수 없는 상태에 있음을 나타내는 말. ¶ 홍수로 마을이 **아주** 없어졌다.

아주² [감] 남의 잘난 체하는 말이나 행동을 비웃는 뜻으로 하는 말.

¶ **아주**, 너 갑자기 어른이 된 듯이 얘기하는구나.

‘aju¹ [副] ① (形容詞または状態の意を表す一部の動詞や名詞の前に用いられ) 普通の程度より遥かに超えた状態で ¶ 今回の試験問題はとても易しい。

② (動詞または一部の名詞的成分の前に用いられ) ある行動や作用または状態が完全に成して、変わってしまったかこれ以上どうしようもない状態にあることを表す語 ¶ 洪水で町が**完全**に無くなった。

‘aju² [感] 他人の偉そうな顔をする語や行動をあざ笑う意味で用いる語

¶ なんだい, お前急に大人になったように話すなんて。

‘aju は副詞と感嘆詞として用いられている。感嘆詞としての‘aju は主に文頭に用いられ、意味的に皮肉なニュアンスが含まれている。本稿では感嘆詞‘aju は考察対象にしていなため、用例抽出において文頭に置かれ、かつ感嘆詞として用いられている‘aju は除外する。

1.2. ‘ajuに関する先行研究

‘ajuに関する研究として、韓国語の程度副詞の内、類義語程度副詞の形態・意味・構文論

的特性を分析している유준희(2006)と、‘aju」の程度副詞と様態副詞として文法的特徴について考察している研究である徐尙揆(1991)を取り上げる。

유준희(2006)は‘aju」を「絶対的程度副詞」と分類⁴し、“매우(mai‘u, とても)、몹시(mobsi, ひどく)、너무(nemu, あまりにも)”の類義語であると述べている。유준희(2006)では‘aju」を‘aju1、‘aju2、‘aju3」に分けて考察を行っている。‘aju1」は形容詞の前に用いられ、程度を強化し、“매우(mai‘u, とても)”と置き換えられる。‘aju2」は動詞の前に用いられ、“매우(mai‘u, とても)”と置き換えられない。‘aju3」は話者の皮肉な語調を表し状況的意味だけを持つ。以下、‘aju」の形態論的・意味論的・構文論的特性をまとめる。

・形態論的特性

- ① 助詞と結合しない。
- ② ‘aju1」は“‘aju‘aju”のように重複され、被修飾語の程度性をもっと強化する。
- ③ ‘aju2、‘aju3」は重複できない。
- ④ ‘aju3」は話者に皮肉な感情を表す際用いられるが、このような場合“‘ajju、‘ejju”のような異形態⁵が用いられる。

・意味論的特性

- ① ‘aju1」の意味―副詞‘aju」の基本的な意味で被修飾語の程度を強化する。普通の程度を遥かに超えている状態を修飾し、“매우(mai‘u, とても)、무척(muceg, 非常に)、대단히(daidanhi, 非常に)”の意味を表す。
- ② ‘aju2」の意味―‘aju1」の派生的意味で、“완전히(oanjenhi, 完全に)、전혀(jenhie, 全く)、영영(‘ieng‘ieng, 永遠に)”のような意味を表す。
- ③ ‘aju3」の意味―あざ笑ったり皮肉な語調を表す。他の語と置き換えることが出来ない。

・構文論的特性

- ① ‘aju1」は被修飾語の「程度性」が高いことを表す。この際‘aju」は「‘aju＋形容詞/形容詞句」、「‘aju＋動詞/動詞句」、「‘aju＋名詞」、「‘aju＋副詞」という構文で用いられる。
- ② ‘aju2」は、“매우(mai‘u, とても)、몹시(mobsi, ひどく)”に置き換えられない特徴がある。一部の動詞または名詞的成分の前に置かれ、ある行動や作用または状態がすでに完了し、変更することができないという状態を表す。つまり、動作の完了を表す。

⁴ 유준희(2006)は程度副詞を「絶対的程度副詞」と「相対的程度副詞」に二分し、それぞれの類義語の形態・意味・構文論的特性について考察している。「絶対的程度副詞」とは被修飾語との結合において他の要素と関係がない程度副詞であり(유준희 2006: 18)、「相対的程度副詞」は前後の文脈によって把握されるある基準に対する比較の結果を表す性格が強い程度副詞である(유준희 2006: 92)。

⁵ 유준희(2006)の用語をそのまま引用。

- ③ ‘aju3 は状況依存的であるため、特定の被修飾語がなく、比較的文中で位置が自由である。肯定文では用いられるが、否定文・命令文では用いられない。

次に、徐尙揆(1991)の副詞‘aju の「程度」と「様態」の意味に関する考察をみてみよう。徐尙揆(1991)は‘aju が修飾する対象との意味的關係から‘aju の「程度」と「様態」について考察を行っている。以下、徐尙揆(1991)の研究をまとめる。

・いわゆる<形容詞修飾>の場合

‘aju が形容詞と共起する場合、「様態」より「程度」の意味が圧倒的に目立って表面化する。形容詞の否定形と共起する用例はなく、“-‘e ‘issda (-ている)”の形をとる形容詞と共起する場合、「程度」の意味で用いられる。

- (1) 맥박은 어때? 아주 느려요. 《소설 301》

「脈搏はどう？とても鈍いです。」

徐尙揆(1991: 18)

- (2) 그녀는...대견스러운지 아주 기분이 좋아 있었다. 《엑스 76》

「彼女は殊勝に思えたのかとても気分がよくなっていた。」

徐尙揆(1991: 19)

形容詞に状態の変化の意味が強く現れる場合、「様態」の意味が相対的に強くなると述べている。例(3)のように「完全に(そんな状態になったのではない)」という意味で用いられる場合に、‘aju は形容詞に新しく与えられた変化の意味に注目しつつそれを量的に把握しながら、様態副詞のような用法に近付いていると説明している。

- (3) 아주 {어려운 / 틀린} 건 아니다. 노력하면 더 나아질 수도 있다.

「完全に {難しくなった / 駄目になった} のではない。努力すればもっとよくなることもある。」

徐尙揆(1991: 20)

・いわゆる<動詞修飾>の場合

‘aju が動詞と結合する場合、「程度」と「様態」の意味の張り合いが最も激しくなる。‘aju が動詞を修飾し、「程度」の意味を表す場合は、“-jida(-くなる)、-hada(-がる)”の補助動詞によって派生される。主に変化や心理などを表す動詞、または“形容詞+bo‘ida(見える)”などと共起した場合、「様態」の意味は出ず「程度」の意味のみが表面化する傾向があると述べている。

- (4) a. 절차도 예전같지 않고 아주 쉬워졌습니다.

「手続きも昔とは違ってとても易しくなりました。」

b. 아내는...자신이 아주 초라해 보인다고 여기는 눈치였다.

「妻は...自分がとても衰えに見えると思っている様子だった。」 徐尙揆(1991: 23)

動詞と結合し、「様態」の意味が強くなる場合、「aju」は命令文・勧誘文で自由に用いられる特徴がある。このような場合、「aju」は、何らかの動作が二度と繰り返されることなく完全に終わってしまうという意味で用いられる。従って、「aju」の修飾対象には、何らかの動作・行為の終わり・完結・完了を示す動詞が最も頻繁に現れる。

(5) 아주 오늘 날을 {잡자 / 잡아라}. 《朝鮮 178》

「きっぱりきょう{日を決めよう / 決めなさい}。」 徐尙揆(1991: 25)

・いわゆる<存在詞修飾>・<名詞修飾>・<副詞修飾>の場合

‘aju」が存在詞を修飾する場合、「程度」の意味が強く現れ、「様態」の意味としては殆ど現れない。‘aju」が「程度」の意味を表す場合、“issda(ある/いる)”とは共起できず、もっぱら“ebsda(ない)”としか共起しないと述べている。

‘aju」が名詞を修飾する場合も、「程度」の意味が強く現れる。「様態」の意味が表面にでることは難しいが、否定文に用いられる場合には「様態」の意味が強くなると述べている。

(6) 이건 아주 함복은 아니다.

「これは、完全な降伏ではない。」 徐尙揆(1991: 39)

‘aju」が副詞を修飾する場合、‘aju」は普通に程度副詞として機能するという。‘aju」の修飾を受ける副詞は様態副詞であり、時間副詞や場所副詞も修飾する。このような場合、‘aju」は主に「程度」の意味で用いられ、「様態」の意味では用いられないと述べている。

(7) a. 아주 {간혹 / 가끔} 집에 들르곤 했다. 《가득 38》

「とても{時折 / 時々}家に立ち寄ったりしていた。」

b. 아주 멀리서 문 닫히는 소리. 《사랑 53》

「とても遠くから門が閉まる音。」

徐尙揆(1991: 48-9)

1.3. 先行研究のまとめ

以上、辞書における‘aju」の定義及び程度副詞の下位分類においての‘aju」の位置、‘aju」に関する研究についてみてみた。先行研究において、以下のような問題点を指摘することができる。

- 유춘희(2006)は‘aju」をその意味によって‘aju1, 2, 3」に分け、考察を行っているが、‘aju1

については程度副詞であると認めているものの、‘aju2, 3 についてこれらがどのような副詞であるかに関する詳しい記述が見当たらない。

- 徐尙揆(1991)は‘aju の両面性についての最も詳しい研究である。しかし、程度副詞と様態副詞の判断基準が修飾を受ける語との意味的關係に偏っており、統語的観点からの詳しい考察は行われていない。さらに、被修飾語の品詞分類が曖昧であるという問題点もある。

このような点を踏まえ、本稿では大きく程度副詞‘aju とそれ以外の‘aju に二分し、程度副詞としての意味や特徴、程度副詞ではない場合の意味や特徴について考察していく。

2. 研究方法

2.1. 用例抽出

用例の抽出において、국립국어연구원(2010)の『세종말뭉치 2010 배포판(世宗コーパス 2010 配布版)』を用い、用例の検索においては꼬꼬마 세종 말뭉치 활용 시스템(ココマ世宗コーパス活用システム、以下 KKMA)を用いる。KKMA から得られた‘aju の用例は全 6200 例であり、その内書き言葉が 5632 例、話し言葉が 568 例である。

今回の調査では書き言葉資料を中心に考察を行い、用例収集において地の文と会話文を分け、地の文のみ扱う。KKMA の検索から用例が出た順番で、地の文 300 例を考察対象とする。

2.2. 分析方法

서상규(1991)における程度副詞の下位分類をみると、「評価性が強い程度副詞」と「様態性が強い程度副詞」の二つの‘aju があることが分かる。本稿では先行研究の記述を参考にし、研究方法においては、以下の順番で分析を行う。

(ア) ‘aju が修飾する成分を品詞別に分類する。유준희(2006)によると、‘aju が程度性を表す場合、「形容詞、動詞、副詞、名詞、存在詞」の前に置かれるという記述を参考にし、被修飾語を品詞別に分類する。

(イ) 被修飾語と‘aju との意味関係から程度副詞‘aju を取り出す。‘aju が程度性を表す場合、“매우(mai‘u, とても)、몹시(mobsi, ひどく)”と置き換えられるが、程度性を表さない場合は置き換えられないという記述から程度副詞‘aju を取り出す。程度副詞‘aju が表す意味や統語的特徴について考察する。

(ウ) “매우(mai‘u, とても)、몹시(mobsi, ひどく)”と置き換えられない‘aju はどのようなものなのか、その意味と統語的特徴について分析を行う。

以上の順で副詞‘aju’に関する意味・統語的考察をしつつ、書き言葉における‘aju’の特徴を明らかにしていく。

3. 考察

‘aju’が修飾している被修飾語を品詞別に分類した結果及びその品詞別に程度副詞 “mai‘u (とても)、mobsi (ひどく)” と置き換えられる‘aju’とそれ以外の‘aju’を分類した結果を以下の表にまとめて示す。

表 1. 被修飾語の品詞別分類及び用例の内訳

品詞	程度副詞‘aju	程度副詞ではない‘aju	判断が曖昧な‘aju	合計
形容詞	172 例	0 例	5 例	177 例
副詞	63 例	7 例		70 例
動詞	6 例	13 例		19 例
名詞	22 例	0 例		22 例
存在詞	4 例	8 例		12 例
合計	267 例	28 例	5 例	300 例

以下、程度副詞‘aju’とそれ以外の‘aju’の意味・統語的特徴についてその品詞別に用例が多い順で考察していく。

3.1. 程度副詞として用いられる ‘aju’の意味・統語的特徴

表 1 をみると、程度副詞‘aju’は形容詞を最も多く修飾し、次いで他の副詞や名詞を修飾することが分かる。程度副詞‘aju’が被修飾語を修飾する際、品詞別にどのような特徴があるのかについてみていく。

3.1.1. 形容詞修飾の場合

‘aju’が形容詞を修飾する場合、“mai‘u (とても)、mobsi (ひどく)”などの程度副詞と置き換えられ、被修飾語の程度を強くする意味で用いられる。主に‘aju’は形容詞の直前または「連体形＋名詞」の前に置かれ、普通の程度を遥かに越えている状態を修飾する(例 8, 9)。

- (8) go-‘ir-ddai ha-n ban-‘i-ess-den mijin-‘i-nyn junhaggio
 高校-1-時 一つ-ATTR クラス-COP-PAST-REC.ATTR PSN-TOP 中学校
 ddai-bute na-rang **‘aju** cinha-iss-da [BRIO0143]
 時-ABL 1.PRN-COM 親しい-PAST-IND
 「高 1 の時、同じクラスだったミジンが中学校の時から私ととても仲が良かった。」

- (9) gyri~~go~~ gabjagi nai meri ‘ui-‘eise **‘aju**
 そして 急に 1.PRN.POSS 頭 上-LOC
 kedara-n bimieng sori-ga dyrri-ess-da [BREO0306]
 大きい-ATTR 悲鳴 声-NOM 聞こえる-PAST-IND
 「そして急に私の頭の上でとても大きい悲鳴の音が聞こえた。」

例(10)の “‘aju geri-ga men(とても距離が遠い)” は “geri-ga ‘aju men(距離がとても遠い)” のように、いわゆる二重主語の構文では、‘aju は形容詞の直前ではなくその移動が自由であることが分かる⁶。

- (10) ‘uemhor-‘yn **‘aju** { geri-ga me-n ji‘ieg-‘yr} bic-‘yi
 ワームホール-TOP 距離-NOM 遠い-ATTR 地域-ACC 光-GEN
 sogdo-boda bbarri tonggoaha-r su ‘iss-nyn sigonggan-‘yi
 速度-より 早く 通過する-ATTR BN. ある-ATTR 時空間-GEN
 jiryngir-‘i-ra ha-r su ‘issda [BRAA0013]
 近道-COP-QUOT する-ATTR BN ある-IND
 「ワームホールはとても {距離が遠い二つの地域} を光の速度より早く通過することができる時空間の近道だと言える。」

徐尙揆(1991)は‘aju の用例の中には、形容詞の否定形と共起している用例が見つからなかったと述べられている。今回のコーパス調査でも、形容詞の否定形と共起し、なおかつ程度を表す用例は見つからなかったが、インターネット上で以下のような用例がいくつか見受けられた。以下に例を挙げておく。

- (11) gengang-‘ei **‘aju** joh-ji‘anh-‘yn ‘ymsig cikin⁷
 健康-ALL 良い-NEG-ATTR 食べ物 チキン
 「健康に非常に良くない食べ物チキン。」

このような場合の‘aju は「何よりも最も健康に良くないものはチキンである」と良くないことを強調する働きをしていると思われる。

3.1.2. 副詞修飾の場合

次に多く表れた用例は‘aju が他の副詞を修飾する場合である。最も多く現れた他の副詞は

⁶ 徐尙揆(1991:19)を参照。

⁷ 2012 年 10 月 23 日韓国インターネットサイト www.naver.com で “아주” を検索キーワードとして検索。
 ブログ blog.naver.com/rladmsalxla/100169990533

“jar (よく)、cencenhi (ゆっくり)” や形容詞から転成された状態副詞で、全 62 例の内 49 例表れた。

- (12) gynie-nyn ganbam-‘ei jam-‘yr **‘aju** jar ja-ss-da [BRE00304]
 3.PRN-TOP 昨夜-ALL 眠り-ACC よく 寝る-PAST-IND
 「彼女は昨夜とてもぐっすり眠れた。」

- (13) sarang-‘yr ha-miense **‘aju** senmiengha-gei je-ryr
 愛-ACC する-CVB 鮮明だ-ADLZ 1.PRN-ACC
 bicu-nyn ge‘ur-‘yr hana ‘ed-‘ess-sybnida [BRBF0260]
 照らす-ATTR 鏡-ACC 一つ 得る-PAST-HON.IND
 「恋をしながら、とても鮮明に私を照らしてくれる鏡をひとつ貰いました。」

副詞‘aju は状態副詞を自由に修飾することができるが、程度副詞の修飾においては制限的である。今回の調査で、‘aju が修飾できる程度副詞は“jogym (少し)” しか表れていない。‘aju は程度が高く、なおかつ比較性がある副詞“gajang (一番)、huerssin (遥かに)” などを修飾できないと思われる。なぜなら、‘aju は被修飾語の程度を「普通より遥かに越える」と程度を高くする働きをし、比較する対象がない状態を表す。従って、‘aju とその意味が同様である副詞の修飾はできないと思われる。また、数は少ないが例(15)のように時間副詞のうち、「時の頻度・反復性を表す副詞(최현배 1937)」を修飾する用例も得られた。

- (14) na-‘yi ja‘a-ga k-e ga-nyn sori-ryr na-nyn dyr-‘yr
 1.PRN-GEN エゴ-NOM 大きい-CVB 行く-ATTR 音-ACC 1.PRN-TOP 聞く-ATTR
 su ‘issda mai‘ir **‘aju** jogym-ssig jogym-ssig [BRIO0143]
 BN ある.IND 毎日 少しずつ 少しずつ
 「私のエゴが大きくなっていく音を私は聞くことができる。毎日とても少しずつ、少しずつ。」

- (15) ‘iren goanggieng-‘yn se‘ur sinai gosgos-‘ei giocar-‘eise
 このような 光景-TOP ソウル 市内 あちこち-GEN 交差点-LOC
‘aju jaju bo-r su ‘issda [BRAB0022]
 しばしば 見る-ATTR BN ある.IND
 「このような光景はソウル市内のあちこちの交差点で非常に頻繁に見られる。」

3.1.3. 名詞・動詞・存在詞修飾の場合

‘aju が名詞を修飾する場合、‘aju は程度副詞としての働きをする。コーパスから得られた用例は全て程度副詞としての‘aju であり、その内 11 例は時間・空間を表す名詞である。‘aju

は名詞の直前に置かれ、「程度」の意味で用いられている。残り 11 例は、“名詞+コピュラ‘ida (-である)”や“名詞+gatda (-のようだ)”のように述語の形式として‘aju の修飾を受けている用例である。述語形式に用いられている名詞は“jeggygjeg (積極的)、guceijeg (具体的)、jenmunjeg (専門的)”のような形容名詞⁸が殆どである(例 17)。

- (16) **‘aju** ‘ieisnar jangsa jar ha-gi-ro irymna-ss-den
 昔 商売 よく する-NMLZ-INS 有名になる-PAST-REC.ATTR
- ‘ienggug-‘yi jangsaggun mo‘im-‘i-n sangsa-hiebhohi-giu‘iag-‘ei
 イギリス-GEN 商人 集まり-COP-ATTR 商社-協会-規約-ALL
- ‘iren giu‘iag-‘i ‘iss-‘ess-da-go handa [BRBF0267]
 このような 規約-NOM ある-PAST-QUOT-CVB する.IND
- 「遙か昔、商売上手で有名だったイギリスの商人の集まりである商社協会規約にこのような規約があったという。」

- (17) gy-nyn gugnai‘oi goahagja-dyr-go-‘yi jeihui-‘ei daiha-ise-n
 3.PRN-TOP 国内外 科学者-PL-COM-GEN 提携-ALL 対する-CVB-TOP
- ‘aju** jeggygjeg-ida [BRAA0155]
 積極的-COP.IND
- 「彼は国内外科学者達との提携についてはとても積極的だ。」

程度副詞は主に形容詞・一部の動詞・他の副詞・名詞を修飾し、その被修飾語の程度を高くしたり低くしたりする働きをする。主に形容詞を修飾するので、今回の調査では‘aju が動詞を修飾する用例は 6 例しか現れていない。副詞‘aju が修飾する動詞は「状態性」と「結果性」を持っていることが特徴である(例 18, 19)。

- (18) sarytyry-‘yi jajenjeg caig-‘i-n mar magerismidy-‘yi jasejen
 PSN-GEN 自伝的 本-COP-ATTR 言葉 PSN-GEN 自叙伝
- gyrigo rusybeineidigty-‘yi jengi-nyn gyren mien-‘eise
 そして PSN-GEN 伝記-TOP そのような 面-LOC
- ‘aju** gi‘eg-‘ei namnynda [BRAE0198]
 記憶-ALL 残る.IND
- 「サルトルの自伝的な本である<言葉>、マーガレット・ミードの自叙伝、そしてルーズ・ベネディクトの伝記はそのような面でとても記憶に残る。」

- (19) tyghi 1960-niendai-‘oa 1970-niendai-‘ei-nyn gabsbissa-n jujensangi-‘oa

⁸ 野間秀樹(1990: 8)における朝鮮語の名詞分類を参照。

特に	1960-年代-COM	1970-年代-ALL-TOP	高い-ATTR	計電算機-COM		
mini-kempiute	gisur-‘yr	jibaiha-‘iess-‘ymyro	kempiute-ryr	sa-r	su	
ミニ-パソコン	技術-ACC	支配する-PAST-CVB	パソコン-ACC	買う-ATTR	BN	
‘iss-nyn	gogaig-‘i	‘aju	jeihan-doi-‘e	‘iss-‘ess-go	ddarase	
ある-ATTR	顧客-NOM		制限-PASS-CVB	ある-PAST-CVB	従って	
‘ieng‘eb-bimir-‘yn	kempiute	gisur-‘yr	bohoha-nyn	jung‘ioha-n		
営業-秘密-TOP	パソコン	技術-ACC	保護する-ATTR	大事だ-ATTR		
sudan-‘i-‘essda	[BRBG0273]					
手段-COP-PAST.IND						

「特に 1960 年代と 1970 年代には高い計算・電算機とミニパソコンがパソコン技術を支配していたので、パソコンを買える顧客がとても制限されており、従って営業上の秘密はパソコン技術を保護する重要な手段だった。」

‘aju が存在詞を修飾する用例をみてみよう。程度副詞として用いられ、存在詞を修飾する用例は僅か 4 例しか現れていない。その 4 例の特徴は副詞‘aju が存在詞“‘issda (ある/いる)”を直接修飾することはできず、「‘aju＋抽象名詞＋存在詞」の形式で‘aju はコピュラ文と同じく存在文全体を修飾する。今回の用例では、“bagjingam (迫真感)、johoa (調和)、syrir (スリル)、‘uengi (元気)”のような抽象名詞が現れた。以下に例を挙げておく。

(20)	jigym	sainggagha-i	bo-mein	gyri	daidanha-n	‘ir-do	‘ani-go
今	考える-CVB		みる-COND	そんなに	重要だ-ATTR	こと-EMPH	NEG-CVB
gyrehgei	‘iersimhi	sur-‘yr	masie-‘ia	ha-iss-den	ggadarg-do		
そんなに	一所懸命	お酒-ACC	飲む-EMPH	する-PAST-REC.ATTR	理由-EMPH		
‘ebs-‘ess-jiman	gy	dangsi-‘ei-n	‘aju	syrir-‘iss-‘ess-go	narymdairo		
ない-PAST-CVB	その	当時-ALL-TOP		スリル-ある-PAST-CVB	自分なりに		
simgagha-iss-den	ges	gatda	[BRIO0143]				
深刻だ-PAST-REC.ATTR	BN	ようだ.IND					

「今考えてみるとそんなに大したことでもなかったし、そんなに一所懸命お酒を飲む理由もなかったが、その当時はとてもスリルがあつて、自分なりに深刻だったようだ。」

3.2. 程度副詞以外の ‘aju’ について

副詞‘aju が程度副詞以外の働きををすると思われる用例は 33 例しか現れていない。その用例の数は少ないが、程度副詞以外の‘aju はどのような意味で用いられているのかに焦点を当て、考察していく。

まず、一番用例の数が多かった動詞修飾の場合からみてみよう。程度副詞ではない‘aju は、“mai‘u (とても)、mobsi (ひどく)”と置き換えることはできず、“oanjenhi (完全に)、jenhie (全

く)”と置き換えることができる。つまり、유춘희(2006)で述べられている‘aju2 に当たる。以下に用例を挙げておく。

- | | | | | | | |
|------|--------------------|----------------|-------------------|-------------|---------|---------|
| (21) | gynie-nyn | hie-ryr | mur-‘ess-da | gosaing-‘yr | ha-nyn | gim-‘ei |
| | 3.PRN-TOP | 舌-ACC | 嚙む-PASS-IND | 苦労-ACC | する-ATTR | BN-ALL |
| | <u>‘aju</u> | ha-iberi-ja-go | sainggagha-iss-da | [BRE00080] | | |
| | する-ASP-CHR-CVB | | 考える-PAST-IND | | | |

「彼女は舌を嚙んだ。苦勞するついでに全部やってしまおうと考えた。」

- (22) 'abeji-nyn nai-ga gasna-n sijer-'ei gohiang-'yr ddena-ss-daga
お父さん-TOP 1.PRN-NOM 幼い-ATTR 時-ALL 故郷-ACC 離れる-PAST-CVB
[aju] dor'a'o-n ges-'yn haibang jen hai-'iess-da[BREO0296]
帰ってくる-ATTR BN-TOP 解放 前 年-PAST-IND

「お父さんは私が赤ちゃんの時、故郷を離れたが、完全に帰ってきたのは解放前の年だった。」

‘aju が動詞を修飾する場合、その形態的特徴は、まず、例(21)のようにある動作を完全に完了させる表現 “-‘a/‘e berida (-してしまう)” が用いられる動詞が‘aju の修飾を受けるということである(全 13 例の内 3 例)。さらに、“-‘a/‘e berida (-してしまう)” の文末形式が「～しよう」という話者の意志を表すモダリティと一緒に用いられることから、‘aju は文末形式との関係がある陳述副詞としての働きをすると考え得る。また、例(22)のように “dor‘a‘oda (戻ってくる)” や “dor‘agasida(お亡くなりになる)” のように「動作性」と「完了性」がある動詞をよく修飾している。このようなことから、陳述副詞としての‘aju は「動作性」と「完了性」がある動詞を修飾し、意味的には「完全に、全部」の意味で用いられ、意志を表す文末形式と共に起しうるということが明らかになった。

次に、存在詞を修飾する際の‘aju’についてみてみよう。程度副詞‘aju’の場合、「抽象名詞＋存在詞‘issda」の形式を修飾するが、存在詞“‘issda(ある / いる)”を直接修飾することができなかった。しかし、程度副詞ではない‘aju’の場合、存在詞“‘ebsda(無い)”を直接修飾できる。存在詞“‘ebsda(無い)”が用いられている文の特徴は“‘ebs-nyn ges-‘yn ‘anida(無いわけではない)”のような断言の文末表現や“‘ebda-go-nyn harsu‘eb‘yr ges‘ida(無いとは言えないだろう)”のような可能性の推測の文末表現と共起することである(例 23, 24)。

- (23) murren gongsang-‘ina mangsang-‘yi him-‘yro ssy-‘eiji-nyn
 もちろん 空想-や 妄想-GEN 力-INS 書く-PASS-TOP
 soser-‘i **‘aju** ‘ebs-nyn ges-‘yn ‘anida [BRHO0402]
 小説-NOM ない-ATTR BN-EMPH NEG.IND

「もちろん空想や妄想の力で書かれる小説が全くないわけではない。」

- (24) ‘emeni-‘yi tas-do **‘aju** ‘ebsda-go-nyn ha-r su ‘ebs-‘yr
お母さん-GEN せい-EMPH 無い-CVB-TOP する-ATTR BN ない-ACC
ges-‘ida [BREO0296]
BN COP.IND

「お母さんのせいが全くないとは言えないだろう。」

‘aju が他の程度副詞や状態副詞、時間副詞を修飾する際は、程度副詞としての働きをし、被修飾語の「程度」を表す。程度副詞ではない場合の‘aju も程度副詞や状態副詞を修飾している。しかし、被修飾語との意味的關係からその意味は例(25)-(27)のように、程度の意味は薄くなる。例(25)は「すっかり忘れている状態」を、例(26)は「放置しておいた状況」を、例(27)は「結果的に何もない状態」を‘aju が強くする働きをしていると思われる。

- (25) ddaironyn **‘aju** ggamah-gei ‘ij-‘ess-den ‘ieisnar-‘i
時には 黒い-ADLZ 忘れる-PAST-REC.ATTR 昔-NOM
piercieji-gi-do handa [BRBF0265]
広がる-NMLZ-EMPH する.IND

「時にはすっかり忘れていた昔のことが頭の中にパーッと広がることもある。」

- (26) ‘onyr mos ha-mien **‘aju** bom-ggaji gydairo du-r
今日 NEG する-POT 春-TER そのまま 置く-ATTR
bben ha-iss-den ges-‘ida [BRGO0352]
BN する-PAST-REC.ATTR BN-COP.IND

「今日出来なかったら、完全に春までそのまま置いておくところだった。」

- (27) ‘ijaipir-‘i bie-‘ei nam-‘yn sur-‘yr sengjin-‘yi jan-‘ei
PSN -NOM 瓶-ALL 残っている-ATTR お酒-ACC PSN-GEN グラス-ALL
ddaryda mar-go haisug-‘eigei sur dai‘ieses bieng-‘yr
そそぐ.SIM 止める-CVB PSN-DAT お酒 5,6 瓶-ACC
‘aju hanggeben-‘ei nai‘enoh-‘yra-go magha-iss-da [BREO0080]
いっぺんに-ALL 出しておく-IMP-QUOT 言う-PAST-IND

「イジェピルが瓶に残っているお酒をソンジンのグラスにそそぐのを止めて、ヘスクにお酒の瓶を全部いっぺんに出せと言った。」

3.3. 判断が曖昧である ‘aju

程度副詞の‘aju と程度副詞ではない‘aju の判断において、その意味的判断が曖昧であった‘aju をみてみよう。用例の内訳は形容詞“daryda (異なる)”が用いられている用例が3例、否定形が用いられている形容詞句が2例である。その用例を挙げておく。

- (28) gyriogo ga-nyn sigan sei‘uer-‘yi sogdo-ga **‘aju**
 そして 行く-ATTR 時間 歳月-GEN 速度-NOM
 daryda [BRBF0267]
 異なる.IND
 「そして過ぎていく時間、時の速度がとても / 全く異なる。」
- (29) giarymha-n mosyb-‘i-rago se‘iang-‘yi ‘ergur-‘yr daibiebha-nyn
 やや細長い-ATTR 姿-COP-QUOT 西洋-GEN 顔-ACC 代弁する-ATTR
 ‘aju giarymha-n hieng-‘yn ‘anida [BRBD0066]
 やや細長い-ATTR 形-EMPH NEG.IND
 「細長い形だといっても、西洋の顔を代表するとても / 完全に細長い形ではない。」

例(28)は“daryda (異なる / 違う)”という形容詞を修飾する用例である。このような場合、‘aju は「とても異なる」のように「程度」を表したり、「全く異なる」という「状態」を表したり、程度と状態を両方表しうる。例(29)も同様に、「とても細長い形」のように「程度」を表したり、「完全に細長い形ではない」と否定の表現と共に陳述副詞のような振る舞いをしたりする。

このように、程度と陳述の間で揺れが見られる文の特徴について詳しく考察する必要がある。今回の考察ではその用例が少なく、揺れが見られる文の特徴について考察することが出来なかった。程度と陳述の間で揺れが見られる文の特徴については今後詳しく考察していきたい。

3.4. まとめ

以上、書き言葉コーパスから収集した用例を中心に、程度副詞‘aju と程度副詞ではない‘aju の意味と統語的特徴について考察した。考察の結果を以下の表にまとめて示す。

表 2. 程度副詞‘aju と程度副詞ではない‘aju の意味と特徴

	程度副詞‘aju	それ以外の‘aju
形容詞修飾の場合	・形容詞の直前に置かれ、被修飾語の程度を強くする。 ・<u>形容詞の否定形と共起できる。</u>	・用例無し
副詞修飾の場合	・状態副詞、程度副詞、時間副詞を修飾する。 ・被修飾語の程度が普通より遥かに高い意味で用いられる。	・状態副詞、程度副詞を修飾する。 ・「完全に、全部」の意味で用いられる。
動詞修飾の場合	・<u>「状態性」、「結果性」がある動詞を修飾する。</u>	・他の品詞に比べ、最も‘aju の修飾を受けられる。 ・<u>「動作性」、「完了性」がある動詞を修飾し、意志を表す文末表現と共起しうる。</u>
名詞修飾の場合	・時間 / 空間名詞や形容名詞を修飾する。 ・時間 / 空間名詞の場合、単独で‘aju の修飾を受けることができるが、形容名詞の場合コピュラ文の述語形式として修飾を受ける。	・用例無し。
存在詞修飾の場合	・‘issda を直接修飾することはできない。主に「抽象名詞＋‘issda」の形式で‘aju の修飾を受ける。	・‘ebsda を修飾し、<u>断言や可能性の推測の文末表現と共起しうる。</u> ・「全く、全然」の意味で用いられる。

4. おわりに

今回の考察では、辞書の定義にあるように副詞‘aju には「とても」のような「ある基準を遥かに越える程度」を表す程度副詞‘aju と、「完全に、全く、全部」のようにある状態をもっと詳しく述べる状態副詞としての‘aju があることが確認できた。また、動詞修飾においては文末のモダリティと関係があることも明らかになった。

しかし、今回の調査では、先行研究における話者の皮肉なニュアンスが含まれている‘aju の確認はできなかったこと、また、判断が曖昧である用例の数が少なく、どのような表現で程度と陳述の間で揺れがみられるのかの考察もできなかったことなど様々な問題点が残されている。以上のことを踏まえ、今後話し言葉コーパスから用例を収集し、副詞‘aju に関

する両面的な意味を詳しく考察していきたい。

【略語一覧】

1, 3: 1人称、3人称 / ABL: 奪格 / ACC: 対格 / ADLZ: 副詞化 / ALL: 向格 / ASP: アスペクト / ATTR: 連体形 / BN: 依存名詞 / CAUS: 使役 / CHR: 勧誘 / COM: 共格 / COND: 条件 / COP: コピュラ / CVB: 副動詞 / DAT: 与格 / EMPH: 強調 / GEN: 属格 / HON: 敬称 / IMP: 命令 / IND: 直接法 / INS: 具格 / LOC: 位格 / NEG: 否定 / NMLZ: 名詞化 / NOM: 主格 / PASS: 受身 / PAST: 過去 / PL: 複数 / POSS: 所有 / POT: 可能 / PRN: 人称代名詞 / QUOT: 引用 / REC: 回想 / SIM: 同時 / TER: 到格 / TOP: 主題 / -: 形態素境界

【参考文献】

・日本語で書かれた文献

梅田博之 (1989) 「朝鮮語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』2巻: 951-980 東京: 三省堂 / 菅野裕臣 (1981) 『朝鮮語の入門』 東京: 白水社 / 河野六郎 (1979) 『河野六郎著作集第1巻』 東京: 平凡社 / 徐尙揆 (1991) 「現代朝鮮語の程度副詞について—副詞〈아주〉の〈程度〉と〈様態〉の意味を中心に—」『朝鮮学報』第140輯 :1-62 天理: 朝鮮学会 / 野間秀樹 (1990) 「朝鮮語の名詞分類—語彙論・文法論のため—」『朝鮮学報』135輯 天理: 朝鮮学会: 1-59

・韓国語で書かれた文献

김영희 (1985) 「셈술말로서의 정도부사」『한글』190 한글학회 / 남기심・고영근 (1985) 『표준국어문법론』 서울: 탑출판사 / 서상규 (1991) 「정도부사에 대한 국어학사적인 조명과 그 분류에 대해」『연세어문』23집 연세대학교 국어국문과 / 손남익 (1995) 「국어 부사 연구」고려대학교 대학원 국어국문학과 박사학위논문 / 유춘희 (2006) 『한국어 정도부사 연구-유의어를 중심으로』北京: 民族出版社 / 최홍열 (2005) 『정도부사의 유의어 연구』서울: 도서출판 역락 / 최현배 (1937) 『우리말본』서울: 정음문화사 / 홍사만 (2002) 「국어 정도부사의 하위 분류」『어문론총』36호 경북어문학회

・辞書

菅野裕臣ほか共編 (1988) 『コスモス朝和辞典』東京: 白水社 / 국립국어연구원 (1999) 『표준국어대사전』서울: 두산동아 / 연세대학교 언어정보개발원(1998) 『연세한국어사전』서울: 두산동아

【コーパス】

コーパス <http://kkma.snu.ac.kr> (2012/10/12)

A Consideration of Adverb “*aju*” in Korean
― From the Analysis of the Written Language Corpus ―

Jihye Ahn
(Tokyo University of Foreign Studies, Ph.D Candidate)

Key words : Korean, Degree adverb, Statement adverb, Relation of Modification, Modality

ABSTRACT

The topic of this paper is to clarify the characteristic of adverb “*aju*” in Korean. Based on the data taken from a written language corpus, this paper will discuss the semantic and syntactic characteristics of degree adverb “*aju*” and statement adverb “*aju*”.

The degree adverb “*aju*” means that the degree is high. In the modification a part of speech, the degree adverb “*aju*” can modify verbs, adjectives, adverbs, nouns, and existential “*issda*”. Among its part of speech, the adjectives are the most modified of “*aju*”.

The statement adverb “*aju*” means that some movement is completely over. The statement adverb “*aju*” can modify verbs, adverbs, and existential “*ebda*”. It is connected with the modality of the end of sentences. Particularly, it is co-occurred with the modality of will and presumption.

ジンポー語の動詞文標識にみられる sə-の機能

大西 秀幸

(東京外国語大学大学院博士後期課程)

キーワード: チベット・ビルマ語派、ジンポー語、アスペクト、mirativity、evidentiality

1. はじめに

ジンポー語¹に関するこれまでの研究の中では以下に示す2文の対立について様々な説明がなされてきた。

(1)a. ɲay p^hay sawa¹ ay.

1.SG 右 行く IND.REL

(1)b. ɲay p^hay sawa¹ sə-ay.

1.SG 右 行く sə-IND.IRR

「私は右に行った。」

(いずれも筆者作例)

(1)a, b はいずれも陳述法・現実を表す文だが、話し手は必ず sə-を付加するか否かを選択しなければならない。故に(1)a と b が表すそれぞれの意味は、A v.s. not A の関係になる。先行研究ではこの2項対立に着目し、sə-が付加されることによって生じる対立が、何を動機として起こるのかについて説明を試みている²。

古くは、Hanson(1896)、Hertz(1954)でテンスの対立として説明され、最近の研究ではアスペクトの対立としてみるものが多い。

本研究では、sə-が用いられる文が実現する意味に着目しながら、その接辞が持つ根本的な機能を探る。先行研究ではsə-が「事態の変化の局面」をマークするというアスペクチュアルな意味に焦点を当てて記述されていたが、むしろ事例からは「話し手の非意図性」、「話し手の発見、気づき」、「聞き手への情報提示」といった、いわゆるmirative(DeLancey 2001)や、evidential(Aikhenvald 2004)に関係するような話し手が事態をどう認識したかを表す機能が前面に出る例が多いことが分か

¹ ビルマの北部カチン州からインドの東北部のアッサム州と中国の雲南省の西南部に渡る広範囲に分布する。それぞれに方言がある。系統はチベット・ビルマ語派に属すがその中でどの位置に属するのかはまだはっきりとは分らない(西田 1992: 1187 を要約)。ジンポー語の話者人口の正確な数字は不明であり、24 万人(澤田 1998)、63 万人(藪 2001)などの報告がある。類型論的特徴を示す、基本語順が SOV である。基本的に従属部標示型の言語であり、格は名詞句に標示される。ただし、項の人称・数が任意で節の主要部である動詞文標識に標示されることがある。他動詞節における格標示は、主格-対格型である。本稿におけるジンポー語の表記を示す。ジンポー語の音節構造は(C₁(C₂))V(C₃)/T であり、C₀またはC₂は、C₁と共にしか現れない。鼻音/n/は単独で音節をなすこともある。C₀、C₁、C₂、C₃には子音、V スロットは母音が埋める。ジンポー語には音素がある。母音: 10 個/i, e, a, o, u, ɪ, ɛ, ə, ʊ, ʌ/下線は緊喉母音を示す。子音: 19 個/p, t, k, p^h, t^h, k^h, ʔ, tʰ, tʰ, c[te], f, s, e, h, m, n, ŋ, N, w, y[j], l, r[ɾ ~ ɟ]/、C₀にはʔ, N/が現れる。超分節音素として声調は 4 個 a^[33], a^[31], a^[55], a^[51]。2 音節語の初頭音節が軽声化する場合、母音は ə で代表させる。

² 先行研究は基本的に、形態論的な ay と sə-ay の対立は語形変化による対立であるとみている。しかし筆者は ay に屈折接辞 sə-を付加したものが sə-ay であると考えている。これは形態音韻論的規則を用いれば、ほとんどの場合接辞の付加という説明が可能だからである。

る。

そこで本稿では、まず話し手の事態の認識のあり方に着目しながら *sa-* がいくつかの機能に分類できることを指摘し、*sa-* が 1 つの機能では説明するのが難しい多義的なものであることを示す。そして *sa-* の多義性がすべて、派生の関連性を持つ一義に帰するものであるかを検討する。具体的な結論として、*sa-* の多義性は「話し手にとって事態が非意図であることを表す機能」から派生したものであると主張する。

以下、例文の番号、グロス、日本語訳、外国語文献の日本語訳はすべて筆者による。またジンポー語の表記は出典に関わらず発表者の設定した音韻体系に基づく音素表記を行う。語境界は正書法³に基づきスペースを用いる。

1.1. 本研究を理解するために必要な文法事項

ここでは、本稿で述べていることを理解するために必要と考えられるジンポー語の文法事項について動詞文標識と、接頭辞 *sa-* の諸特徴についてとりあげる。

1.1.1. 動詞文標識

本稿では、接頭辞 *sa-* が動詞文標識に現れる要素であるということを前提にしている。よってここで動詞文標識について解説する。

ジンポー語では、述語(predicate)が節(clause)の末尾に置かれ、項(argument)や付加語(adjunct)がその前に現れる。動詞述語文の場合、動詞文であることを示す標識(verb sentence marker)が動詞に後接する。つまり、文であればほとんどの場合 1 つの動詞文標識が現れる⁴。ジンポー語の動詞文標識の特徴として法、項の人称・数の組み合わせによって複雑な屈折を引き起こす⁵ということが挙げられる。次の 4 つの例文の最後に現れている要素が動詞文標識である。

- (2) *tay* *kuy* *si* *ay*.
 それ 犬 死ぬ IND.REL
 「その犬は死んだ。」
- (3) *ei* *sa* *san na*.
 3.SG 来る 問う IND.IRR
 「彼は質問しにくる。」
- (4) *nan*^{2h}*e* *paynam* *p^he*² *sat*³¹ *ma*¹-*ni*³.
 2.PL ヤギ ACC 殺す PL-Q
 「おまえたちはヤギを殺したの？」

³ 正書法は1890年代、ビルマを訪れたアメリカのバプティスト派の宣教師Ola Hansonによってつくられた(藪2001: 225)。

⁴ これはジンポー語において文を定義する際に役立つが、名詞述語文では動詞文標識は現れないし、明らかに動詞文と考えられるものでも、動詞文標識が現れないものもあるので、完璧な定義にはならない。とはいえ 1 つの強力な基準になることは間違いない。

⁵ 人称による屈折は現代では専ら文語表現に見られ、口語体では省略されることが多い。

- (5) con¹ te¹ sawa rit¹.
 学校 ALL 行く IMP
 「学校に行け。」

(いずれも筆者作例)

例から分かるように、動詞文標識は文の法によってその形態を変えている。(2)は陳述法・現実を、(3)は陳述法・非現実を、(4)は疑問法を、(5)は命令法を表す。(4)では主語の複数を表す接頭辞が動詞文標識に付加されていることが分かる。

前述のように動詞文標識はそれが付加する文が動詞文であることを定義づける働きを持つ。これはビルマ語における「動詞文標識」と機能を共有する(Okell 1969: 189を参照されたい)⁶。筆者はジンポー語において同様の機能を持つ文法形式について、ビルマ語の「動詞文標識」との統語的特徴の類似なども鑑み、Okell (1969: 189)の「動詞文標識」という用語を充てる。

動詞文標識がどの語類に属するかについては先行研究によって立場は様々である。倉部(2011)は、その形態統語的特徴から助詞類にまとめている。一方で、戴・徐(1992)、祁(2001)は動詞文標識が屈折を起こすという形態的特徴に着目し、助詞類とは独立した「句尾詞」という語類を立てている。本稿では動詞文標識に現れる接頭辞の機能に焦点を当てるため、動詞文標識自体がどの語類に属するかについては言及しない。

1.1.2. 接頭辞 sə-の分布特徴

sə-は陳述法・現実の文においてのみ現れるものではなく、他の法を表す文にも用いられる。(6)は陳述法・非現実、(7)は疑問法、(8)は命令法の動詞文標識にそれぞれ付加された例である。

- (6) wa¹ sə-na.
 帰る sə-IND.IRR
 「もう帰ります。」

(倉部 2011: 37)

- (7) ei mənə² Ntə³-te¹ wa¹ sə-ni³.
 3.SG 昨日 家-ALL 帰る sə-Q
 「彼は昨日家に帰ったの？」

(B)⁷

- (8) wo²ra³-te¹ sawa¹ sə-u¹.
 あれ-ALL 行く sə-IMP
 「あそこに行きなさい。」

(戴・徐 1992: 270)

このように sə-は様々な動詞文標識の形態に付加されることが実例から分かる。しかし、本研究で用例抽出に用いたテキストデータからは陳述法・現実以外の動詞文標識に付加される例はごく少数であった。従って、sə-の機能分析を行うには少なすぎると判断し、本研究の対象を陳述法・現実の動詞文現れるものに絞った。

⁶ ビルマ語の動詞文標識には屈折が見られない。

⁷ 出典元のテキストデータの通し記号(4.1 参照)。

1.2. 本稿の対象

1.1.2 で挙げた理由から本研究では、陳述法・現実の文に *sə*-が用いられた例のみを研究対象とする。

1.3. 研究の方針

本稿では、従来、*sə*-の機能に対して行われてきたアスペクトの観点からの分析に対し、話し手の事態認識のあり方という新たな観点で *sə*-の機能を分析している。本稿ではそのことを分かりやすく示すために、先行研究の概観である 2 章をアスペクチュアルな意味を表す *sə*-とし、5 章をアスペクチュアルな意味よりも話し手の事態認識のあり方の方が前面に出ていると考えられるものとしてアスペクチュアルな意味を表さない *sə*-としている。

本研究では、*sə*-が一見すると多義的なものであると示した上で、最終的にはすべての機能は 1 つの根本的な機能から派生した機能であると主張する。そのため研究方針としては、*sə*-の機能を多くの実例から抽出し、帰納的に考察する。しかし接頭辞である *sə*-は独立して現れることができないので、*sə*-を用いることで達成される機能を *sə*-が付加された語から抽出する必要がある。とはいえ、*sə*-の付加された語である動詞文標識もまた、独立しては用いられない要素であり、必然的に *sə*-が付加された動詞文標識が用いられる動詞文を考察対象としなければならない。よって筆者は *sə*-が現れる文が表現する意味によって分類し(話し手の非意図、話し手の発見・気づき、聞き手への情報提示)、その文の中で *sə*-がどの意味の具現化に役立つのかということを *sə*-の機能と考えた。

2. アスペクチュアルな意味を表す *sə*-

2.1. 倉部 (2011)

倉部(2011)はミッチーナ方言の全体の記述を試みたものであり、その中で *sə*-の機能を明らかにしている。倉部(2011)は接頭辞 *sə*-の働きが単一の根本的な意味にまとめられるという分析を行っている。

倉部(2011: 25, 26)によると、*sə*-は、開始点であれ、終結点であれ、事態、状況が新しい局面に変化したこと、変化しつつあることを、今のこととして述べる場合に用いられる。

(9)は状態が「空腹だ」という局面に変化したことを表す。*sə*-を用いなければ変化のニュアンスを表すことができない((9)a を参照)。

(9)a. *eat*¹ *ko*²*si* *sə*-ay.

ご飯 空腹だ *sə*-IND.REL

「もうお腹が減った。」

(倉部 2011: 26)

(9)b. *eat*¹ *ko*²*si* say.

ご飯 空腹だ IND.REL

「お腹が減っている。」

(筆者作例)

(10)は「寝る」ことへ向けて局面が変化しつつあることを表している。ここでは事態の変化が今のこととして述べられている点に注目されたい。*sə*-を用いなければ *yup*²「寝た」という事態の実現は過

去の任意の時点、或いは習慣という解釈しかできない。

- (10)a. yup² sə-ay yo³.
 寝る sə-IND.REL [詠嘆]
 「もう寝るよ。」 (倉部 2011: 26)

- (10)b. yup² ay yo³.
 寝る IND.REL [詠嘆]
 「寝たよ / 寝る習慣があるよ。」 (筆者作例)

sə-を用いた場合、未来の事態の変化についても言及できるという点が特徴的である。

- (11) kənwə p^hang na² ɛəta ko¹ k^hərisuma² ɛəta ray² sə-ay.
 弟 次 GEN 月 TOP クリスマス 月 COP sə-IND.REL
 「(呼びかけ)、次の月はもうクリスマスの月になる。」

2.2. 戴・徐(1992)、祁(2001)

戴・徐(1992)、祁(2001)は中国で話されるジンポー語に関する研究である。ミッチーナ方言とは共時的に見れば語彙や文法において違いがみられる以上、接辞の機能についても無批判に分析成果を適用することはできない。ここでは参考としてその議論を述べておく。2つの記述は sə-の機能に対してほとんど共通した記述を行っているため、本稿ではまとめて扱う。

戴・徐(1992: 272)、祁(2001: 75)では sə-の機能が「変化」を表す機能に集約されると述べられている。その上で、聞き手に①ある事態の発生、②ある事態の完成、③ある状態の生起、を伝える働きを持つと記述している。(12)は彼らが知るという事態の発生、(13)は緑に塗るという事態の完成、(14)は赤いという状態が生起したことを表している。

- (12) ɛan² cɛ ma¹-sə-ay.
 3.DU 知る PL-sə-IND.REL
 「彼ら2人は知った。」 (戴・徐 1992: 272)
- (13) ɛi a¹ri ɛətsɿt sə-ay.
 3.SG 線 緑にする sə-IND.REL
 「彼は線を緑に塗ってしまった。」 (祁 2001: 75)
- (14) ləmu¹ k^hye sə-ay.
 空 赤い sə-IND.REL
 「空が赤くなった。」 (戴・徐 1992: 272)

両研究はこれらの意味の具現化を1つの意味に集約し、事態の変化の局面を表すと説明している。

3. 先行研究のまとめと問題提起

ここでは、上記の先行研究における記述結果をまとめ、問題点を整理することで、本研究の問題の所在を提示していく。

倉部(2011)、祁(2001)、戴・徐(1992)の記述では、接頭辞 *sə-* に事態が新たな局面に変化することとしたことを表す働きがあることが指摘されている。3 つの研究の記述に共通する点としては *sə-* の機能がアスペクチュアルな意味を表すという点が挙げられる。

3 つの記述を *sə-* が持つアスペクチュアルの面から捉えると次の 2 点について指摘できる。

- 状態動詞が表す事態の場合は、ある状態の変化の変わり目を抽出するという意味で継続を前提とする状態動詞のアクションザルトの型を変化させる。
- その他の動詞であれば「開始点」と「終了点」という動作における変わり目の局面及びその周辺をマークできる。つまり、接頭辞 *sə-* が表す事態は必ず終了点にせよ、開始点にせよ変化の局面にあるということである。

しかし、筆者は接頭辞 *sə-* の一義的な機能として事態の「変化の局面」を表すという記述は不十分であると考え。それは次の 2 点の理由による。

① 事態の「変化」を表さない文が *sə-* でマークされる。

次の文は、母親に弟がちゃんと勉強しているかどうか確認するよう頼まれた兄が、弟の様子を見に行き、その様子を母親に報告するという文脈で行われた発話である。

- (15) *ei a²tsom¹ea¹ka ŋa¹ sə-ay.*
 3.SG ちゃんと 書く DUR *sə-*IND
 「彼はちゃんと書いていたよ。」 (B)

(15)の文で重要な点は、話し手である兄が弟の書き始めと書き終わりのどちらも確認していなくても、成立するという点である。実際この文脈で兄は弟が書いている様子を実際に見てはいない。つまりこのような場合、命題内容である事態はどんな変化の局面にも入っていないということになる。

② 事態の「変化」を表す文が *sə-* でマークされない。

次の 2 文はいずれも倉部(2011)が指摘する「変化しつつあること」を表す文であるがいずれも *sə-* ではマークされていない。

- (16) *wo²eaŋ¹ mo² ay ko¹.*
 風邪を引く [将然] IND.REL [驚嘆]
 「風邪を引きそうだよ。」 (D)

- (17) ei tay yu² p^he² ea² mo² ŋa¹ ay.
 3.SG それ ねずみ ACC 食べる [将然] DUR IND.REL
 「彼(猫)はそのネズミを今にも食べそうだ。」 (インフォーマント作例)

(16)と(17)いずれも「事態が変化する局面にある」を表しているのは動詞の直後に現れる助動詞 mo² である。この場合「変化しつつあること」を表すために sa- が付加される必要はない。

以上の2点の理由から倉部(2011)、祁(2001)、戴・徐(1992)で行われている sa- の機能を「事態の局面の変化」に集約するという考察は実例から不十分であることが分かる。

本研究では、以上の共時的な分析成果を踏まえた上で、次の2つのことを順に行う。

- ① 先行研究には挙げられていない機能に言及し、多義的なものであることを主張する。
- ② sa- 本来の機能として一見すると全く無関係に見える多義性を、1つの意味からまとめ直す新たな説明を試みる。

①について、先行研究で挙げられていない例とは、すなわち、アスペクチュアルな意味を表さない例である。これによって sa- がアスペクチュアルな意味を実現するにとどまらず、多義的であることを論証する。その後 sa- の持つ機能が、1つの中心的な意味を持つ一義のものであるという可能性を追求する。次章より本論として、接頭辞 sa- の先行研究における記述では不十分と考えられるような例、すなわちアスペクチュアルな意味を表すという指摘では説明しきれないような例を挙げ分析を行っていく。

4. 調査

3節で示した問題点を解決するために、筆者は自身で記録したジンポー語のテキストデータから用例を採集し、分析を行う。筆者は、考察対象を sa- が用いられている文に定め、その文がどのような意味を実現しているかが sa- が達成する機能であると考え、分類を行った。

次に調査に使用したテキストデータの情報と、調査に協力してくださったコンサルタントについて示す。

4.1. 用例抽出に用いたテキスト

調査では、コンサルタントがジンポー族に伝わる民話と、コンサルタントが自身の日常について語ってくれたものを筆者が書き起こしたものをテキストデータとして用いた⁸。書き起こしは録音した音声を聞きながら、できる限りコンサルタントとともにいった。用例抽出には antconc⁹を用いた。

⁸ 語り口調で伝えられる民話と、くだけた口調で語られる日常会話を混せて利用したのは、接頭辞 sa- が文体的特徴に左右されずに機能するという経験見通しがあり、そのような様々な文例から包括的な考察を行うという意図のためである。

⁹ 早稲田大の Laurence Anthony 氏が開発したコンコーダンス・ソフトウェア。

表 1: 調査に用いたテキストの情報

題	録音日	録音場所	語数	例文の通し記号
蟹の母さん歩き方を教える	2010/09/11	東京	324	(A)
不孝行息子の改心	2010/09/11		401	(B)
サルウイン河とンマウ河	2010/10/16		395	(C)
とカラスとミミズク	2010/10/23		624	(D)
コンサルタントに日常生活(1)	2011/02/24		557	(E)
コンサルタントの日常生活(2)	2011/04/08		479	(F)

本稿に例文として挙げる場合は抽出元のテキストが何かを通し記号で示している。

4.2. コンサルタントについて

次にコンサルタントのデータを示す。2010 年 6 月から、Zawra 氏(男性)が調査協力者としてデータを提供してくださり、筆者のジンポー語運用能力向上にも力を添えていただいた。Zawra 氏は 1964 年にミッチーナ北部のマンキン村で生まれ、言語形成期をミッチーナで過ごしたミッチーナ方言話者である。20 年以上の日本滞在歴があり、媒介言語はほとんど日本語を使ったが、一部ビルマ語も用いた¹⁰。本稿の記述で 1 次資料となっているものはすべて Zawra 氏の発話であり、筆者による作例の適格性も氏に判断していただいている。

5. アスペクチュアルな意味を表さない sə-

ここでは 3 節で提起した問題に対し、実文例をもとに、接頭辞 sə- が実現するアスペクチュアルな意味ではない意味が前面に現れるような機能を指摘する。

5.1. 話し手の非意図

初めに、sə- が話し手にとって非意図であることを表すような例文に用いられている例を挙げる。

- (18)a. $\eta a y^1 \quad cək^h yon-p^h e'^2 \quad sat^1 \quad nu^1-ay.$
 1.SG 狼-ACC 殺す 3.OBJ_IND.REL
 「私は狼を殺した。」 (B)
- (18)b. $\eta a y^1 \quad cək^h yon-p^h e'^2 \quad sat^1 \quad sə-nu^1-ay.$
 1.SG 狼-ACC 殺す sə-3.OBJ_IND.REL
 「私は狼を殺してしまった。」 (筆者作例)

(18)b では sə- によって「殺すつもりはない、殺してはいけない」のに「殺してしまった」という非意図

¹⁰ 筆者は東京外国語大学の学部在学中 4 年間に渡るビルマ語の学習経験を有している。

的な意味が実現するが、a ではそのような非意図的な含みはなく、自らの意志で「殺した」という意味になる。

- (19) pəlon Nnan ce² mat¹ sə-ay.
服 新しい 破れる CMPL sə-IND.REL
「服が破れてしまった。」 (F)

(19)でも同様に、意図的に「服が破れた」のではなく、事故として「破れてしまった」ことを示すために sə-が用いられている。非有情物である服に意図は想定できないこともあり、服の持ち主(文脈上は話し手)が非意図的に服の扱いを誤ってしまったことを意味している。

次に示すのは当該の事態が話し手にとって想定外であるという心的態度が具現化しているような例である。

- (20) nan k^ha² mətsin ton¹ ay k^ha pray mat¹ sə-ay məco¹
2.SG 刻む 記す 置く NMLZ 記号 消える CMPL sə-IND.REL [理由]
ŋay sərə p^he² tam sa ra¹ ay.
1.SG 先生 ACC 探す 行く [不可避] IND.REL
「あなたが記しておいた記号が消えちゃって、私は先生を探しに行かなきゃならなかったんだ。」 (B)

(20)は記号が消えたという事態が話し手にとって想定外であり、先生を呼びに行く羽目になったことを表す。話し手はまさか記号が消えてしまうとは思っておらず、想定外の事態が起こったことを受けてわざわざ先生を呼びに行かなくてはならなかった。

次に示すような「偶発的」な事態を表す例も非意図的なものと同列に考えることができる。

- (21)a. ɛant^he ya²ea¹ la²k^hum¹ mu¹ sə-ay.
3.PL 今 腰掛 見る sə-IND.REL
「彼らはやっと腰掛を見つけた。」 (F)
- (21)b. ɛant^he ko¹ tin¹la t^he lay¹ka puk¹ t^ha¹ ay p^he² mu¹ ma¹-ay.
1.PL TOP 男 PL 本 拾う NMLZ ACC 見る PL-IND.REL
「彼らは男たちが本を拾うのを見ていた。」 (C)

ここで(21)a は座る場所を求めて探し回った結果、腰掛を偶然見つけたということを表す。(21)b は尾行していた男の行動を観察しているときに、意識して「見た」光景を描写している。ここでは話し手にとって偶発的に事態が発生したということを sə-によって表している。(21)a は動作主である話し手が腰掛を探して歩き回っていた文脈が先行するので、行為の過程としては意図的であり、その結果が偶発的なのである。

ところで、ここまで示してきた例で、sə-は話し手にとっての非意図性を表すと説明してきたが、こ

ここで *sə-* が示す非意図性はあくまで話し手にとってのもので、文の動作主とは関係ないということを示す。以下に示す例は動作主が事態に対して明らかに意図的であるという例である。

- (22) əwa ŋay p^he'² kəyet sə-ay.
 1.SG 父 ACC 殴る sə-IND.REL
 「父は私を殴ってしまった。」 (B)

- (23) tayni² muŋ¹ ɛi tsup¹p^hoŋ¹ sa wa sə-ay.
 今日 も 3.SG 寄合 行く sə-IND.REL
 「今日も彼は寄合に行ってしまった。」 (F)

(22)において動作主である「父」は意図的に殴っている。事態が非意図的なのは動作主である「父」ではなく被動作主である「私」(話し手)にとってである。一方(23)は彼が話し手の予想に反して寄合に行ってしまったことを表す文である。この場合、動作主である彼は意図的に会議に行ったので、この *sə-* が示す非意図性は必然的に話し手に対してのものである。もし(23)の文で動作主のみにとっての非意図性を示したい場合は、助動詞 *k^hrup*「うっかり～する」を付加し、*sə-*を除かなければならない。

- (23)' tay¹ni² muŋ¹ ɛi tsup¹p^hoŋ¹ sa wa k^hrup ay.
 今日 も 3.SG 寄合 行く うっかり～する IND.REL
 「今日も彼は寄合にうっかり行ってしまった。」 (筆者作例)

このことから、*sə-* はあくまで話し手の観点から捉えられなければならないことが分かる。*sə-* には話し手が事態を「無意図のもの」と捉えていることを表す。そこから「想定外のもの」、「偶発的なもの」といった意味が具現化される。

5.2. 話し手の発見、気づき

ここでは *sə-* が話し手が発話時点で新しい事態を発見したこと、或いはそれに気付いたことを表す機文に用いられている例をみていく。

- (24) koy³ wa¹ sə-ay ŋay nan re¹.
 [驚嘆] 帰る sə-IND.REL 1.SG だけ COP
 「あれ、(彼は)帰っちゃった。(いるのは)僕だけじゃないか。」 (B)

(24)は話し手が遊びに夢中になっている間に連れが帰ってしまい、「自分だけがここにいる」という新事態に気付いたことを表す文である。*koy³* という「驚嘆」を表す間投詞と共起していることから、話し手が「驚嘆」を以てこの事態を叙述していることが分かる。(25)は驚嘆を表す間投詞 *a²ka³* と *sə-* とが共起する例である。

- (25) a²ka³ ma¹kam t^he^{·1} ma¹no lam te^{·1} ɛa² na ɛat¹ kun mə-sə-ay.
 [驚嘆] PN COM PN 道 LOC 食べる NMLZ 持つ PL-sə-IND.REL
 「あれ、マガムとマノーは道中で食べるものを持っているじゃないか。」 (B)

sə-が話し手の発見、気付きを表す機能を持つと考えれば、その命題内容になるのは、話し手が発話時点において発見した新しい事態である。そのため、文は話し手が新しい事態を発見した瞬間の驚嘆の意味を帯び、驚嘆の意味を表す間投詞や文小辞との共起が自然になる¹¹。逆に言えば同じ文脈の中で(25)に sə-を用いなければ、驚嘆を表す要素との共起の点で不自然になる。(26)は、sə-と驚嘆を表す文小辞の ko¹ が共起する例である。

- (26) ɛan²t^he ciŋ¹p^ho^{·1} ray² sə-ay ko¹.
 3.PL ジンポー人 COP sə-IND.REL [驚嘆]
 「彼らはジンポー人だったんだ。」 (E)

(26)は先週会った人たちがジンポー人であったことに今気付いて、驚いたことを表している。この場合も sə-を用いなければ文脈上、不自然な解釈になる。それは、発話時点と話し手の事態の認識が同時でなければ、驚嘆の意味が担保されないからである。この例から分かることは事態の生起が発話時点から離れていたとしても、話し手がその事態を発話時点で気付いたとなれば sə-が用いられるということである。

ここまでの記述から分かることは、sə-は話し手が事態を発話時点で発見、或いはそれに気付いたとことを表す文に現れ、そこから「話し手の驚嘆」といった意味が具現化されるということである。

5.3. 聞き手への情報提示

sə-は聞き手に対して情報提示をするような文でも用いられる。(27)では、話し手は聞き手に対して柿がおいしいという情報を提示している。

- (27) tay səpinsi¹ p^he^{·2} ɛi a^{·1} ciŋ¹let¹ t^ha yat¹yat¹ tɔŋ¹ Nna² “ɛa² kuy^{·2}
 それ 柿 ACC 3.SG GEN 舌 LOC ゆっくり 置く SEQ 食べる [敢て]
 yaŋ¹ Ntay lu^{·1}ɛa² kray mu sə-ay”.
 COND これ 食べ物 とても おいしい sə-IND.REL
 「(彼は)その柿を舌の上に恐る恐る置いて『食べてみると、すごくおいしいよ。君も食べなさい。』(といった。)」 (D)

ここで重要なのは、提示される情報が、話し手にとって柿について話し手がおいしいのかどうか

¹¹ この他に驚きを表すイントネーションも話し手の発見や気付きを表す命題と共起しやすいことが指摘されている (Weigand 1924)。

予測できず、口にして初めて「おいしい」と認識したことを情報として提示していることである¹²。

もし、話し手がこの柿をおいしいと既に知っていて提示される場合、sa-は用いることができない。sa-はあくまで、話し手にとって新しい情報でなくてはならない。

ここで、3 章で挙げた(15)を思い出していただきたい。この文は聞き手に対する情報提示を表すような文だが、提示される情報は話し手にとって新しい情報ではない。

- (15)(再掲) ei a²tsom¹ea¹ ka ŋa¹ sa-ay.
 3.SG ちゃんと 書く DUR sa-IND.REL
 「彼はちゃんと書いていたよ。」 (B)

この発話は弟の様子を知りたがっている母親に対して話し手が情報を提示したことを表すが、話し手は弟が書いている姿を直接確認しておらず、「弟の部屋に気配がある。」「机を鉛筆で叩く音がする。」といった二次的な証拠をもとにこの発話を行っている。もし、「弟が書いている」という事態を直接知覚して、聞き手に提示する場合、sa-は用いることができない。

- (28) cant^he a'¹ kəca¹ ko¹ kaka ray ay.
 3.SG GEN 小さい TOP ぶち模様だ COP IND
 「彼らの子犬はぶち模様だよ。」 (F)

(28)も、聞き手に情報を提示する例であるが、話し手は、彼らの子犬がぶち模様であるということを見たり、過去の直接的な経験として聞き手に提示している。ぶち模様であることを誰かの話で聞いてそれを聞き手に提示する場合、sa-を用いて表される。

このことから言えることは、情報提示の sa-において、提示される情報は話し手にとって、対象との相互作用行動をとる「直接経験」に基づく情報ではなく、対象との相互作用行動を伴わない「間接経験」に基づく情報であるということである¹³。

sa-が聞き手への情報提示を表すような文に現れる場合、前後に話し手が事態を認識するための根拠が明示或いは暗示されていることが多い。(29)は根拠が明示された文、(30)は根拠が明示されていない文である。

- (29) nlumta tu¹ sa_ay. nam¹si¹p^hun²-ni pu¹si¹ wa¹ ay.
 春 到達する sa_IND 果樹-PL 開花する INC IND.REL
 「春になったよ。果物の木が開花しはじめた。」 (E)

¹² 認識の根拠がしばしば条件文の前件で示される点が統語的特徴として指摘できる。この場合前件では発見時の状況を提示していることが分かる。

(i) 'wa³ ŋa yaŋ¹ mam min sa-ay ko¹.
 父 いう COND 粿 熟する sa-IND.REL [驚嘆]
 「父が言うには粿が熟したそうじゃないか。」 (B)

¹³ 「直接経験」と「間接経験」の定義については(Regan & Fazio 1977)を参照されたい。

- (30) məraŋ tʰu¹ wa¹ ay. tim¹ ma¹kay kʰa¹ sa ya¹ sə-ay.
 雨 降る INC IND.REL [逆接] PN 水 行く 受ける sə-IND.REL
 「雨が降り始めたけど、マカイは水を汲みに行ったみたいだよ。」 (B)

(30)は話し手が「マカイが水を汲みに行った。」ことを判断し、聞き手にそのことを提示しているが、話し手はマカイが出かけた場面を見てはいないので、「マカイは毎日この時間に水汲みに行っていること。」「マカイが今家にいないこと。」等を根拠にして(30)の発話を行っていると考えられる。

ここまでの例をみると、sə-によってマークされる情報提示の文では、話し手は具体的状況や話し手の経験等から判断したことを聞き手の知らないこととして提示しているといえる。

次に示す例は、話し手が聞き手の知らないこととして提示する文ではあるものの、聞き手の知識状態が話し手と同一になるよう要求するような話し手の心的態度が具現化していると考えられる。この場合話し手が提示する情報の根拠は客観的な事実ではなく、話し手の主観的な判断になりやすい。

- (31) an²tʰe yon¹ mətat¹ ko¹ mətat¹ ay kʰray ray² ma¹-sə-ay.
 1.PL みんな 聞く TOP 聞く NMLZ 全部 COP PL-sə-IND.REL
 ray²tim¹ naŋ raw yaŋ ko¹.
 しかし 2.SG 時間に余裕がある COND TOP
 pay² kətʰap¹ tsuntan² yaŋ¹ kraw kəca ay.
 さらに 重ねて 話す COND もっと 良い IND.REL
 「(これは)私たちみんなが聞くには聞いたことの全てだ。だけどあなたが暇ならさらに何か話すと良いよ。」 (C)

(31)において、話し手は話すことが面倒になってしまい、聞き手に対して一方的に話を打ち切っている。「話はこれで全てだ」ことを判断したのは話し手であるが、その判断についての根拠は分かりにくいし、話し手が話は全てだと判断したのに、別の人に続きを話すように促している。これは、話し手の判断を提示することよりも、知識状態が話し手と同一(話はもう終わった)になるように聞き手に要求するようなニュアンスが前面に出ている。

もし、sə-を用いなかった場合、すなわち(31)'のようになるとこの文脈では不自然な文となる。

- (31)' an²tʰe yon¹ mətat¹ ko¹ mətat¹ ay kʰray ray² mə-ay.
 1.PL みんな 聞く TOP 聞く NMLZ 全部 COP PL-sə-IND.REL
 「(これは)私たちみんなが聞くには聞いた話の全てだ。」

なぜなら、「話の全てである」という事態話し手の判断によるものではなく、実際に成立した直接経験になり、この後の文脈ですべて終わったはずの話をさらに話させようとする点で、矛盾してしまうからである。

次に示す文も、聞き手に対する要求のニュアンスが強く出ている文といえる。

- (32) yon¹ mu¹wa¹ tu¹ ko¹ tu¹ yu ma¹-sə-ay. ray²tim¹
 みんな 中国 着く TOP 着く [経験] PL-sə-IND.REL しかし
 ɕiŋ²cut² ɕiŋ²no² ko¹ N²-ce ma¹-ay N²t^hen²
 細かい道筋 TOP NEG-知る PL-IND.REL [聞き返し]
 「みんな中国に行くには行ったんだ。なのに細かい行き方は誰も知らないだって？」 (E)

(32)は、中国にいったことがあると言われている人たちに中国への行き方を聞いたにもかかわらず、よく覚えていないと言われた話し手が、聞き手を非難して発話したものである。話し手は「みんなが中国に行った」ということを前提にして「誰も知らない(なんて)」というために、聞き手に対して「中国へ行った」という経験を思い出させようとする話し手の心的態度が具現化している。

聞き手の知識状態を話し手のそれと同一のものにしようとしている。これも話し手が単に情報を提示したというよりは聞き手の知識状態へ要求するようなニュアンスが前面にでてくるような例である。ただ(32)では、「中国に行った」という命題内容が聞き手にとって過去の経験であり、未知のものではないという点が、他の用例と異なる。話し手は、話し手が発話段階で聞き手と共有すべきと判断して、聞き手の経験を聞き手の意識の上に引き上げている。

ここまでの例から、sə-は聞き手に対して話し手が新しい情報と認識していることを提示する文に現れながら、聞き手の知識状態へ要求し、聞き手に共通認識を達成させようとするような心的態度も具現化しえるといえることが分かる。

6. おわりに

この章では結論として、本研究で示した接頭辞 sə-の機能をまとめ、包括的に説明する。加えて、本研究で扱えなかった問題点に関しても、今後の課題として提示しておく。

6.1. 接頭辞 sə-の根本的機能

ここまで sə-の機能について、sə-が用いられる文を対象にどのような意味を実現しているかを見てきた。その結果、sə-は先行研究で指摘されている「変化の局面」を表すという説明だけでは不十分なほど非常に多義的な解釈を生み出すことが分かった。しかし、本稿の狙いは一見多義的に見える sə-を1つの意味からまとめ直す新たな説明を試みることである。

sə-の根本的な機能とは「話し手にとって事態が非意図であることを表す機能」である。このことは、文脈から心的態度を具現化が判断できない次のような文では単純に無意志的な表現になることから明らかである。

- (18)b.(再掲) ŋay¹ cək^hyon-p^he² sat¹ sə-nu¹-ay.
 1.SG 狼-ACC 殺す sə-3.OBJ_IND.REL
 「私は狼を殺してしまった。」 (筆者作例)

そしてその機能によって具現化される意味は、話し手にとって「非意図」、「想定外」、「偶発」である。5章で示した種々の機能は「話し手にとって事態が非意図であることを表す機能」から派生した

ものと考えられる。考えられる派生のプロセスを以下に示す。

まず、発話時点で認識した事態を「予測していないこと」として話し手が捉えることで、話し手の「驚嘆」の意味が具現化される¹⁴(表 2: 1>2)。

- (24)(再掲) koy³ wa¹ sə-ay ŋay nan re¹.
 [驚嘆] 帰る sə-IND.REL 1.SG だけ COP
 「あれ、(彼は)帰っちゃった。(いるのは)僕だけじゃないか。」 (B)

次に「驚嘆」を伴って認識した事態を聞き手に「提示」するような文脈で、話し手が事態をどう認識したかを聞き手に提示する機能が派生される(表 2: 2>3)。

- (27)(再掲) tay səpinsi¹ p^he² ei a¹ eiŋ¹let¹ t^ha yat¹yat¹ tɔn¹ Nna² “ea²
 それ 柿 ACC 3.SG GEN 舌 LOC ゆっくり 置く SEQ 食べる
 kuy² yaŋ¹ Ntay lu¹ea² kray mu sə-ay ko¹. naŋ muŋ¹ ea² u¹.”
 [敢て] COND これ 食べ物 とても おいしい sə-IND.REL [驚嘆] 2.SG も 食べる IMP
 「(彼は)その柿を舌の上に恐る恐る置いて『食べてみると、すごくおいしいよ。君も食べなさい。』(といった。)」 (D)

ここから、話し手の驚嘆よりも聞き手への情報提示という意味が前面に出てくると、「話し手にとって想定外の事態」という前提が薄れ、過去の任意の事態を聞き手にとって新たな事態として提示するような意味が派生される。ここでは、①話し手は聞き手にとって新しい情報であると認識していること、②事態は直接経験ではなく間接経験でなくてはならない、ことが前提となる。なぜ間接経験でなくてはならないかは、①を理由にして説明ができる。すなわち、論理的に、過去の事態についての情報が直接の知覚からではなく二次的証拠に由来する場合のみ、過去の出来事は話し手にとって新しい情報になると考えることができるからである。

- (30)(再掲) məraŋ t^hu¹ wa¹ ay. tim¹ ma¹kay k^ha¹ sa ya¹ sə-ay.
 雨 降る INC IND.REL [逆接] PN 水 行く 受ける sə-IND.REL
 「雨が降り始めたけど、(マカイの姿が見えないので)マカイは水を汲みに行ってみたんだよ。」 (B)

判断の根拠がそれほど問題ならないような文脈では、聞き手の知識状態に対して話し手の知識

¹⁴ DeLancey(1997: 45)では「無意志性」と「驚嘆」の関連について、次のように述べている。「行為が意志的になる場合、行為は行為者の意志によるものである、よってその行為自身の結果は行為者にとって新たな知識にはなり得ないし、行為者の意識がすでに影響に対して準備をしている。逆に、非意志的な行為は自動的に行為者にとって「驚嘆」になる。行為のために方法を準備する前以て意図がないからである(DeLancey1997: 45)。」ジンポー語の場合、非意図は話し手にとってのものであるし、行為ではなく事態をとらえるものであるが、考え方はこれに沿うものといえる。

状態を共有するよう強いるような意味が具現化されてくる。しかし、①と②の前提は保持される。

(31)(再掲)	an ² t ^h e	yoŋ ¹	mətat ¹ ko ¹	mətat ¹ ay	k ^h ray	ray ²	ma ¹ -sə-ay.
	1.PL	みんな	聞く TOP	聞く NMLZ	全部	COP	PL-sə-IND.REL
ray ² tim ¹	naŋ	raw	yaŋ	ko ¹	pay ²	kət ^h ap ¹	tsuntan ² yaŋ ¹
しかし	2.SG	時間に余裕がある	COND TOP	さらに	重ねて	話す	COND
kraw	kəca	ay.					
もつと	良い	IND.REL					

「(これは) 私たちみんなが聞くには聞いたことの全てだ。だけどあなたが暇ならさらに何か話せば良いよ。」 (C)

最後に①の前提がない聞き手への情報提示が現れる。この場合、聞き手にとって新しい情報でないことを話し手は知っているが、次の発話の前提とするために、聞き手の過去の事態に対する知識を呼び起こさせようとしている。このような文にso-が用いられているのは聞き手への情報提示の意味から聞き手の知識状態への要求の意味が派生された結果と考えられる。

(32)(再掲) yon¹ mu¹wa¹ tu¹ ko¹ tu¹ yu ma¹-sə-ay. ray²tim¹
 みんな 中国 着く TOP 着く [経験] PL-Sə-IND.REL しかし
 ɕiŋ²cut² ɕiŋ²no² ko¹ N²-ce ma¹-ay N²t^hen².
 細かい道筋 TOP NEG-知る PL-IND.REL [聞き返し]

「みんな中国に行ったには行ったんだよな。なのに細かい行き方は誰も知らないだて？」

(E)

ここで、ここまでの記述を表にまとめる。

表 2: 接頭辞 *sə-* の機能の派生的関連

	sa-の機能	具現化される意味
1	「話し手の非意図性」	「話し手にとっての非意図」 「話し手にとっての想定外」 「話し手にとっての偶発」
2	「話し手の発見、気づき」	「話し手にとっての驚嘆」
3	「聞き手への情報提示」	「聞き手への情報提示」 「聞き手の知識状態への一致の要求」 「聞き手の知識状態への確認の要求」

1>2>3の順にsa-の機能が派生してきたと考えることができる。話し手が事態を認識しその認識が話し手にとって「非意図」である場合、事態は「変化の局面」にあることが多いと考えられる。故に、先行研究において詳細に記述されたアスペクトualな意味を表すと機能も、本稿で筆者が主張

する派生のプロセスと関連づけることができる。しかし、事態が変化の局面にあっても話し手が「非意図」でなければsa-が用いられることはないし、事態が変化の局面になくても話し手にとって「非意図」であればsa-が用いられることは用例からも明らかである。本稿では従来とは異なる視点からsa-の機能を捉えなおしたことで、従来の記述の仕方では説明しきれなかった例を扱えるようになった。

6.2. 今後の課題

本研究の最大の課題は、研究対象を直説法・現実の動詞文標識に付加される sa-接辞に制限したことである。sa-接辞の機能に対して包括的な説明を行うためには、他の動詞文標識に用いられる sa-接辞の機能も分析する必要がある。これに関しては一定量のコーパスデータに基づいた計量的な研究が必要であると考ええる。

略号一覧

A>B	AはBに由来する		
グロスの[...]	抽象的な意味	GEN	属格(genitive)
例文内のスペース	語境界	IMP	命令法(imperative)
“...”	会話文	IND	直説法(indicative)
-	接辞境界	INTJ	間投詞(interjection)
.	文境界	IRR	未実現(irrealis)
1	話し手の人称	LOC	処格(locative)
2	聞き手の人称	PN	固有名詞(proper noun)
3	第三者の人称	NEG	否定辞(negative)
ACC	対格(accusative)	NMLZ	名詞節標識(clausal nominalizer)
ALL	向格(allative)	PL	複数(plural)
CMPL	完了性(completion)	PN	固有名詞(proper noun)
COM	共同格(commutative)	Q	疑問(question)
COND	条件(conditional)	REL	現実(realis)
COP	コピュラ(copula)	SEQ	継起(sequential)
DU	双数(dual)	SG	単数(singular)
DUR	継続(durative)	TOP	主題標識(topic marker)

参考文献

- 日本語で書かれたもの
 倉部慶太(2011)「ジンポー語文法の概要」修士論文, 京都大学.
 澤田英夫(1998)「チベット・ビルマ諸語」新谷忠彦編『黄金の四角地帯ーシャン文化圏の歴史・言語・民族』44-61. 東京: 慶友社.

西田龍雄(1992)「カチン語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典』 1, :1176-1188. 東京: 三省堂.

藪司郎(2001)「カチン文字」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『世界文字辞典』 224-228. 東京: 三省堂.

英語で書かれたもの

Aikhenvald, Alexandra (2004) *Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.

DeLancey, Scott (1997) Mirativity: The grammatical marking of unexpected information. *Linguistic Typology* 1: 33-52.

_____ (2001) The mirative and evidentiality. *Journal of Pragmatics* 33: 369-382.

Matisoff, James (2003) *Handbook of Proto-Tibeto-Burman: System and Philosophy of Sino-Tibetan Reconstruction*. University of California Press.

Okell, John (1969) *A Reference Grammar of Colloquial Burmese*. 2 vols. London ; Bombay ; Tokyo : Oxford University Press.

Regan, Dennis, & Fazio, Russel (1977) On the consistency between attitudes and behavior: Look to the method of attitude formation. *Journal of Experimental Social Psychology*, 13: 28-45.

Weigand, Gustav (1924) The admirative in Bulgarian. *The Slavonic Review*. 557-568.

中国語で書かれたもの

戴庆厦・徐悉艰(1992)『景颇语语法』北京中央民族学院出版社.

祁德川(2001)『景颇族支系语法文字』德宏民族出版社.

A function of prefix sə- in Jingpho Myitkyina dialect

Onishi Hideyuki

(Tokyo University of Foreign Studies)

Keywords: Tibeto-Burman, Jingpho, aspect, mirativity, evidentiality

In the present paper, I discuss the motivation for the use of the prefix sə-, which occurs in a verb-sentence-marker, in Jingpho Myitkyina dialect. According to previous studies, this prefix has the aspectual meanings of “a certain situational changing”. In some cases, however, they also denote how the addresser recognizes the situation, which may be labeled as "mirativity" or "evidentiality". From the discussion of this paper I argue the following two points: (i) the use of the prefix is motivated by the mind that an addresser recognizes that a certain situation is unintentional. (ii) the aspectual meanings of the prefix are induced by (i).

中国語におけるオノマトペの述語用法

—2音節のオノマトペに焦点を当てて—

黄 慧(HUANG HUI)

(東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程)

キーワード: オノマトペ, 述語用法, 対照研究

1. はじめに

本稿では、中国語¹におけるオノマトペの文法的特徴のうち、述語用法について考察を行う。そのなかでも、中国語の2音節のオノマトペに焦点を当てて考察を行い、その使用実態および諸特徴について言及することを目的とする。中国語の2音節のオノマトペに焦点を当てた理由については後程述べることにする。

本稿における構成は次のようになっている。まず、2節で先行研究を概観し、3節で研究方法を述べ、4節で収集したデータに基づいて分析・考察を行い、最後に5節でまとめと今後の課題について述べる。

2. 先行研究

中国語におけるオノマトペは、使用状況の特殊性や頻度の低さなどから、その研究はあまり重要視されてこなかった。それゆえに、中国語におけるオノマトペの文法的特徴についての研究は、どれも概説程度にとどまっており、詳細に分析を行った研究は管見のかぎり見当たらない。

2.1節では中国語におけるオノマトペの定義について述べ、2.2節では中国語におけるオノマトペの述語用法とオノマトペの形態的特徴との関連について述べ、2.3節では中国語におけるオノマトペの述語用法の統語的特徴について述べる。

¹ ここでいう中国語とは、中国語における標準語、つまり「普通话(普通語)」である。中国語の漢字にピンインを添える形で用いることもある。用例を提示するにあたり、先行研究で翻訳文が付いているものに関してはそのまま引用することにし、翻訳文がついていないものおよび考察で提示する用例の翻訳はすべて筆者によるものである。日本語で自然な文になるように翻訳を行っているため、翻訳文にはしばしば副詞を伴って表現することがある。中国語におけるオノマトペの述語用法の部分に四角で囲み、それに関わる助詞、目的語、補語などには下線を引く。なお先行研究などにおける中国語の専門用語などは括弧に日本語訳を添える。先行研究の引用以外の中国語および中国語の専門用語を使用する際には“ ”で括弧にすることにする。

2.1. 中国語におけるオノマトペ概観

2.1.1. 中国語におけるオノマトペとは

丹野眞智俊(2005 : 17-19)によれば、「オノマトペ」とは「音による命名、音自身が名になる」ものである。このような意味合いからすると「あるもの、ある現象」を音によって指示すること、「あるものの状態、あるものの発する音」をそのまま写すこと、と定義することができる。このように、日本語における「オノマトペ」という用語は、主に擬音語・擬態語の総称として用いることが多い。

中国語に関しては耿二岭(1986)の定義を用いる。耿二岭(1986 : 3)では、“拟声词(擬声詞)”別称“象声词(象声詞)”は、自然界の音声を模倣する言葉であり、それらは、造語法の産児であり、現実物質の各種の音声を模倣することで独自に系統を保っていると述べている。

野口宗親(1995)によると、中国語で擬音語に当たる語は“象声詞”または“擬声詞”であり、中国語における象声詞は、一般的に次のようなものを指すという。

(1) 動物の声

汪汪 wāngwāng(犬の声)、啾啾 jiūjiū(小鳥や虫の声)

(2) 人間の発する言語以外の声や音

哈哈 hāhā(笑い声)阿嚏 ài(くしゃみの音)唧咕 jīgū(小声で話す)

(3) 物音

咚 dōng(太鼓の音など)、呼呼 hūhū(風の音など)、噼啪 pīpā(爆竹の音)

野口宗親(1995 : ix)

このように、中国語において「拟声词」は、主に擬音語を指すことが多いが、中国語における象声詞には擬態語的に使われるものも若干含まれているとして次の用例を挙げている。

(4) 脸唰地红了

(顔はサッと赤くなった)

(5) 太阳穴蹦蹦直跳

(こめかみがピクピクする)

野口宗親(1995 : ix)

野口宗親(1995)では、これらの擬態語的用法は日本語と違い、中国語においては音響と様態をはっきり区別して示す傾向が強く、擬音語・擬態語兼用のものは少ないと述べている。さらに、擬態語にあたる言葉は中国語の文法用語としては特にないと指摘している。

本稿では、野口宗親(1995)に従い、主に擬音語、場合によっては擬態語的な表現も含む形で「オノマトペ」という用語を用いる。

2.1.2. 中国語におけるオノマトペの文法的特徴

日本語において、オノマトペは語彙の範疇で論じられているため、オノマトペを品詞として分類することは少なく、オノマトペが文の中に現れて初めて「副詞的用法」「形容詞的用法」「動詞的用法」と呼ぶことがある。

それに対して、耿二岭(1986)によれば、中国語におけるオノマトペは長期間に渡って定まった分類がなく、主に副詞、形容詞、感嘆詞、特殊詞類、独立一類などに分類されていた。象声詞という分類もあるが、耿二岭(1986)を含め、郭锐(2002)でも「擬声詞(拟声词)」という用語を用いている。郭锐(2002)は、主に副詞的用法として用いられる擬音語を「擬声詞(拟声词)」という品詞を設けて分類している。即ち、中国語におけるオノマトペは統語的範疇で論じられ、品詞的としては擬声詞として扱われている。

中国語のオノマトペがどのような文成分として用いられているのかについて触れた先行研究には、邵敬敏(1981)、高増傑(1982)、傅力(1983)、耿二岭(1986)、马庆株(1987)、砂岡和子(1990)、陶振孝(1992)、野口宗親(1995)、李镜儿(2007)などがある。

これらの先行研究を概観すると、中国語のオノマトペは主に、主語、述語、連体修飾語、連用修飾語、独立語、補語、目的語としての文法的役割を果たしている。つまり、中国語のオノマトペの文法的役割は日本語のオノマトペと同じく様々な文成分として用いることができる。高増傑(1982)の研究によれば、中国語のオノマトペも日本語と同じく副詞として動詞を修飾する連用修飾用法が圧倒的に多く約 74%を占めている。それに対して述語成分²として用いられたものは全体の僅か 3%しか占めていないという考察結果になっている。

2.2. 形態的特徴から見る中国語のオノマトペの述語用法

耿二岭(1986)によると、中国語において 1 音節のオノマトペは、(6)のように現代詩歌で、時に語気助詞を伴わなくても述語として用いられる場合があるが、このような用法は非常に稀である。こういった用法は古代中国語においては頻繁に用いられていたものの、金・元時代以降は口語や文語の中で定着されていないとされている。

(6) 蛙声“呱—”，蝉声“叽—”，晌午送我到梦里。(儿歌)

(蛙声が「ケロ」、セミ声が「ミーン」、昼間私を夢の国に連れて行ってくれる)

(耿二岭 1986)

² オノマトペの文法的特徴について言及する際には、動詞述語文／形容詞述語文／名詞述語文／主述述語文／擬声詞述語文と呼んでいる研究があるが、オノマトペの述語文をそれぞれ、動詞的用法および形容詞的用法のように「～用法」と呼んでいる研究もある。日本語において、「動詞的用法／形容詞的用法／副詞的用法／名詞的用法」という分類を行っている。本稿でも、後者のように、「～用法」と呼ぶことにする。

王文格(2010)は、中国語の述語用法に関する考察である。王文格(2010)の考察によれば、中国語の述語成分を分析すると、動詞述語文が 87.71%、形容詞述語文が 3.71%、擬声詞述語文は 0.033%を占めている。即ち、中国語のオノマトペの述語用法は非常に少ないということが分かる。

野口宗親(1995)は、(7)のように重ね形³のオノマトペは後ろに助詞“的(de)”をつけて述語になるものがあると述べている。

- (7) 大伙叽叽喳喳的，象一群小鸟在叫

(みんなはぺちゃくちゃしゃべって、子鳥の群れがさえずっているみたいだ)

(野口宗親 1995)

野口宗親(1995)は、中国語の擬音語は日本語は違い、しばしば(8)のように動詞として用いられ、その際には変調を伴い、AB型では第2音節が軽声⁴になると述べている。

- (8) 嘴里还是咕噜着

(まだブツブツ言っている)

(野口宗親 1995)

4音節オノマトペは、ほとんど単独で述語用法として用いられている。音韻的にある程度の長さを持つことで安定性を保持しているため、統語的に1~3音節のオノマトペより制約が緩く、オノマトペが単独で現れたり、その他の成分を伴って現れたり比較的自由である。それゆえに、述語成分として用いられる際にも、(9)のように、付加成分なしにオノマトペが単独のまま述語として機能することができると思われる。

- (9) 但我们的队伍还是稀里哗啦，很不整齐。

(しかし、私たちの集団はまだバラバラで、きちんとしていない。)

(野口宗親 1995)

先行研究では、単純反復形の3音節のオノマトペやその他の音節のオノマトペが述語用法として用いられた用例も挙げている。(10)は3音節、(11)は6音節のオノマトペが述語として用いられたものである。このようなオノマトペが述語として用いられるものは使用頻度があまり高くないようである。

- (10) (蚊子)哼哼哼的，像老和尚念经，或者老秀才读古文

(蚊がブンブン飛んでいる、まるで年寄りのお坊さんが経文を読んでいるか、あるいは年寄りの秀才が古文を読んでいるようだ)

(野口宗親 1995)

³ 重ね形は、単音節の重ね形と多音節の重ね形を含む。

⁴ 軽声とは、中国語における連音変化の一つであるが、単語や文のなかで音節の声調が失われることで、弱く短い音になることを指す。声調記号をつけないことで軽声を表すことが一般的である。

- (11) 张有才象个哑巴，一天说不了十句话;张有义象只麻雀，整天吱吱吱喳喳。

(張有才は口がきけない人のように、一日 10 個のフレーズも喋っていない。張有義は雀のように、一日中ペチャペチャ喋っている。)

(野口宗親 1995)

このように、現代中国語においては、1音節のオノマトペは述語になりにくく、主に2音節および4音節のオノマトペが述語用法として用いられやすい。しかし、2音節のオノマトペが助詞や補語などを伴わないまま単独で述語用法として用いられる場合は、ほとんどが(12)のように、詩歌的用法として韻を踏むためのものである。こういった用法以外の2音節のオノマトペはほとんどが動態助詞や補語あるいは目的語を伴って用いられる。

- (12) 笔声查查，表声滴滴

(ペンの音がサラサラ、時計の音がチクタク)

(野口宗親 1995)

黄慧(2010)では、日本語および中国語において、どのようなオノマトペが述語になりやすいのかについて考察を行っている。野口宗親編(1995)の『中国語擬音語辞典』(東方書店出版)を資料としてオノマトペの述語用法について考察を行っている。この辞書には全部で431語のオノマトペが収録されている。黄慧(2010)の考察結果を次の表1に示す。

表 1: 中国語のオノマトペの述語用法と音節数

音節数	用例数	
2音節	44例	66%
4音節	21例	31%
3音節	1例	1.5%
6音節	1例	1.5%
その他の音節	0例	0%
合計	67	100%

日本語では、「する」を付加した形で動詞として用いることができるオノマトペはほとんどが4モーラ⁵で、全体の98%を占めている。2音節のオノマトペが述語成分として用いられるのは、「チンする」などごく僅かである。それに対し、中国語におけるオノマトペの述語用法は2音節が最も多く、約66%を占めている結果になっている。それに次いで多いの

⁵ 中国語は1文字が1音節という音節構造になっているが、日本語においては「音節」と「モーラ数(あるいは拍)」という2つの概念がある。日本語のオノマトペにおいては、促音、撥音、長音がオノマトペ標識として用いられているため、モーラ数(拍)で数えることが一般的である。

が4音節であり、約31%を占めている。

このように、日本語においては「する」を後続することができるオノマトペは比較的音節数の制限を多く受ける⁶のに対して、中国語のオノマトペにおける述語用法は音節数による制限が比較的緩いと考えられる。

2.3. 統語的特徴から見る中国語のオノマトペの述語用法

李鏡儿(2007)によると、中国語のオノマトペはその多くが形容詞述語文になることができ、動的な意味合いを持っているオノマトペは動詞述語文になることもできる。

耿二岭(1986)は、中国語のオノマトペが述語になるものについて、次の5つのパターンを示している。

表 2: 耿二岭(1986 : 80-83)による述語用法のパターン

	分類パターン
(I)	オノマトペの後ろに補助的な語や慣用句などを後続せずに直接述語になる。
(II)	助詞“的 de”を後続し、述語として用いられる。
(III)	数量補語を後続し、述語として用いられる。
(IV)	中間状態 ⁷ にある擬声詞が述語として用いられる際には目的語を伴うことができる。
(V)	現代詩歌では、1音節の擬声詞が述語として用いられることがあり、さらに助詞などの後続は必要ない。

(I) オノマトペの後ろに補助的な語や慣用句などを後続せずに直接述語になる。

(13) 电光闪，雷声滚，风嗖嗖，雨阵阵。

(雷が光り、雷鳴がゴロゴロと、風がビュービュー、雨が時折。)

(14) 他两个唧唧啾啾

(彼ら二人はコソコソ話している)

(耿二岭 1986 より抜粋)

耿二岭(1986)は、現代中国語において、このような用法は口語的である、或いは修飾的色彩が強いため、書面ではあまり用いられていないと述べている。しかし、古代中国語においてはこのような用法が一般的であり、現代中国語と鮮明な対比になるとしている。現代

⁶ 日本語に関しては、主に広告や新聞などで用いられる「する」「だ」の付加なしで文末に現れる動詞省略用法がある。しかし、日本語の文末における動詞省略用法は、中国語ほど自由ではなく、音韻・形態的に規範からはずれているものがそれほど多くないことも報告されている。

⁷ ここでいう「中間状態」とは、擬音語から動詞への移行段階にあるものを指す。

中国語の小説などでこのような用法が用いられるのは、韻を踏むことや、簡単さ、古さを強調すること、語形を整えることなどの役割を果たしていると考えている。

(II) 助詞“的 de”を後続し、述語として用いられる。

(15) 他走到屋门口，屋门口的火苗呼呼的。

(彼はドアの近くまで歩いて行った、ドアの近くで炎がボーボー燃えている。)

(16) 你别哼哼唧唧的。

(そこでグズグズするな。)

(耿二岭 1986)

(III) 数量補語を後続し、述語として用いられる。

(17) 我的心咯噔一下：坏啦，有人晕车。

(私はちょっとドキッとした：やばい、車酔いする人がいる。)

(耿二岭 1986)

(18) 唧唧啾啾一会，天色渐渐明了。

(しばらくの間ヒソヒソ話していたら、夜が明けた。)

(耿二岭 1986)

(IV) 現代中国語において中間状態にある擬声詞が述語として用いられる際には目的語を伴うことができる。

(19) 你们一天到晚嘻嘻什么？

(あなたは、何を朝から夜までクスクス笑っているの？)

(耿二岭 1986)

目的語を伴うことに関して、李鏡儿(2007)では、動的な意味を持つオノマトペは他動詞として用いられ、目的語を取るものが非常に稀であるとし、次のような用例をあげている。

(20) “如果我有一把冲锋枪，我就突突了你！”

(前略 もし私が銃を持っていれば、あなたを銃で撃ち殺してしまうだろう！)

(李鏡儿 2007 より抜粋)

(V) 現代詩歌では、1音節の擬声詞が述語として用いられることがあり、さらに助詞などの後続は必要ない。

- (21) 黄洋界上炮声^隆，报道敌军宵遁

(黄洋界では大砲が^{ドドンと鳴り}、敵の夜逃げを知らせている)

(耿二岭 1986 より抜粋)

李镜儿(2007)では、動的属性を持っているオノマトペが述語用法として用いられる際には、“动态词(動態詞→アスペクト助詞)”の“着 zhe, 了 le, 过 guo”や、“方向补语(方向補語)”の“起 qǐ, 起来 qǐlái”を伴うことができ、“不 bù”で否定することができると述べている。

- (22) 他生气了，^{咕嚕}着嘴半天不说话。

(彼は怒って、長い間口を^{モグモグ}していて何も話さなかった。)

(耿二岭 1986 より抜粋)

- (23) 紧急使用肥皂擦了车轴，就不^{吱呀}了。

(急いで石鹸で車の車軸を拭いたら、もう^{ギーギー}言わなくなった。)

(耿二岭 1986 より抜粋)

このように、中国語におけるオノマトペの述語用法については、いくつかの先行研究によって使用パターンが整理されているものの、オノマトペの述語用法の使用実態および諸特徴について詳しい考察が行われていない。

3. 研究方法

2 音節のオノマトペが述語になりやすいという先行研究(黄慧 2010)の記述を踏まえ、本稿では李镜儿(2007)における 2 音節のオノマトペのリスト(321 語)から無作為に 75 語を検索語彙として選定し、CCL コーパス(北京大学中国语言学研究中心 Center for Chinese Linguistics PKU CCL 语料库规模: 4.77 亿字(1.06GB) 2009-07-20 更新)を用いて用例収集を行った。用例を収集する際、用例数が 50 例以下のものはすべて収集し、50 例以上のものは 50 例まで収集したうえで、2 音節のオノマトペの用例データベースを作成した。以下、75 語を(24)に示す。

- (24) アルファベット順(下線は今回述語用法が検出されたオノマトペ)⁸

⁸ 野口宗親(1995)にも言及があるように、中国語のオノマトペが動詞的用法として用いられる際には変調が起こり、2 音節目が軽声になる。本稿では『中日辞典 第二版』(小学館)および『现代汉语词典 第五版』(商务印书馆)の 2 冊の辞書を用い、動詞的用法があるもの、つまり辞書に軽声で表記されているものに関しては軽声として表記する。

ā ā	ā yā	áoáo	bādā	bā ji	bāngbāng	bēngbēng	bōbō	cācā	cēngcēng
1 啊啊	2 啊呀	3 嗷嗷	4 吧哒	5 吧唧	6 邦 邦	7 嘣 嘣	8 剥剥	9 嚓嚓	10 噌 噌
chāchā	chānchān	chīchī	cīcī	chīliū	cóngcóng	dādā	dāngdāng		
11 喳喳	12 潺潺	13 哧 哧	14 刺刺	15 哧溜	16 琮 琮	17 哒哒	18 当当		
dānglāng	dīda	dīdī	dígu	dīliū	dīlū	dīngdāng	dīnglíng		
19 当 啷	20 嘀嗒	21 滴滴	22 嘀咕	23 滴溜	24 嘀噜	25 丁 当	26 丁 玲		
dōngdōng	dūdū	dūlu	dūnang	duōsuo	è è	gābēng	gā jī	gēdēng	
27 咚 咚	28 嘟嘟	29 嘟噜	30 嘟囊	31 哆嗦	32 呃呃	33 嘎 嘣	34 嘎唧	35 咯 瞪	
gēgē	gūgū	gūgū	gūlu	gūlu	gūnong	guāngdāng	hāhā	hēhē	
36 咯咯	37 咕咕	38 呱呱	39 咕噜	40 骨碌	41 咕 咚	42 咣 当	43 哈哈	44 呵呵	
hēihēi	hēnghā	hōnghōng	hōnglōng	hūhū	hūlū	huāhuā	huālā		
45 嘿 嘿	46 哼 哈	47 哄 哄	48 轰 隆	49 呼呼	50 呼噜	51 哗 哗	52 哗 啦		
jīgu	kāchā	kēngchī	kēngqiāng	kuānglāng	lānglāng	lǎodao			
53 叽咕	54 咔嚓	55 吭 哧	56 铿 锵	57 哐 哐	58 琅 琅	59 唠 叨			
miāomiāo	nānnān	nínán	pādā	pīpā	pūchī	pūpū	pūtōng		
60 喵喵	61 喃喃	62 呢 喃	63 啪嗒	64 噼啪	65 噗嗤	66 噗噗	67 扑 通	68	
sàsà	shuāshuā	tāla	wēngwēng	xīxī	zézé	zhīya	zīliū		
飒飒	69 唰 唰	70 趿拉	71 嗡嗡	72 嘻嘻	73 啧啧	74 吱 呀	75 滋 溜		

上記の方法で検索した結果、75 語のうち、32 語のオノマトペに述語用法が確認できた。収集した全部の用例は 3,156 例であるが、そのうち述語用法として用いられたものは 348 例である。

4. 考察

4.1. 助詞の有無について

動態助詞(アスペクト助詞) “了 le, 着 zhe, 过 guo” を伴って述語になることについては既に先行研究に指摘があるが、本稿では 2 音節のオノマトペが取りうるすべての助詞とどのように共起しているのか、その使用実態について考察する。以下、表 3 に詳細を示す。

表 3: 助詞の有無

	詳細	用例数	割合(約)
述語 (348 例)	助詞 有	199 例	57%
	助詞 無	149 例	43%
	合計	348 例	100%

助詞を伴って現れるものが、助詞を伴わないものより若干頻度が高いことがわかる。次に、表 4 に後続する助詞の詳細を示す。

表 4: 助詞の詳細

	詳細	用例数	割合(約)
助詞 有 (199 例)	着	123 例	61.8%
	了	73 例	36.7%
	过	1 例	0.5%
	的	1 例	0.5%
	呢	1 例	0.5%
	合計	199 例	100.0%

述語用法として用いられるオノマトペが伴う助詞の共起頻度はかなりのばらつきが見られる。

4.1.1. “着 zhe” を後続した形で用いられるもの

助詞を取るもののなかで“着 zhe”を伴って用いられた用例が圧倒的に多く、約 61%を占めている。助詞“着 zhe”を用いている用例はすべてが、動的要素が含まれるオノマトペであり、“着 zhe”を後続することで、その動的なものがいま現在、行われている状態であることを表している。つまり、中国語の現在進行形を表す形の一つとして用いられていることが分かる。

- (25) 祥子本不吸烟，这次好似不能拒绝，拿了支烟放在唇间吧唧着。

(祥子はもともと煙草を吸わなかったが、今回は断れないようなので、煙草を口に咥えてスパスパ吹かしている。)

- (26) 不知道是谁在后边笑ママ声叹息地嘟囔着

(誰か知らないけど、後ろで笑いのため息混じりでブツブツ話している)

中国語において助詞“着 zhe”は、動詞に後続した形で動作の進行を表すことができる。助詞“着 zhe”以外にも、“在 zài”“正 zhèng”“正在 zhèng zài”を動詞の前に前置することで動作の進行を表す形式もあり、時にこれらと一緒に現れる。オノマトペの述語用法においても同じく、(27)のように、両方用いられる用例がいくつか確認できた。

- (27) 他正在咕咚着把纸咖啡杯，香蕉皮等等塞进一个杂货店的大牛皮纸袋然后扔到卡车后箱中去时，车门碰的一声碰上了，打了他的屁股一下。

(彼は今まさに、ブツブツ言いながら、紙のコーヒーカップやバナナの皮などを雑貨店の大きい紙袋に放り込んでからトラックの中に入れようとした。そのとき、車のドアとドーンとぶつかり、お尻を打った。)

“着 zhe” を伴っているものはほとんどが動的な意味を表すオノマトペと共起し、現在の動作の進行を表しているが、その中で (28) のように、ある結果状態を表す用例もある。

- (28) 金橋下意识地盯着她的脚，她的脚上现在穿着普通的黑布鞋，而且是趿拉着。
(金橋は無意識に彼女の足をじっと見た。彼女はいま黒布の靴をつまづけている。)

オノマトペに助詞“着 zhe”を後続することで「靴を履いている状態」を表している。本来、中国語における動作の進行は先述した“在 zài”“正 zhèng”“正在 zhèngzài”“呢 ne”“着 zhe”など、単独あるいはいくつかを組み合わせる形で用いる。その中で“着 zhe”は、主に“门开着 ménkāizhe”（ドアが開いている）のように、結果状態を表す際に多く用いられているが、オノマトペの述語用法において結果状態を表す際に用いられていたのは、この 1 例のみであり、それ以外はすべて動作の進行を表す際に用いられている。

日本語においても、「スル型」のオノマトペは「シタ／シテイル」形で用いられ、モノや人の属性・状態などを表すことができる。日本語では「スベスベした肌／壁がザラザラしている」のように性質を表すものが圧倒的に多いのに比べ、中国語においては、“着 zhe”を伴うオノマトペはほとんどが動作性を含むものであることが分かった。

4.1.2. 助詞“了 le”を後続した形で用いられるもの

助詞“了 le”を伴って現れる用例は 73 例で、約 37%を占めているが、その中で“了 le”が文末に使われ、文が完了した形の用例は 1 例も確認できなかった。ほとんどの用例は以下に示すように、目的語や補語を伴っている。

- (29) 他用力把拳头一伸，自个儿嘟噜了一句：“老卢这家伙简直要把我送到养老院啦！”
(彼は力を入れて拳を出して自分でブツリと一言言った。「廬さんというやつは、まったく、私を養護施設に入れようとしているんだね！」)
- (30) 中村接着又咕噜了几句日本话。
(中村は続けて日本語をブツブツ呟いた。)
- (31) 她小声地咕哝了一阵，介绍人郑重宣布：“她说她不扫地，因为她的兴趣只在洗衣服。”
(彼女は小さい声でしばらくの間ブツブツ言ってから、紹介人に「彼女は床を拭かないと言っている。彼女の関心は洗濯することだけにあるからだ」と厳粛に宣言した。)

このように、“了 le”が文末に現れて終わる文はなく、多くが目的語や補語を伴っている。

これについては後程詳しく述べる。

4.1.3. その他(助詞“的 de”“呢 ne”“过 ne”を後続した形で用いられるもの)

オノマトペとの共起頻度が低かった助詞は、次の、“过 ne”“的 de”“呢 ne”の3つである。これらはそれぞれ1例ずつしか確認できなかったため、まとめて示すことにする。

- (32) 脚踩油门哆嗦过, 手握方向盘害怕过, 没准还挨过教练的骂, 不过, 就是没有哭鼻子。
(足でアクセルを踏むとき震えたことがある。手でハンドルを持ったとき怖がったことがある。教官に叱られたこともあるだろう。しかし、泣くことだけは絶対なかった。)

李镜儿(2007)で既に指摘しているとおり、動的な意味を持つオノマトペは“了 le”“着 zhe”“过 guo”を伴うことができる。しかし、“着 zhe”“了 le”との共起頻度は高いものの、述語用法で“过 guo”を伴うものは非常に少なく、確認できたのは僅か1例のみであった。

次に、助詞“的 de”を後続するものについてみていく。先行研究では中国語のオノマトペは助詞“的 de”を伴って述語として用いることが多いと指摘しているが、今回収集した2音節のオノマトペの用例の中では僅か1例しか確認できなかった。以下、用例を示す。

- (33) 后来, 牙长齐整了, 歌声嗡嗡的, 很难听。爸解释说, 牙齿不漏风, 少了一个音。真遗憾!
(その後、歯が全部生え揃ったので歌声がこもっていて、ひどかった。「歯の間から空気がもれなくなったので音が一つ少なくなっている、誠に遺憾なことだ!」とお父さんは、説明した。)

2音節のオノマトペが述語として用いられる際には、“的(de)”を伴って形容詞的用法として用いられるものよりもオノマトペのみで静的状態を表すものが多い。これについては4.3節で触れることにする。

そして、先行研究で指摘がなかったオノマトペの述語文に語気助詞を伴う用例が1例のみ確認できた。以下、用例を示す。

- (34) 如果他炼的钢化验报告当天没出来, 你瞧吧, 他回家且嘀咕呢, 睡觉都不踏实。
(もし、彼が製鋼した調査報告が当日に出ていなかったら、みてろよ、彼はきっと家に帰ってもブツブツ言うだろう。熟睡もできないだろう。)

“呢 ne”は、返答要求、現在進行、推測を表すことなど様々な用法がある。ここで用いられている語気助詞“呢 ne”は、文末に置かれ話者の推測を表す場合に用いられている。「言うでしょう／言うだろう」のような意味を表している。

4.2. 目的語の有無について

先行研究では、中国語におけるオノマトペの述語用法は目的語を取るものが非常に少ないという指摘している。ここでは、2音節のオノマトペが述語として用いられる際にどのような目的語を取るのかについて考察する。以下、表5に詳細を示す。

表 5: 目的語の有無

	詳細	用例数	割合(約)
述語 (348 例)	目的語 有	110 例	32%
	目的語 無	238 例	68%
	合計	348 例	100%

全体的に、中国語のオノマトペは目的語を伴って現れるものが、目的語を伴わないものより頻度が低いことがわかる。次に、表6に後続する目的語の詳細を示す。

表 6: 目的語の詳細

	詳細	用例数	割合(約)
目的語 有 (110 例)	言語類名詞	59 例	53%
	具体名詞	34 例	31%
	身体名詞	6 例	5%
	疑問詞	5 例	5%
	抽象名詞	4 例	4%
	指示詞	1 例	1%
	フレーズ	1 例	1%
	合計	110 例	100%

4.2.1. 言語類を目的語として取るもの

2音節のオノマトペが述語として目的語を取る際、言語に関する名詞が最も多く、約53%を占めている。

(35) 树枝碰触着他们的肌肤，干枯的叶子擦过他们的头发，在他们的耳中呢喃着奇异的语言。

(枝が彼らの皮膚に触れている。枯れ果てた葉っぱは彼らの髪を擦りながら、彼らの耳元で奇妙な言語を囁いている。)

(36) 五点钟，介石进门来了。满口抱歉迟到。孔夫人佯作愠状狠狠地瞪他一眼。但是他走过

去，向她咕哝一些讨好的话。

(5 時になり、介石は入ってきた。ひたすら遅れたことについて謝った。孔夫人は怒っているように偽り、彼をひどく睨みつけた。しかし、彼は彼女のところまで歩いて行って、気に入られるための話を囁いた。)

- (37) 还有一次近代外交史课上，讲到杨度的时候老师说这个人他也不太清楚，我在下面咕了一句“王运的学生”，他马上就说，好，你来给大家说说，(後略)

(近代外交史の授業で楊度という人物について話していたとき、先生は自分もこの人物についてはあまりよく分からない、と言っていたので、私は、「王運の学生だよ」と一言呟いた。そしたら先生は直ちに、「じゃ、あなたが皆に説明してあげなさい」と言ってきた。 後略)

このように、目的語が言語類を表すものには、「言葉」、「言語」、「一言」、「日本語」などのような名詞が用いられている。この中でも特徴的なのは 59 例中、48 例の用例が (37) のように「一言」「二言」「幾つもの言葉」のような目的語を取っていることである。これは、今回調査したオノマトペの中で、述語になりやすい 2 音節のオノマトペに「言う」という意味を表す動詞として用いられる発話動詞が多いことに起因している。

4.2.2. 具体名詞を目的語として取るもの

次に、具体名詞を目的語として取るものは 34 例で、約 31% を占めている。具体名詞を目的語とする用例を以下に示す。

- (38) 金三爷有点摸不清头脑了，吧唧着烟袋，他楞ママ起来。

(金三爺はちょっと訳が分からなくなつて、キセルをスパスパ吸いながら、あきれ返った。)

- (39) 今天的许多老百姓，还未来得及辨别商品的优劣，到先开始嘀咕手中的钞票。

(今日の人たちは、商品の良し悪しを見分ける前に、手元のお金を気にしている。)

- (40) 土炕上一张旧席，半条烂毯，小孩污垢厚厚的脚上趿拉着一双破鞋。

(オンドルの上には古い敷物とぼろい毛布がある。垢が分厚い子供の足には古い靴がつかかっている。)

このように、目的語として用いられる具体名詞は「お金」「煙草」「靴」などの名詞である。具体名詞の用例のうち、最も特徴的なのは「靴」という名詞を目的語として取るものが圧倒的に多いことである。34 例中 30 例が「靴／スリッパ」などの名詞であり、これらを目的語として取るオノマトペは“趿拉 tāla” 1 語のみである。このことから分かるように、中国語のオノマトペにおいても修飾する対象物とコロケーション的に密接に関連しているものがある。日本語のオノマトペにおいても「ぷかぷかする」の場合は、「煙草」という対

象を修飾する際に用いられ、「すやすや寝る」の場合は、「赤ちゃん」という対象を修飾する際にのみ用いられ、大人の寝る姿には用いられにくい。

4.2.3. 身体名詞を目的語として取るもの

身体名詞を目的語として取る用例は6例で、全体の約5%を占めている。身体名詞を目的語として取る用例を以下に示す。

- (41) 屋外，雪花偶尔地在纸窗上飘洒那么几片；炕上，孩子轻轻地吧唧着小嘴。
(部屋の外は、雪がたまに紙窓に落ちてくるぐらいである。オンドルの上では、子供たちが口を軽くモグモグさせている。)
- (42) 那个男孩已经变成衰弱的老人，而当年的那个女孩于他邂逅时，他正哆嗦着手点燃着一支劣质的香烟。
(あの男の子はもう既に衰弱した老人になり、当時のあの女の子が彼と出会った時に、彼はまさに手を震わせながら、質の悪い煙草に火をつけているところだった。)

このように、目的語として用いられているのは、「手／口」などの名詞である。日本語のオノマトペが動詞的用法として用いられる際には他動詞的用法が少なく、身体名詞を目的語として取る際には、「足をバタバタする」のように「する形」を用いるよりも、「足をバタバタさせる」「口をパクパクさせる」のように「サセル」形を用いる傾向が強いと言われている(西尾寅弥 1981、影山太郎 2006)。今回の調査から中国語のオノマトペの述語用法においては、身体名詞を目的語として取る用例を確認することができたが、日本語のように使役形を用いる用例は確認できなかった。

李鏡儿(2007)では、中国語のオノマトペにおける述語用法において、他動詞として用いられるものが非常に少ないと記述しているが、本稿での調査を見る限り日本語のオノマトペの述語用法に比べると他動性を持っているオノマトペが少なくないということが明らかになった。

4.2.4. 疑問詞を目的語として取るもの

疑問詞を目的語として取る用例は全部で5例、全体の約5%を占めている。疑問詞を目的語として取る用例を以下に示す。

- (43) 你在那儿咕哝什么，杰克？有什么事别瞒着我。
(あそこで何をブツブツ言ってるの？ジャック、何かあったら私に隠さないでね。)
- (44) 大叔赶紧怯怯地责怪道：“你又唠叨个啥？”
(叔父さんはおどおどしながら素早く、「あなたは何をクドクド言っているの？」と答めた。)

このように、目的語として用いられたのは、すべて「何」を表す疑問詞である。口語とのバリエーションで“什么 shénme” 以外に、“啥 shá” も用いられている。

4.2.5. 抽象名詞を目的語として取るもの

抽象名詞を目的語として取る用例は全部で 4 例、全体の約 4%を占めている。抽象名詞を目的語として取る用例を以下に示す。

- (45) 因为他们说这是阴影之人聚会的地方，他们会在众人恐惧的时候聚集，在这里呢喃着邪恶的阴谋。
(彼らは言った。これは影の人間たちが集まる場所であると。彼らは人々がおびえているときに集まり、ここで邪悪な陰謀をヒソヒソ囁いている。)
- (46) 他衣着随便，和蔼可亲，愿意随时停下来听你唠叨生活的艰辛，和你共享甘苦。
(彼は服装がカジュアルで、とても優しい。いつでも立ち止まって、あなたが生活の辛さをクドクドと言うのを聞いてくれて、あなたと苦楽を共にする。)

このように、目的語になる抽象名詞は、「辛さ／陰謀／神秘さ」のような名詞である。そして、今回収集できた用例の中で抽象名詞は、「言う」という意味を表す発話動詞として用いられるオノマトペの目的語として用いられている。

4.2.6. その他(指示詞とフレーズ)

指示詞とフレーズを目的語として取る用例はそれぞれ 1 例ずつであった。ここでまとめて示す。

- (47) 唠叨这些，出点丑，目的是为了恳求科技界人士多看重些科技普通话，也就是使人明白的科技话。
(これらを呟くことで少し恥をさらしている目的は、科学界の人々にもっと科学技術に関する標準語つまり皆に伝わる分かりやすい科学技術の言葉を見てほしいためである。)
- (48) 我猜得到它们的想法：痛恨所有用两只脚步行的生物，他们不停呢喃著要勒死和压碎这些家伙。
(私は彼らの考えが推測できる。すべての 2 足で歩いている生物をひどく憎む。彼らはいつも、こいつらを縛り殺したい、潰し殺したいと呟いている。)

この 2 例に関しても、「言う」の意味を表すオノマトペであり、「～と言う」に当たる「話す内容」が丸ごと目的語の位置に置かれている。フレーズが目的語の位置に来られるのも

「言う」形のオノマトペの特徴であるといえる。

4.3. 補語の有無について

先行研究では、中国語におけるオノマトペの述語用法は方向補語と数量補語を取ることができると指摘している。本稿では、2音節のオノマトペが述語になった際にどのような補語を取りやすいのか、そしてその使用実態について考察する。以下、表7に詳細を示す。

表7: 補語の有無

	詳細	用例数	割合(約)
述語 (348例)	補語 有	70例	20%
	補語 無	278例	80%
	合計	348例	100%

中国語のオノマトペは補語を伴って現れるものが70例で、20%を占める。次に、表8に後続する補語の詳細を示す。

表8: 補語の詳細

	詳細	用例数	割合(約)
補語 有 (119例)	数量補語	48例	69%
	方向補語	14例	20%
	程度補語	3例	4%
	様態補語	2例	3%
	結果補語	2例	3%
	前置詞句補語	1例	1%
	合計	70例	100%

4.3.1. 数量補語を取るもの

数量補語を取る用例が最も多く、48例で全体の約69%を占めている。数量補語を取る用例を以下に示す。

(49) 他们叽咕了一阵，鬼子把听筒放下以后，脸上有了笑容，很快的走到我的跟前来，(後略)

(彼らはしばらくの間、ヒソヒソ話した。敵らは受話器を置き、笑顔を浮かべながら素早く私の前まで歩いてきた。 後略)

(50) 尽管他极力摆出一副和蔼状，但那目光中隐含的杀气还是让小六子哆嗦了一下。

(彼がいくら優しい顔をしていても、あの目に隠れている殺気は小六子をちょっと震
わせた(動揺させた)。)

- (51) 这话妻子几乎每天都要向我唠叨几遍。

(この話、うちの奥さんはほぼ毎日何回も私にブツブツ言ってくる。)

このように、数量補語は時間的に「しばらくの間」を表す“一阵 yízhèn, 一会 yíhuì”との共起頻度が非常に高い。それから、動作の量を表す“一下 yíxià”や“一番 yífan”と共起することも多い。

4.3.2. 方向補語を取るもの

方向補語を取る用例は全部で 14 例、全体の約 20%を占めている。方向補語を取る用例を以下に示す。

- (52) 他要是急了，那小三角眼一瞪，两片薄嘴唇一闭，大长脸嘟囔下来，也怪吓人的。

(もし、彼が怒ったら、小さい三角の目を睨み付け、薄い唇を閉じ、長い顔を垂らして
いるので結構怖いもんだよ。)

- (53) 屋里的人们等烦了，嘟囔起来：“许政委还不来呀”

(部屋の中の人たちはもう待ちきれなくなり、ブツブツ言い始めた。)

このように、方向補語は「～し始める」を表す“起来 qǐlai／开 kāi”や「～し続ける」を表す“下去 xiàqu”との共起頻度が非常に高い。

4.3.3. 程度補語を取るもの

程度補語を取る用例は全部で 3 例、全体の約 4%を占めている。程度補語を取る用例を以下に示す。

- (54) 酒鬼讲到他的手在粉粉光洁的大腿上抚摸时，就会张开忘乎所以的嘴，啊啊个不停。

(飲んべえは、彼が粉粉さんのなめらかできれいな足を触っているところを話すと、すぐ我を忘れて口をぽかんと開け、アアと叫び続ける。)

- (55) 竹筒一到晚哗啦个不停，像丧家道场上和尚们的万年经，依依呀呀，(後略)

(竹筒は夜になるとゴトゴト音が止まらない、まるで喪家道場のお坊さんたちのお経みたいに、ああいう 後略)

このように、3 例とも「～し続ける／～するのをやめない」を表す“不停 bùtíng”を補語に取る用例である。

4.3.4. その他(様態補語・結果補語などを取るもの)

様態補語、結果補語を取る用例はそれぞれ2例で、全体の約3%を占めている。様態補語、結果補語を取る用例を以下に示す。

- (56) “念去!”老师的嘴嘎唧得很快,眼角露出点笑意。
(「あっちで読みなさい。」先生の口は素早くベチャベチャ動き、そして目じりには少しの笑顔を見せた。)
- (57) 他唠叨完了,又爱拖マ一句:“话又说回来,如今日子越来越富裕了,也就不在乎初装费4000元了。”
(彼はブツブツ言い終わって、また「話戻るけど、今の時代は生活がどんどん裕福になってきたので、初期費用の4000元なんてものはあまり気にしなくなったね。」といった。)

このように、様態補語の用例においては、「素早く／多く」を表す“快 kuài／多 duō”を補語に取る。結果補語の用例においては、「～し終わる」を表す“完 wán”を後続した形で程度補語として機能する。

最後に、(58)のように、前置詞を伴って現れる用例があるが、本調査で僅か1例しか確認できなかった。

- (58) 像钢笔水嘀嗒在桌子上,甩在墙上(後略)
(万年筆のインクが机の上に垂れ落ちるように、壁に振り回された。)

4.4. 何も伴わないものについて

先行研究では、オノマトペの述語用法のうち、オノマトペのみで現れる用法が最も多いことについて指摘している。今回の調査は、何も伴わずに述語として用いられた用例が62例得られ、約18%を占めている。何も伴わず、そのまま述語成分として用いる用例を以下に示す。

- (59) 今天搞建设,我们要像红岩英烈那样,坚信事业必成”已84岁高龄的荣老,讲起话来声音铿锵
(「今日、建設をするにあたり、我々は紅岩英烈のように、「革命は必ず成功すると堅信するべきだ」もう84歳で高齢である栄さんが話をしていると美しく響く)
- (60) 夏末,记者来到临桂,但见移民新居楼房幢幢,街道整齐,新建校园书声琅琅
(夏の末、記者が臨桂に来たときは、移民用新居の建物がずらりと並び、町並みは綺麗に整っていて、新しく建てられた校庭に響く朗読の声は明るく澄んでいる)
- (61) 蜜蜂并非如我们认为的那样忙忙碌碌。它们没办法小点儿声嗡嗡

(蜂は私たちが思っているほど忙しくない、蜂たちはただ小さい音でブンブン飛ぶことができないだけだ)

上に示した用例は韻を踏むために用いられるとの指摘もあるが、動要素よりも静的要素のほうが強い印象を受ける。即ち、形容詞的に述語として用いられている。王文格(2010)では、中国語においては一般的に述語と主語の間には、ある音韻的な制約があると主張している。しかし、その制約がオノマトペの述語用法においては必ずしもそれほど機能していないことが伺える。

4.5. その他について

4.1 節から 4.4 節で挙げている用例以外にも、“连谓句(連述構造)”、並列構文で用いられるもの、承接構文で用いられるものなどがある。以下、順に見ていく。

連述構造で用いられた用例は 42 例で約 12%を占める。主に(62)のように“着 zhe”を伴って用いられたものと、(63)のように“道 dào”を伴うものである。

- (62) 这人本能地哼了一声。原来是活的，我嘟囔着蹲下身子，于是俺心里想：是救他呢还是继续前行？

(この人は本能的に一言唸った。「元々は生きていたのね」と私はブツブツ言いながらしゃがんだ。そして私は心の中で「助けるべきか、それとも前に進むべきか？」を考えた。)

- (63) 陈一平嘟囔道：“说什么呀，值得吗？”

(陳一平がブツブツと言った：「何を言ってるんだ。やる甲斐があるのか？」)

“着 zhe”を用いることで「～して～」という意味になり、動作と動作が順次に行われていることを表している。特徴的なのは、発話動詞として用いられるオノマトペが“道 dào”と共起し、用いられることである。(63)のような用例は全部で 21 例、連述構造の用例全体の約 50%を占めている。

続いて、並列構文についてみていく。並列構文の用例は全部で 6 例確認できた。以下用例を示す。

- (64) 乌龙却一边吃一边咕叻：“我宁愿要女人！”

(烏龍は食べながらブツブツ言った。「私はむしろ女を選択する！」)

- (65) 他脖子上挂一支匣子枪，一面走，一面嘟囔：“妈的”

(彼の首にはモーゼル拳銃がかかっている、歩きながらブツブツ言った「畜生」)

どちらも「～しながら～する」の意味を表す“一边 yíbiān, 一边 yíbiān”や“一面 yímiàn,

一面 yímiàn” の構文を用いて動作の同時進行を表す用例である。

次に、承接構文についてみていく。承接構文の用例は全部で1例しか確認できなかった。以下用例を示す。

(66) “四人帮”粉碎了，他的平板的脸上也出现过短暂的笑容，但跟着肚子里一阵叽咕就消失了。

(「四人組」は終わった。彼の平べったい顔には短い間の笑顔が現れた。しかし、お腹がしばらくゴロゴロ鳴るにつれて消えて行った。)

「～するにつれて～する」のような意味として“就 jiù”を伴って、承接構文として用いられている。

5. おわりに

本稿では、中国語における2音節のオノマトペの述語用法について、その使用実態およびその諸特徴について考察を行った。

先行研究で指摘している記述を検証することによって、その使用実態を探ることができた。さらに今回の調査を通して、今まで指摘されなかった新たなパターンも見ることができた。

助詞の有無に関して、助詞を伴うものと伴わないものの使用頻度はあまり差がなかった。助詞を伴って用いられる用例においては、共起する助詞によってばらつきがあり、本稿の調査では、“着 zhe”を伴う用例の使用頻度が60%を超えて最も高かった。助詞“了 le”の使用頻度も高かったが、先行研究の指摘にあった“的 de”を伴う用例はごく僅かであることが確認できた。このことから中国語における2音節のオノマトペは“的 de”を伴って用いることは稀であり、共起度が低いと言えるだろう。

2音節のオノマトペが目的語を伴う用例は約32%を占めている。中国語のオノマトペは他動詞的に用いることが少なく、さらに目的語を伴う使い方は非常に少ないとする先行研究の結論とは異なり、目的語を伴って現れている用例が3割近く占めていた。そして、目的語になる名詞の特徴としては「言語類」のものが圧倒的に多く、約半数以上を占めている。身体名詞を目的語として取るオノマトペは、日本語において「サセル」形を多用しているのに対して、中国語ではそのような制限見られなかった。

補語を伴う用例は約20%を占めている。「時間的にしばらくの間」を表す用例や、動作の量を表す補語の使用頻度が高く、次いで多く用いられていたのが「～し始める」「～し続ける」のような意味を表す補語であった。結果補語を伴うものが非常に少なかったのは、4.1で触れた“着 zhe”に関係していると考えられる。中国語で、“着 zhe”は動作完了の持続を表すことができることから、結果補語と“着 zhe”を併用しているためであると考えられる。

何も伴わないものに関しては、そのままの形で、あるものの状態を表す形容詞的用法として用いられている。そして、「言う」形のオノマトペで、「～と言う」のように、日本語であれば括弧で括られる部分の前に「：」記号が用いられ、後ろに話した内容が後続するパターンが非常に多かった。

本稿では、一般動詞文に加え、連述構文、並列構文や承接構文など様々な複文に現れたオノマトペの述語用法についても触れた。このように、中国語の 2 音節のオノマトペの述語用法は様々な制限を受けているものの、目的語や補語を取る、複文を作るなど、一般動詞の述語用法と区別されるものではないことが分かる。

日本語において使用頻度の高い「しっかりする／はっきりする」などは、オノマトペである認識が薄くなっていると言われている。中国語においても日本語同様に、使用頻度が非常に高い“呢喃 *nínán*”“嘟囔 *dūnang*”などは、野口宗親(1995)や耿二岭(1986)でいう動詞化されたものである。インフォーマントへの調査からは、これらのオノマトペは、動詞として認められ、オノマトペであるという認識が非常に薄いということが分かった。

今回は調査の対象として 2 音節のオノマトペ 75 語を無作為に選んで用例を収集したため、分析や考察結果に偏りがあった可能性がある。これからはもっと多くの用例を収集するとともに、2 音節のオノマトペ以外の音節の述語用法について考察することを今後の課題にしたい。

参考文献

【中国語の文献】

- 傅力(1983)「象声词作谓语浅说」『汉语学习』第四期(总十六期)：2-55 汉语学习编辑部
耿二岭(1986)『汉语拟声词』湖北：湖北教育出版社
郭锐(2002)『现代汉语词类研究』北京：商务印书馆
李镜儿(2007)『现在汉语拟声词研究』上海：学林出版社
马庆株(1987)「拟声词研究」『语言研究论丛』第四期，南开大学出版社(筆者閲覧：2002 著名中年语言学家自选集，马庆株卷 229-261 安徽教育出版社)
邵敬敏(1981)「拟声词初探」『语言教学与研究』第四期(总第十期)：57-66 语言教学与研究出版社
王文格(2010)『现在汉语形谓句优先序列研究』北京：中国社会科学出版社
徐洁・姚双云(2009)『动词与宾语问题研究』武汉：华中师范大学出版社
朱德熙(1982)『语法讲义』北京：商务印书馆

【日本語の文献】

- 影山太郎(2006)「擬態語動詞の統語構造」『人文論究』56-1：83-100 関西学院大学人文学会
黄慧(2010)「日中オノマトペの述語用法の諸特徴に関する対照研究 ―辞書の用例を用いた予備調査―」東京外国語大学記述言語学研究論集『思言』6：3-23 東京外国語大学

- 高増 傑(1982)「日中両国語における擬態語の対照—その構成と文法機能に関する二・三の考察」『中国語研究』22 : 32-53 白帝社
- 砂岡 和子(1990)「現代中国語のオノマトペ」『学習院大学言語共同研究所紀要』13 : 83-96 学習院大学
- 丹野 眞智俊(2005)『オノマトペ(擬音語・擬態語)を考える—日本語音韻の心理学的研究』京都 : あいり出版
- 陶 振孝(1992)「中国語と日本語の「擬声語」についての対照」『講座 日本語教育』27 : 148-161 早稲田大学語学教育研究所
- 西尾 寅弥(1981)「「擬音語・擬態語+する」の形式について」『語学と文学』20 : 82-96 群馬大学語文学会
- 野口 宗親(1995)『中国語擬音語辞典』東京 : 東方書店
- ヤーホントフ C.E.(1957)『中国語動詞の研究』(橋本萬太郎 1987 訳)東京 : 白帝社

【調査資料】

北京大学中国语言学研究中心语料库 (Center for Chinese Linguistics PKU)

【参考辞書】

- 依藤 醇・小川 文昭・三宅 登之編(2002)『中日辞典 第二版』東京 : 小学館
- 中国社会科学院语言研究所词典编辑室編(2007)『现代汉语词典 第五版』北京 : 商务印书馆

概要

汉语中关于拟声词谓语用法的先行研究不太多，本文的主要目的在于考察汉语中双音节拟声词的谓语用法。

我们任意选定了 75 个双音节拟声词，从语料库收集到谓语用法的用例一共 348 例。

通过考察，我们得知汉语中双音节拟声词后助词的用法占全体的一半，而后附的助词不同，其使用频率也有很大差别。在这次考察中，后助词“着”的比率最多。汉语中“着”可以表示动作的进行也可以表示动作完了之后的持续态，而这次选定的双音节拟声词中具有动词性的拟声词较多，导致“着”的用例占 60% 以上。其次，后附“了”的用例占全体的 37%，主要用在动词性拟声词后，来表示动作的完成。先行研究中提到后附“的”的用法最一般，而这次我们的考察双音节拟声词中，后附“的”的用例极少，仅 1 例。汉语中可以后附“的”后，以形容词用法来充当谓语。形容词用法表示一种静态的状态，而上述“着”也可以表示一个持续的状态。双音节拟声词不带任何助词，可以独自用在句尾来表示一个状态。所以我们可以推测后附“的”的用例极少是由于这两个原因。

先行研究中还提到汉语拟声词作谓语时，很少带宾语，但是我们的考察中带宾语的用例占全体的 32%。双音节拟声词带宾语也有特征，宾语中表示语言行为的名词最多，占全体的 54%，其原因在于任意选定的 75 个双音节拟声词中表示“说话”类的动词性拟声词所占的比例比较多。其次是具体名词，而具体名词中“鞋”类名词最多占全体的 88%。带“鞋”类名词的所有用例，其双音节拟声词都是“趿拉”。由此可知，汉语中拟声词与其修饰的对象有极其密切的联系，有一个搭配问题。另外，日语中拟声词做谓语，如后面带身体部位的名词，一般其拟声词谓语用做祈使句。而汉语的拟声词谓语句没有其现象。

带补语的用例占全体的 20%。后附数量补语最多，占全体的 69%。大部分是表示时间量的“一会，一阵”还有表示动作量的“一下”。其次是方向补语，“起来，来，上了”等，表示动作的开始。

フィンランド語の E 不定詞具格形として現れる動詞の意味特徴

坂田 晴奈

(東京医薬専門学校非常勤講師)

キーワード：フィンランド語、不定詞、コーパス、動詞の意味

1. はじめに

本稿は、フィンランド語¹の E 不定詞具格形として現れる動詞がどのような意味特徴を持っているかを明らかにすることを目的としている。坂田 (2010)(筆者の博士論文)では、E 不定詞具格形として現れる動詞には、人間の感情や態度と密接に関わるものが多いという分析結果が得られた。この結果は、コーパスデータを基にしたものであるが、本稿では、別のデータでも同じ結果が得られるかを検証する。

さらに、動詞の意味特徴を客観的に明らかにするために、比較対象として A 不定詞変格形のデータも取り上げる。

2. 先行研究

フィンランド語には、10 種類の不定詞が存在する。本節では、これらの不定詞を概観した後、本稿で扱う 2 つの不定詞についての先行研究をまとめる。

2.1. 研究対象

まず、フィンランド語の不定詞について概観する。Hakulinen et al. (2004: 491-492)(以下タイトルの頭文字を取って ISK とする)によると、フィンランド語には以下のような 10 種類の不定詞が存在する。puhua「話す」を例に用いて示す。

¹ フィンランド語はウラル語族、フィン・ウゴル語派、バルト・フィン諸語に属する言語で、基本語順は SVO である。母音調和や子音階程交替といった現象があり、膠着語に分類される。例文の表記は正書法に依拠する。母音調和により接辞等に異形態が存在する場合、a または ä ならば A、o または ö ならば O、u または y ならば U と表記する。本稿でいうフィンランド語とは、いわゆる共通語を指すものとし、特に断りがない限り方言は扱わない。なお、欧文の先行研究の訳は筆者による。例文の形態素分析、グロス、訳も全て筆者による。

表 1: フィンランド語の不定詞

不定詞の形式	具体例	基本的な意味
A 不定詞基本形	puhua	「話す(こと)」
A 不定詞変格形	puhuakseen	「話すために」
E 不定詞内格形	puhuessa	「話す時」
E 不定詞具格形	puhuen	「話しながら」
MA 不定詞内格形	puhumassa	「話している」
MA 不定詞出格形	puhumasta	「話す(ことを止める etc.)」
MA 不定詞入格形	puhumaan	「話す(ことに対して etc.)」
MA 不定詞接格形	puhumalla	「話すことで」
MA 不定詞欠格形	puhumatta	「話さずに」
MA 不定詞具格形	puhuman	「話すはずだ」

本稿での研究対象は E 不定詞具格形であるが、その比較対象として A 不定詞変格形も取り上げる。A 不定詞変格形を比較対象としたのは、不定詞として現れる動詞に特に偏りが見られないと思われるからである。以下では、これら 2 形式について述べる。

2.1.1. E 不定詞具格形について

E 不定詞具格形は、動詞語幹に不定詞標識の *-e-* および具格語尾の *-n-* が後続することによって形成される。E 不定詞具格形は手段の副詞句として機能する構造において用いられ、様々な付加的関係も表す(ISK: 493)。

以下に、E 不定詞具格形の例をあげる。例文中では E 不定詞具格形を太字と下線で示す。(1) のように、人間の態度や感情を表して動作を補足する場合と、(2) のように、複数の動作を同時進行で行っている様子を表す場合とがある。

- (1) Katsel-i-mme Ville-ä **ihail-le-n.**
 look-PST-1PL Ville-PAR admire-EINF-INS
 「私たちは、感嘆しながら Ville を見た。」

(ISK: 493)

- (2) Hän palautt-i laitte-e-n **väittä-e-n** se-n ole-va-n rikki.
 3SG return-PST.3SG device-GEN claim-EINF-INS it-GEN be-PR.PTCP-GEN broken
 「彼はその機械が壊れているとクレームをつけながら、機械を返した。」

(ISK: 493)

E 不定詞具格形は、以下のように慣用的な表現としても用いられることがある。

- (3) Poikkean-*n* *tei-lle* *men-ne-n* *tul-le-n*.
 drop.in-1SG 2PL-ALL go-EINF-INS come-EINF-INS

「行き帰りにあなたたちのところに寄ります。」

(Penttilä 1957: 496)

kuulla 「聞く」、*nähdä* 「見る」、*tietää* 「知る」といった知覚動詞が E 不定詞具格形となる場合、名詞の属格形もしくは所有接尾辞により動作主標示がなされる。また、*tulla* 「来る」が用いられる場合にも動作主標示が見られる(ISK: 513)。

- (4) Minä *en* *ole* *sano-nut*, *eikä* *kukaan* *ole* *sitä*
 1SG NEG.V.1SG *be* say-PST.PTCP and:NEG.V.3SG anybody *be* it:PAR
sano-nut *kuul-te-ni*.
 say-PST.PTCP hear-EINF-INS.POSS.1SG

「私は言わなかったし、私の聞いているところでは誰もそれを言わなかった。」

(ISK: 513)

2.1.2. A 不定詞変格形について

A 不定詞変格形は、動詞語幹に不定詞標識の *-A-* および変格語尾の *-ksi-*、さらには動作主の人称に一致した所有接尾辞が後続することによって形成される。A 不定詞変格形の場合、所有接尾辞は必須である(ISK: 507)。3 人称の所有接尾辞が付く場合が最も多いが、1 人称や 2 人称の所有接尾辞が付く例も少なからず見られる。変格語尾の *-ksi-* は、後ろに所有接尾辞が続くことにより母音に変化し *-kse-* となる。

A 不定詞変格形は、副詞的な修飾要素として用いられる(ISK: 491)。最も多い用法は「～のために」という目的を表すものである。以下に例をあげる。例文中では A 不定詞変格形を太字と斜字体で示す。

- (5) Hän *säästä-ä* *osta-a-kse-en* *asunno-n*.
 3SG economize-3SG buy-AINF-TRA-POSS.3 flat-GEN

「彼は住居を買うために節約している。」

(ISK: 491)

A 不定詞変格形には様々な用法がある。(6) のように話者の考えや見立てを表す例、(7) や (8) のように動詞 *olla* 「ある、いる」の定形と結び付いて慣用的な表現を形成する例などが見られる。

- (6) Ketään *ei* *huoma-ta-kse-ni* *ole* *unohde-ttu*.
 anyone:PAR NEG.V.3SG notice-AINF-TRA-POSS.1SG *be* forget-PASS.PST.PTCP

「私が気付いたところでは、誰も忘れられていなかった。」

(Penttilä 1957: 495)

- (7) Se tule-e jos on *tul-la-kse-en*.
 it come-3SG if be:3SG come-AINF-TRA-POSS.3
 「もしそれが来るのであれば、それは来る。」

(ISK: 491)

- (8) Hän ei ol-lut *tietä-ä-kse-en* koko asia-sta.
 3SG NEG.V.3SG be-PST.PTCP know-AINF-TRA-POSS.3 whole thing-ELA
 「彼はそのこと全体について知らないふりをした。」

(Penttilä 1957: 495)

2.2. 坂田 (2010) の考察

不定詞についての先行研究は多く見られるが、不定詞として現れる動詞の種類や意味について分析を行った研究は、坂田 (2010) 以外には見られない。したがって、ここでは坂田 (2010) の考察結果をまとめる。

坂田 (2010) では、コーパスデータを基に不定詞の分析を行った。用いたコーパスは、フィンランド内国語センターが主に作成した Kielipankki というコーパス・デポジトリに収録されているものである。本稿でも Kielipankki のデータを基に分析を行うので、コーパスの詳細は 3. で述べる。坂田 (2010) で用いたデータは、Helsingin Sanomat(ヘルシンキ新聞)が 1995 年に掲載した記事(以下 HS1995 とする)の一部である。2つの不定詞で用いたデータは、HS1995 の中でも異なるデータである。E 不定詞具格形の分析で用いたコーパスの総語数は 2,840,480 語で、得られた当該不定詞の用例数は 1,779 例であった。A 不定詞変格形の分析で用いたコーパスの総語数は 5,749,143 語で、得られた当該不定詞の用例数は 1,331 例であった。

E 不定詞具格形として現れた動詞の異なり語数は 464 語であった。頻度が高かった動詞は、yllättää「驚かせる」(278 例)、ajatella「考える」(116 例)、viitata「指し示す」(51 例)、hymyillä「微笑む」(28 例)、johtua「～から発生する」(27 例)、pitää「保持する」(26 例)、päätellä「結論を出す」(26 例)、tehdä「作る、する」(26 例)、voittaa「勝つ」(22 例)、hävitä「消える」(21 例)などであった。

E 不定詞具格形として現れた動詞で最も頻度が高いのは yllättää「驚かせる」で、全体の 16% という高頻度であった。yllättää の E 不定詞具格形 yllättäen は、「思いがけなく」という意味の慣用表現として用いられるため、頻度が高かったと思われる。さらに、現れた動詞の意味特徴に関する記述を以下に引用する。

E 不定詞具格形として現れた頻度が高い動詞は、hymyillä「微笑む」、naureskella「嘲笑う」など、通常はさほど頻度が高くないと思われる動詞であった。また、このような動詞は継続性の高い行為を表すものが多い。E 不定詞具格形として現れた動詞全体を見ると、「笑う」「ぐずぐずする」「恥じる」

など、人間の感情や態度に直接関係した動詞が、他の不定詞の場合より明らかに多い。これは、態度や付帯状況を表すという E 不定詞具格形の意味特徴とも関係していると考えられる。E 不定詞具格形によって表される「～しながら」という表現は、「食べながら話す」、「歩きながら考える」のような動作の同時進行を表す場合の他に、「笑いながら答える」、「恥ずかしがりながら言う」のように、態度や感情を補足する場合も多く存在すると予想できるからである。

(坂田 2010 : 133)

他方、A 不定詞変格形として現れた動詞は、異なり語数で 377 語であった。頻度の高かった動詞は、saada「得る」(133 例)、päästä「離れる、達する」(77 例)、voida「できる」(35 例)、olla「ある、いる」(34 例)、nähdä「見る」(29 例)、hoitaa「世話をする」(21 例)、tulla「来る」(21 例)、muistaa「思い出す」(20 例)、estää「妨げる」(19 例)、tehdä「作る、する」(18 例)などであった。

A 不定詞変格形として現れた動詞の意味特徴について、E 不定詞具格形のような明確な特徴は見られなかった。その理由としては、A 不定詞変格形には様々な用法があり、不定詞として現れる動詞に偏りが無いためであると考えられる。

以上のように、E 不定詞具格形として現れる動詞には、人間の態度や感情に直接関わる動詞が多いことが坂田 (2010) で実証された。これは、E 不定詞具格形の用法に大きく影響を受けたものであろう。

本稿では、坂田 (2010) では扱わなかったコーパスデータを基に、E 不定詞具格形として現れる動詞の意味特徴について再度検証する。

3. 研究方法

本研究で用いたのは、書き言葉コーパスのデータである。コーパスは、フィンランド内国語センター(Kotimaisten kielten tutkimuskeskus : 略称は Kotus)が主に作成し、インターネット上に公開している Kielipankki に収録されているものである。Kielipankki における個々のコーパスは、使用許可を取り、WWW のインターフェースで検索する仕組みになっている。

Kielipankki は、新聞、日刊紙、週刊誌(地方紙を含む)などの記事、および文学テキストを含むコーパスのデポジトリであり、総語数は約 1 億 8,500 万語である。この中には、フィンランド語だけでなく、スウェーデン語のテキストも含まれている。フィンランド語のテキストは 131,406,087 語、スウェーデン語のテキストは 53,473,670 語である(2012 年 11 月 7 日現在)。

新聞記事類のコーパス作成は Kotus によるものであるが、文学テキストは出版社から得たプレーンテキストをそのまま載せているものもある。大部分のフィンランド語テキストには、品詞や形態に関する情報が付加されているため、特定の語形を持つ語や、特定の品詞に属する語の検索に際しては、「WWW-Lemmie 2.0」というウェブインターフェースを持つ検索プログラムを利用することができる。したがって、ユーザーが自分で正規表現を書く必要はない。

本研究では、Iltalehti が 1996 年に掲載した記事(コーパス名は ilta1996)を用いた。Iltalehti は、首都ヘルシンキで発行されている夕刊紙であり、ilta1996 の総語数は 955,644 語である。この ilta1996 から、タグ検索により、E 不定詞具格形および A 不定詞変格形の用例を収集した。用例の出典は(ilta1996/643331)のように表記する。スラッシュの右側は当該用例を含む記事の識別番号である。

本研究の目的は、不定詞として現れた動詞の意味特徴を分析することである。よって、定形動詞として現れた動詞の頻度と比較することで、不定詞として現れた動詞の意味特徴の偏りを検証した。その検証のために用いたのは、Saukkonen et al. (1979) によるフィンランド語の語彙頻度調査である。

Saukkonen et al. (1979) は 1960 年代の小説、ラジオ、新聞、ノンフィクションの作品からなるコーパス(延べ語数 408,301 語、異なり語数 43,670 語)を基に、語彙頻度の調査をしたものである。Saukkonen et al. (1979) による語彙頻度は、最も頻度が高いものは olla「ある、いる」で 23,796 回の出現、最も少ないものは 2 回の出現となっている。

この Saukkonen et al. (1979) におけるそれぞれの動詞の出現回数と、本研究で得られた不定詞として現れた動詞の用例数を比較した。

4. 分析と考察

ilta1996 より得られた E 不定詞具格形の用例は 689 例で、不定詞として現れた動詞の異なり語数は 315 語であった。他方、A 不定詞変格形の用例は 275 例で、不定詞として現れた動詞の異なり語数は 127 語であった。本節では、これら 2 形式の不定詞として現れた動詞の意味特徴を分析・考察する。

4.1. E 不定詞具格形

ilta1996 から得られた E 不定詞具格形として現れた動詞の中で、最も多かったのは慣用表現として頻度が高い yllättää「驚かせる」であった。以下に、上位 10 語の動詞を示す。

表 2: E 不定詞具格形として多く現れた動詞

順位	不定詞として現れた動詞	用例数	Saukkonen et al. (1979)
1	yllättää 「驚かせる」	63	48
2	kävellä 「歩く」	22	54
3	ajatella 「考える」	16	242
4	vedota 「訴える」	16	26
5	viitata 「指し示す」	16	72
6	johtua 「～から発生する」	15	197
7	lähteä 「出発する」	12	399
8	nauraa 「笑う」	11	32
9	päätellä 「結論を出す」	11	39
10	uhata 「脅す」	11	38

上位 10 語の動詞を Saukkonen et al. (1979) の語彙頻度と比較してみると、Saukkonen et al. (1979) において頻度のさほど高くない動詞が、本研究においては比較的多く現れている傾向がうかがえる。表 2 における動詞で、人間の感情や態度に直接関わる動詞は少ないが、現れた全ての動詞を見ると、(10) や (11) に見られるような、「笑う」などの人間の感情を表す動詞が目立った。

- (9) Berit menett-i ensin yllättä-e-n sisare-nsa.
Berit lose-PST.3SG firstly surprise-EINF-INS sister-GEN.POSS.3

「Berit はまず、思いがけなく姉を失った。」

(ilta1996/405977)

- (10) Lopulta viulu löyty-i huono-ssa kunno-ssa lelu-laatiko-n
at.last violin be.found-PST.3SG bad-INE condition-INE toy-box-GEN
pohja-lta, isä kerto-o hymyil-le-n.
bottom-ABL father talk-3SG smile-EINF-INS

「バイオリンは、おもちゃ箱の底からひどい状態で見つかったんだ、と父は微笑みながら語る。」

(ilta1996/406674)

- (11) Naura-e-n ja vilkutta-e-n he juokse-vat kohti auto-a.
laugh-EINF-INS and wink-EINF-INS 3PL run-3PL towards car-PAR

「笑ってウィンクしながら、彼らは車の方へ走っていく。」

(ilta1996/407769)

E 不定詞具格形として現れた 315 語の動詞のうち、54 語(17.1%)が人間の感情や態度に直接関係する動詞だと判断できた。以下にその一覧を示す。

【人間の感情や態度に直接関係する動詞一覧(アルファベット順)】

arastella「びくびくする」／armahtaa「気の毒に思う」／arvostella「批評する」／epäillä「疑う」／halveksua「軽蔑する」／helliä「可愛がる」／hienostella「きざに振る舞う」／hihkua「大声を出す」／huohottaa「ため息をつく、喘ぐ」／huolehtia「留意する」／huomioonottaa「考慮する」／huutaa「叫ぶ」／hymyillä「微笑む」／hymyilyttää「笑わせる」／hyvällä「善意を表現する、可愛がる」／ihailla「感嘆する」／ihmetellä「驚く」／irvistellä「歯をむき出す」／itkeä「泣く」／jylistä「不平を言う」／karjua「わめく」／kiittää「賞賛する、感謝する」／kiristellä「歯ざしりをする」／kirkua「金切り声を上げる」／kunnioittaa「尊敬する」／luottaa「信用する」／nauraa「笑う」／pelätä「怖れる」／puhista「ため息をつく」／puhkua「ため息をつく」／punnertaa「重い足取りで歩く」／rypistää「しわを寄せる」／sadatella「悪態をつく」／sormeilla「ごまかす」／syyttää「告訴する」／sättiä「咎める」／tahtoa「望む、欲する」／toivottaa「望む」／uhata「脅す」／uhmata「反抗する」／ujostella「恥ずかしがる」／vaalia「大事にする、面倒を見る」／vaatia「要求する」／valittaa「文句を言う」／vapista「震える」／varoa「気をつける」／vedota「訴える」／vieroksua「遠ざける」／virmistää「にやにやする」／väittää「反論する」／väristä「ぶるぶる震える」／ylistää「褒める」／yllyttää「唆す」／äristä「わめく」

E 不定詞具格形として現れた動詞は、人間の感情や態度に直接関わる動詞が多いという傾向が、坂田 (2010) と同様裏付けられたと言える。この結果は、次節の A 不定詞変格形の結果と比較すると、さらに明確に見えてくる。

4.2. A 不定詞変格形

ilta1996 から得られた A 不定詞変格形として現れた動詞の中で、最も多かったのは saada「得る」であった。以下に、上位 10 語の動詞を示す。

表 3: A 不定詞変格形として多く現れた動詞

順位	不定詞として現れた動詞	用例数	Saukkonen et al. (1979)
1	saada 「得る」	26	2160
2	päästä 「離れる、達する」	22	399
3	olla 「ある、いる」	11	23796
4	muistaa 「記憶する」	7	208
5	nähdä 「見る」	6	517
6	voida 「できる」	6	2303
7	hoitaa 「世話をする」	5	160
8	löytää 「見つける」	5	177
9	pitää 「保持する」	5	1065
10	pystyä 「できる」	5	173

上位 10 語の動詞を Saukkonen et al. (1979) の語彙頻度と比較してみると、Saukkonen et al. (1979) において頻度の高い動詞が、本研究においても多く現れている傾向がうかがえる。以下に、例をいくつか示す。

- (12) He halua-vat työ-vuorottelu-un **saa-da-kse-en** levähdys-tauo-n.
 3PL want-3PL work-alternation-ILL get-AINF-TRA-POSS.3 standstill-rest-GEN
 「彼らは、途中休憩を得るために勤務交替を望んでいる。」
 (ilta1996/406915)

- (13) **Kehitty-ä-kse-en** ihmisen on murtaudu-tta-va
 develop-AINF-TRA-POSS.3 human.GEN be.3SG break-PASS-PR.PTCP
 historia-n kahle-i-sta.
 history-GEN fetter-PL-ELA
 「発展するためには、人間は歴史の足かせから脱却しなければならない。」
 (ilta1996/405822)

- (14) Minu-n **muista-a-kse-ni** ne lehmä-t sa-i-vat se-n
 1SG-GEN remember-AINF-TRA-POSS.1SG it.PL cow-PL get-PST-3PL it-GEN
 taudi-n juuri lampaa-sta.
 disease-GEN just sheep-ELA
 「私の記憶では、それらの牛はまさに羊からその病気をもらったのだ。」
 (ilta1996/405968)

A 不定詞変格形として現れた 127 語の動詞のうち、人間の感情や態度に直接関係すると判

断できた動詞は、*kostaa*「復讐する」、*kiusata*「苦しめる」、*vedota*「訴える」の 3 語(2.4%)のみであった。これは、E 不定詞具格形の結果と大きく異なる。動詞の意味特徴として、他に特異な傾向は見られず、フィンランド語における動詞の頻度にほぼ似通った出現状況であると言える。

ここで、2 つの不定詞として現れた動詞の頻度と、*Saukkonen et al. (1979)* における動詞の頻度をさらに詳しく比較してみる。以下の表 4 および表 5 に、E 不定詞具格形および A 不定詞変格形として現れた動詞の上位 30 語までを示す。合わせて *Saukkonen et al. (1979)* における動詞の頻度もあげる。*Saukkonen et al. (1979)* の調査においては、100 回以上現れていればかなり頻度が高いと考えられるので、100 回以上出現している動詞を太字と斜字体で示す。

表 4: E 不定詞具格形として現れた動詞(上位 30 語)

順位	不定詞として現れた動詞	用例数	Saukkonen et al. (1979)
1	yllättää 「驚かせる」	63	48
2	kävellä 「歩く」	22	54
3	ajatella 「考える」	16	242
4	vedota 「訴える」	16	26
5	viitata 「指し示す」	16	72
6	johtua 「～から発生する」	15	197
7	lähteä 「出発する」	12	399
8	nauraa 「笑う」	11	32
9	päätellä 「結論を出す」	11	39
10	uhata 「脅す」	11	38
11	saada 「得る」	10	2160
12	ottaa 「取る」	9	793
13	huomioida 「気付く」	8	8
14	hymyillä 「微笑む」	8	20
15	liittyä 「結び付く」	8	251
16	pitää 「保持する」	8	1065
17	tehdä 「作る、する」	8	1046
18	katsoa 「見る」	7	428
19	yrittää 「試みる」	7	136
20	laskea 「下りる、計算する」	6	262
21	luottaa 「信用する」	6	33
22	tulla 「来る」	5	1675
23	ajaa 「運転する、駆り立てる」	4	130
24	antaa 「与える」	4	1096
25	arvioida 「見積もる」	4	87
26	harkita 「計画する」	4	54
27	kunnioittaa 「尊敬する」	4	35
28	lentää 「飛ぶ」	4	45
29	mukailla 「模倣する」	4	0
30	olla 「ある、いる」	4	23796

表 5: A 不定詞変格形として現れた動詞(上位 30 語)

順位	不定詞として現れた動詞	用例数	Saukkonen et al. (1979)
1	saada 「得る」	26	2160
2	päästä 「離れる、達する」	22	399
3	olla 「ある、いる」	11	23796
4	muistaa 「記憶する」	7	208
5	nähdä 「見る」	6	517
6	voida 「できる」	6	2303
7	hoitaa 「世話をする」	5	160
8	löytää 「見つける」	5	177
9	pitää 「保持する」	5	1065
10	pystyä 「できる」	5	173
11	saavuttaa 「到達する」	5	164
12	voittaa 「勝つ」	5	124
13	kostaa 「復讐する」	4	0
14	säilyttää 「保存する」	4	86
15	tehdä 「作る、する」	4	1046
16	välttää 「やめる」	4	49
17	estää 「防ぐ」	3	98
18	jääda 「残る」	3	459
19	käsittää 「含む、理解する」	3	125
20	osoittaa 「示す」	3	295
21	pysyä 「留まる」	3	111
22	selvittää 「明らかにする」	3	112
23	selvitä 「明らかになる」	3	59
24	tulla 「来る」	3	1675
25	uskoa 「委ねる」	3	166
26	varmistaa 「確かにする」	3	23
27	ymmärtää 「理解する」	3	160
28	aloittaa 「始める」	2	155
29	auttaa 「助ける」	2	143
30	ehtiä 「間に合う」	2	101

表 4 および表 5 を見ると、E 不定詞具格形で、Saukkonen et al. (1979) において 100 回以上現れた動詞は 15 語(50.0%)である。それに対し、A 不定詞変格形で、Saukkonen et al. (1979) において 100 回以上現れた動詞は 24 語(80.0%)である。A 不定詞変格形として現れる動詞の方が、Saukkonen et al. (1979) における頻度が高い動詞が多く含まれていると言える。この傾

向は ilta1996 の全用例においても言えることである。Saukkonen et al. (1979) で 100 回以上現れた動詞を ilta1996 全体で見ると、E 不定詞具格形は 315 語中 65 語(20.6%)、A 不定詞変格形は 127 語中 47 語(37.0%)であった。ilta1996 と Saukkonen et al. (1979) はデータの規模や性質が異なるが、E 不定詞具格形として現れる動詞の頻度が、A 不定詞変格形として現れる動詞の頻度に比べて、通常の動詞頻度に即していないとは言える。つまり、E 不定詞具格形として現れる動詞には、偏りが見られるということがここでも実証できる。

5. おわりに

本節では、本研究での考察結果と、それによって得られた成果および今後の課題について述べる。

4.で考察したように、E 不定詞具格形として現れた動詞には、人間の感情や態度に直接関係した動詞が頻出していた。A 不定詞変格形の場合と比べても、頻度の高さは明らかである。

本稿の成果としては、坂田 (2010) で検証したことを、異なるデータを用いて再検証し、いずれの結論も同じ傾向を示したということにある。つまり、E 不定詞具格形として現れた動詞の意味特徴は、データの特異性によるものではないという証明がある程度できたことになる。

ただし、坂田 (2010) で用いたデータと、本研究で用いたデータは、同じコーパス・デボジトリに収録されたデータであり、新聞記事であるというテキストの性質も共通している。今後は、文学作品あるいは口語資料など、全く異なる性質のデータを用いた検証が必要である。さらに、データの規模を拡大して検証するという課題も存在する。

そして、動詞の意味を客観的にどう判断するかということも、大きな課題である。本稿では厳密な意味の分類基準は特に設けなかったため、「人間の感情や態度に直接関わる動詞」という枠組みが曖昧であった。今後、少しでもその枠組みを明瞭なものにし、動詞の意味を判断する必要がある。

略号一覧

- =形態素境界	GEN=属格	POSS=所有接尾辞
./: =形態素内の意味境界	ILL=入格	PR.PTCP=現在分詞
1, 2, 3=人称	INE=内格	PST=過去
ABL=奪格	INS=具格	PST.PTCP=過去分詞
AINF=A 不定詞	NEG.V=否定動詞	SG=単数
ALL=向格	PAR=分格	TRA=変格
EINF=E 不定詞	PASS=受動形	
ELA=出格	PL=複数	

参考文献

ISK=Hakulinen, Auli, Maria Vilkkuna, Riitta Korhonen, Vesa Koivisto, Tarja Riitta Heinonen, Irja Alho (2004) *Iso suomen kielioppi*. Helsinki: Suomalaisen Kirjallisuuden Seura.

Penttilä, Aarni (1957) *Suomen kielioppi*. Porvoo: WSOY.

坂田晴奈 (2010) 『フィンランド語の不定詞について―使用実態から見る動詞性と従属度―』 東京外国語大学大学院地域文化研究科平成 23 年度博士論文.

Saukkonen, Pauli, Marjatta Haipus, Antero Niemikorpi and Helena Sulkala (1979) *Suomen kielen taajuussanasto*. Porvoo: Werner Söderström.

The semantic features of the verbs as the *E*-infinitive instructive in Finnish

Haruna Sakata

(Tokyo College of Medico-Pharmaco Technology)

Keywords: Finnish, infinitive, corpus, meanings of verb

The purpose of this study is to clarify the semantic features of the verbs which appear as the *E*-infinitive instructive in Finnish. According to Sakata (2010), my doctoral thesis, it was clarified that, among the verbs as the *E*-infinitive instructive, there appear many verbs closely concerned to human emotion and manner. This result is based on the data of corpus. In this study, I verified whether the same result can be seen using the other data. I used the data of the *A*-infinitive translative for comparison to clarify the semantic features of verbs objectively.

2011 年度

修 士 論 文 要 旨

宮城方言における「なら」意味領域
—共時的体系と通時的考察—

内海優

(言語文化専攻 言語・情報学研究コース)

キーワード: 条件表現、「なら」、東北方言、宮城方言、認識のモダリティ

修士論文目次

0. はじめに	7. 通時的変遷の考察
1. 条件表現と「なら」	7.1. ナラ系
1.1. 共通語の条件表現	7.2. ダラ系
1.2. 「なら」条件文の特殊性	7.3. ダバ系
1.3. 「なら」条件文の研究上の問題	7.4. その他の形式 (未然形+バ、カラ、ッカ)
2. 宮城方言における「なら」意味領域	7.5. 東北地方の「なら」対応形式の 通時的変遷
2.1. 宮城方言の概要	8. 宮城方言の体系の成り立ち
2.2. 「なら」対応形式に関する記述	9. おわりに
2.3. 方言文法全国地図	9.1. 結論
2.4. 方言における「なら」意味領域と 宮城方言	9.2. 今後の課題と展望
3. 研究の方向性	参考文献
3.1. 問題設定	巻末付録1 予備調査調査票・回答一覧
3.2. 予備調査	巻末付録2 調査(Ⅰ. 共時的体系)調査票
4. 調査(Ⅰ. 共時的体系)	巻末付録3 方言文法全国地図 関連各図一覧(東北地方抜粋)
4.1. 目的	
4.2. 方法	
4.3. 結果と分析	
5. 共時的体系の考察	
6. 隣接方言における「なら」意味領域 (Ⅱ. 通時的変遷)	※ 下線部は本稿で取り上げる部分。
6.1. 青森方言	
6.2. 秋田方言	
6.3. 岩手方言	
6.4. 山形方言	
6.5. 福島方言	

0. はじめに

宮城方言¹には、共通語で条件表現形式「なら」が担っている意味領域（以下、「なら」意味領域）を表す形式（以下、「なら」対応形式）が複数存在する。修士論文では、それらの共時的な使い分けの体系、及びその体系が通時的にどのように形成されたのかについて調査・考察を行った。本稿は、その内容のうち一部を取り上げたものである。

以下、共通語は平仮名で、方言は片仮名で表記する。

1. 宮城方言における「なら」対応形式

宮城方言の「なら」対応形式について、三井（1998）、佐藤（亨）（1982）、佐藤（忠）（1981）の各先行研究に言及がある。言及のあった形式を地域差とともに次表に整理する。なお、表中の北部・中央部・南部の区切りは便宜的なものである。

表 1: 「なら」対応形式に関する先行研究の整理

	北部	中央部	南部
三井（1998） （調査地点の中新田 は北部に位置する）	ンダラ コッタラ ンダゴッタラ ンダッターラ	—	—
佐藤（亨）（1982）	バ（-eba） ゴッタラ（老）	ンダラ	
佐藤（忠）（1981）	—	ナラ／ダラ／ゴッテ／ゴッタラ	

※「—」は記述なし

全ての先行研究に共通して言及があるのは「ゴッタラ（コッタラ）」である。また、「ンダラ」を「形式名詞＋ダラ」の類のものと考えれば、「ダラ」も各研究に言及されていると言える。ただし、佐藤（亨）が「ゴッタラ」を北部の老年層に用いられる形式としているのに対して、佐藤（忠）が南部の記述において「ゴッタラ」を挙げているなど、分布の地域差や年代差に関してはそれぞれで異なりがみられる。加えて、いずれの先行研究にも各形式間の差異や使い分け等に関する記述はない。

方言における「なら」意味領域については、三井（2009）が次のように述べている。

一つは、「なら」による条件文の特殊性である。5.でも見たように、全国の多くの方言で、共通語の「ば」「たら」「と」「ては」が担う意味領域については、その間で共通の形式が現れることがあるが、「なら」が表す意味領域についてだけは、それらとは違った形式が当てられている。このことは、「未然形＋バ」の意味の偏りという面にも反映している。この点、佐賀方言の「ギー」はその境界を越えた

¹ 東北方言・南奥羽方言に属し、文法と音声・音韻について県内で地域差はほぼない（佐藤（亨）1982）。

広い用法を持っており、きわめて特徴的であった。

(三井 2009: 159)

前述の3つの先行研究を見ると、これは宮城方言にも当てはまるものであると言える。各形式の使い分けは、共通語にはない観点によりなされていることが予想される。

2. 調査（Ⅰ．共時的体系）

先行研究に言及のあった複数の「なら」対応形式が共時的にどのように使い分けられているのかについて、宮城県内の複数地点においてインフォーマントへの面接調査を行った。調査の概要とインフォーマントの情報を以下に示す。

表 2: 調査の概要

日時	2011 年 10 月 25～27 日
方法	適格性判断
調査地点	3 地点 (3 地域で 1 地点ずつ)
インフォーマント	6 名 (各地点 2 名)
調査対象形式	「ダラ」「ゴッテ」「ゴッたら」 「ンダゴッたら」

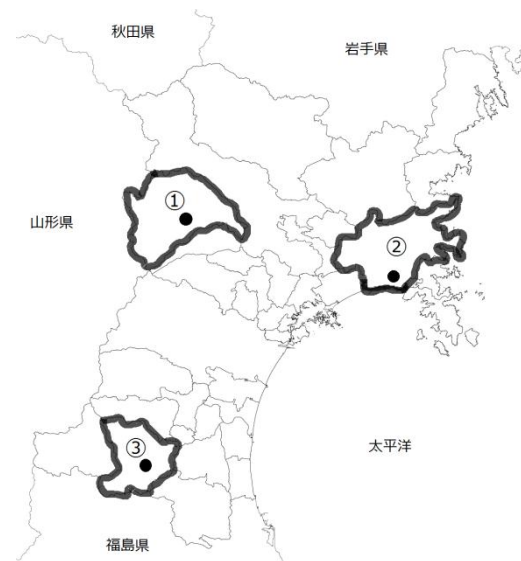


図 1: 調査地点（表 3 に対応）

表 3: インフォーマント情報

地域	調査地点	位置	インフォーマント
県北西部	加美町月崎	①	A : 1948 年生まれ・女性 D : 1939 年生まれ・女性
三陸沿岸部	石巻市穀町	②	B : 1957 年生まれ・女性 E : 1926 年生まれ・女性
県南部	白石市中町	③	C : 1942 年生まれ・女性 F : 1940 年生まれ・女性

2.1. 調査方法

調査は、次に示すような空欄補充と適格性判断を合わせた方法をとった。

●次の文の中で、空白にはどれがしっくり入りますか？

すべての選択肢に、◎・○・△・×をつけてください。

他にしっくりくる言い方がある時は、「その他」に書いてください。

設問例) (自分が今読んでいる本を読みたそうにしている友人に)

、貸すど。

- | | |
|---------|-----|
| ・読むんだら | () |
| ・読むごって | () |
| ・読むごったら | () |
| ・その他 | () |

- ◎：一番しっくりくる
○：自然だけど、一番ではない
△：言えるけど、少し不自然
×：おかしい

上記の通り、調査文は条件形式が接続した従属節述語の部分为空欄にして示した。そこに入る述語のダラ形、ゴッテ形、ゴッタラ形の3形、あるいはゴッタラ形とンダゴッタラ形の2形の適格性を各形について4段階で判断してもらい、各形横の空欄に記号(◎・○・△・×)を記入してもらった。記号はそれぞれ、「◎：一番しっくりくる」「○：自然だけど、一番ではない」「△：言えるけど、少し不自然」「×：おかしい」という評価を表す。提示した形以外に◎に該当する言い方がある場合は、「その他」に記入してもらった。

加えて、各形式は意味領域の重なりがかなりの程度予想されたため、より実態を反映した回答を得るために、複数の形に同一の評価を与える、つまり同一の記号を複数回答しても良いこととした。

なお、共通語の影響(とりわけ「ナラ」の不用意な頻出)を避けるため、調査文及び評価対象の各形は全て宮城方言の形で作成した。

調査文は下記観点より全26文作成した。

- 前件の事態実現の確実性による違い(確実性高い／確実性低い)
- 話題に対する関心度の違い(関心度高い／関心度低い)
- 前件がテーマ／前件が焦点
- 後件のモダリティによる違い
- 「ゴッタラ」と「ンダゴッタラ」の違い
 - ・ 確実性の度合い(前件事態の実現をより仮定的に捉えるか、確定的に捉えるか)
 - ・ 関連づけの有無(何らかの情報を受けて、そこに関連づけるか否か)

3.2. 調査結果・分析(加美A)

修士論文では、インフォーマントごとに調査結果を分析した上で、地点、全体と結果整

理の範囲を広げていった。本稿では、紙幅の都合上、加美 A の調査結果のみを示す。

まず、「ゴッたら」と「ンダゴッたら」に関する調査文を除いた 20 文²について、回答されたそれぞれの評価（◎・○・△・×）が全体に占める割合を、「ダラ」「ゴッて」「ゴッたら」の形式ごとに図 2 に示す。

右図を見ると、「ダラ」は△の割合が高く、◎と○を足した許容の割合は他形式の半分程度となっている。◎は「ゴッたら」が最も多く、次いで「ゴッて」「ダラ」の順に少なくなる。×の回答はいずれの形式でも見られなかった。以下、「ダラ」「ゴッて」「ゴッたら」について結果を分析していく。

「ダラ」「ゴッて」「ゴッたら」について、それぞれで特に少なかった回答（◎・○・△・×）ごとに調査文を整理する。それらの調査文に共通する特徴を見出すことで、例えば少数の◎に共通した特徴はその形式の中心的な意味であろうし、逆に少数の△に共通した特徴は中心的な意味からはかなり離れたものであるとみなすことができると考える。

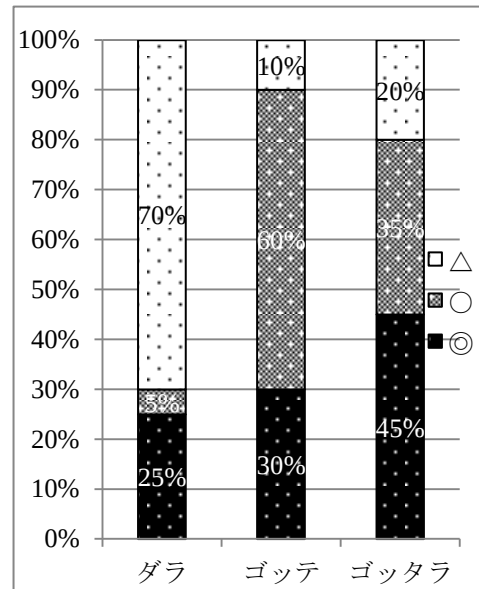


図 2: 全回答に占める各評価の割合
(加美 A)

まず、「ダラ」が◎と回答された調査文と回答を次表にまとめる。

表 4: 「ダラ」の調査文と回答 (加美 A ◎ (25%) : ⑫⑬⑭⑪②)

⑫ (夫が新聞を探している様子) 夫：新聞どこ？ A：新聞なら、こたつの上だよ。
⑬ (友人 A が野菜をくれるという) A：お前に野菜をあげるよ。いつうちに来れる？ B：明日ならいいよ。
⑭ (明日の天気予報は「 <u>晴れの確立 90%</u> 」) 孫：明日の運動会、大丈夫かなあ。 A：大丈夫だ。もし万が一明日雨なら、中止だろうけど。おそらく大丈夫だ。
⑪ (気に入った服があるが、買おうかどうかいつまでも悩んでいる友人に) そんなに好きなら、買ったらいいいじゃない。
② (明日がテストなのにゲームばかりしている孫に) おい！明日テストならゲームなんてするな。

² 「ゴッたら」「ンダゴッたら」の 2 者を扱った調査文は 6 文だが、加美 A に対する調査ではその全てで「ゴッたら」が◎、「ンダゴッたら」が○という回答がなされており、調査文による差異は認められなかった。

		ダラ	ゴッテ	ゴッタラ	その他・備考
加美 A	⑫	◎	○	△	
	⑬	◎	○	△	
	⑭	◎	○	△	
	⑪	◎	○	△	
	②	◎	△	○	

「ダラ」は全体の7割が△の回答だが、上記の調査文は積極的に◎が回答されたものであり、「ダラ」の中心的な意味に近い解釈がなされやすい調査文であると推測される。

これらの「ダラ」は、形態的にはどれも名詞・形容動詞に接続している。ただし、「名詞・形容動詞＋条件形式」の形の調査文は9文あり³、そのうち「ダラ」が◎回答なのは上記の5文でその他の4文では「ゴッテ」「ゴッタラ」が◎となっている。そのため、名詞・形容動詞接続という点が「ダラ」の◎の判断に決定的な影響を及ぼしているとは考えにくい。

各々の調査文を見ていくと、⑫・⑬はそれぞれテーマと焦点として条件形式が機能しているものである。そのほかの4文では⑭が、前件の事態（「雨（が降る）」）の実現性が天気予報の予測や「もし万が一」といった表現によって著しく低いという点で特徴的である。実現性の低さという点でいえば他に⑪も、前件の事態を成り立つと仮定させる根拠が相手の様子（「悩んでいる」）を見ての推測という点では共通しているとも言える。

なお、②以外の全ての調査文で、「ダラ」が◎なのに対して「ゴッタラ」はいずれも△と、対照的な評価がなされている。

続いて、「ゴッテ」のうち◎が回答された調査文と回答を次表に整理する。

表5: 「ゴッテ」の調査文と回答（加美 A ◎（30%）：⑥⑮③④⑧⑮）

⑥（息子 B がどこかに行く様子） A：どこに行くの？ B：郵便局に。 A：郵便局に 行くなら 、切手を買ってきてくれ。
⑮（息子 B がどこかに行く様子） A：どこに行くの？ B：わからない。その辺を散歩だ。 A：郵便局に 行くなら 、切手を買ってきてくれ。
③（鳴子に初めて行くが、いつ行こうか迷っている友人に） 鳴子に 行くなら 、秋に行きなよ。紅葉が綺麗だから。

³ ②「テストなら」、④⑪「好きなら」、⑨⑭「雨なら」、⑫「新聞なら」、⑬「明日なら」、⑰「買い物なら」、⑱「北海道なら」

④（服屋で友人 A と） A：お前、何色が好きなの？ B：茶色かな。 A：茶色が 好きなら 、これにしたらいいじゃない？					
⑧（最近疲れている友人 A） A：最近疲れがとれないんだよ。そんなに忙しくもないのに。 B：じゃ、時間 あるなら 温泉にでも行こうか。					
②③（風邪がもうすぐ治りそうな孫に） 孫：外で遊びたい！ B：明日学校に 行くなら 、今日は外に行ってはだめだ。 我慢してちゃんと寝てろな。					
		ダラ	ゴッテ	ゴッタラ	その他・備考
加美 A	⑥	△	◎	○	
	⑮	△	◎	○	
	③	△	◎	○	
	④	△	◎	○	
	⑧	△	◎	○	
	②③	△	◎	○	

一方、「ゴッテ」が△と回答された調査文は次の2文である。

表 6: 「ゴッテ」の調査文と回答（加美 A △（10%）：②⑮）

②（明日がテストなのにゲームばかりしている孫に） おい！明日 テストなら ゲームなんてするな。					
⑮（嫁がスーパーに行く様子） 買い物なら 、トマトを買ってきてちょうだい。					
		ダラ	ゴッテ	ゴッタラ	その他・備考
加美 A	②	◎	△	○	
	⑮	○	△	◎	

表 5 を見ると、「ゴッテ」が◎と回答された調査文 6 文のうち、③以外が全て対話形式である。③も、調査文は対話にはなっていないものの、「鳴子に行こうと思っているんだけど…」というような友人の発話が話し手の発話に先行してなされていたという状況が、比較的容易に想像できる。

それに対して、②・⑮の状況として対話場面が想定できるかという観点で言えば、いず

れでも想定はしにくい。②については、孫が「明日はテストだ」と口にしながらゲームをするという状況は考えにくい。⑪も、嫁の外的な様子から「買い物（に行く）」という事態を想定しており、嫁の発話はやはり考えにくい。つまりどちらも、先行する相手の発話を想定しにくい文であると言え、こういった場合には「ゴッテ」はなじまないようである。

以上から、「ゴッテ」の積極的な使用には、前件事態の実現性よりも対話相手の発話の存在が深く関与しているようであると言える。

最後に、「ゴッタラ」が△と回答された調査文について整理する。

表 7: 「ゴッタラ」の調査文と回答（加美 A △（20%）：⑫⑬⑪⑭）

⑫（夫が新聞を探している様子） 夫：新聞どこ？ A：新聞なら、こたつの上だよ。					
⑬（友人 A が野菜をくれるという） A：お前に野菜をあげるよ。いつうちに来れる？ B：明日ならいいよ。					
⑪（気に入った服があるが、買おうかどうかいつまでも悩んでいる友人に） そんなに好きなら、買ったらいいいじゃない。					
⑭（明日の天気予報は「 <u>晴れの確立 90%</u> 」） 孫：明日の運動会、大丈夫かなあ。 A：大丈夫だ。もし万が一明日雨なら、中止だろうけど。おそらく大丈夫だ。					
		ダラ	ゴッテ	ゴッタラ	その他・備考
加美 A	⑫	◎	○	△	
	⑬	◎	○	△	
	⑪	◎	○	△	
	⑭	◎	○	△	

「ゴッタラ」は、◎（45%）と○（35%）を合わせて 8 割が許容されている。その中で上記の 4 例は△と回答されたものであり、「ゴッタラ」がよりなじまない文脈と言える。

これらの調査文の特徴として、⑫・⑬は条件形式がそれぞれテーマと焦点の機能として用いられているものである。⑭は前件の事態の実現性が低い文であり、⑪も相手の「悩んでいる」様子から「そんなに好き」という事態を導いているという点で、話し手の前件事態の実現性に対する確信の相対的な低さがうかがえる。

加えて上記の表を見ると、「ゴッタラ」が△とされた文では、対照的に「ダラ」が◎と回答されている。前述の通り「ダラ」は◎の回答が全体の 25%（5 例）しかなく、その内訳は上記の 4 文とそのほかに 1 文（②）のみである。次に示す、前件事態の実現性が明確に異なる調査文⑨と⑭の回答結果を見ると、それはより一層判然とする。

表 8: 調査文と回答（加美 A：⑨⑭）

(明日の天気予報は「⑨ <u>雨の確立 90%</u> ／⑭ <u>晴れの確立 90%</u> 」)					
孫：明日の運動会、大丈夫かなあ。					
⑨A：残念だけど、明日 雨なら 中止だろうな。					
⑭A：大丈夫だ。もし万が一明日 雨なら 、中止だろうけど。おそらく大丈夫だ。					
		ダラ	ゴッテ	ゴッタラ	その他・備考
加美 A	⑨	△	○	◎	
	⑭	◎	○	△	

4. 加美 A の体系

以上から、「なら」対応形式について加美 A は次のような体系を持っていると考える。

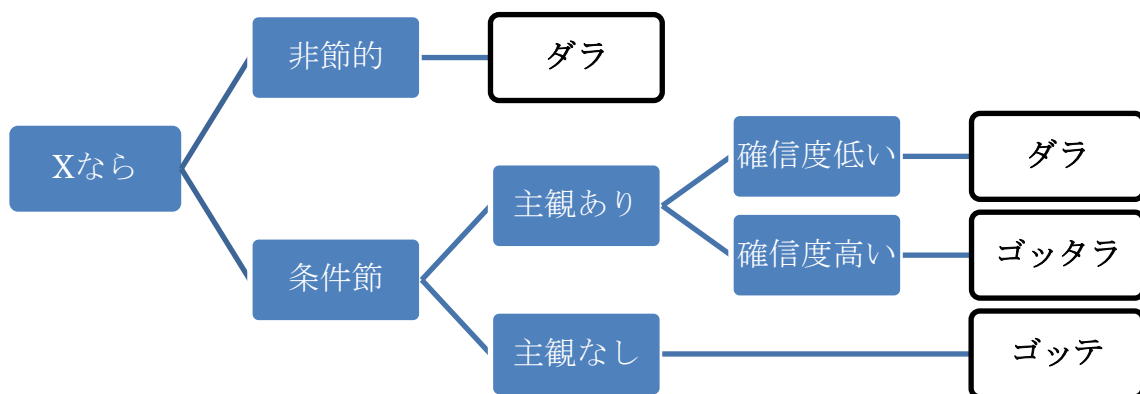


図 3: 「なら」対応形式の体系（加美 A）

「なら」対応形式の選択にあたっては、まず「X なら」の X が非節的か条件節か（分類は高梨 1995 による）によって分かれ、前者であれば「ダラ」が選択される（⑫⑬より）。

後者の場合、前件の事態がどの程度の確率で実現するかについて主観的な判断を加えるか否かによりさらに分類がなされ、主観的な判断を加えず単に受け取った内容について前件で仮定する場合は「ゴッテ」が選択される（⑥⑮③④⑧⑮／②⑰より）。なお、益岡（1993）は共通語の「なら」条件文について「前件が成り立つかどうかの判断自体は保留されている」（益岡 1993: 12）と述べているが、これはまさに「ゴッテ」に当てはまるものである。

判断を加える場合、当該事態の実現について話し手の確信度が低い、つまり「あまり実現はしなさそうだ」という判断であれば「ダラ」が選択される。逆に確信度が高い、つまり「実現がほぼ予想される」という判断であれば「ゴッタラ」が選択される。これは、前件事態「雨（が降る）」の実現性が天気予報により異なる調査文⑨⑭において、「ダラ」と「ゴッタラ」が対称的な回答がなされていること、それに限らず他の調査文でも、「ダラ」

と「ゴッたら」とで回答傾向に対称性が見られることなどが根拠として挙げられる。

ここまで加美 A の「なら」対応形式の使い分けの体系を考察してきたが、前件事態の実現に関して主観を加えるかどうかや、確信度が高いか低いかという観点は、日本語記述文法研究会編（2003）の「事態に対するとらえ方を表すモダリティ」における「認識のモダリティ」的なものであると言える。「事態に対するとらえ方を表すモダリティ」は「命題によって表される事態に対する話し手のとらえ方を表すもの」（日本語記述文法研究会編 2003：5）とされ、その下位分類の一つとして「認識のモダリティ（epistemic modality）」が設定されている。「認識のモダリティ」について日本語記述文法研究会編(2003)は、「情報伝達文の構成にあたって、その文によって示される事柄や情報に対する話し手のさまざまな認識的態度を表し分けるもの」（日本語記述文法研究会編 2003: 133-134）と述べている。

加美 A の形式の使い分けにおける主観の有無、あるいは確信度の高低という観点は、「その文によって示される事柄や情報に対する話し手のさまざまな認識的態度」であると言え、「なら」対応形式の使い分けの体系には、まさに「認識のモダリティ」的要素が深く関与していると考えられる。

5. 今後の課題と展望

全体的に、検討が十分でない点が多々ある。具体的には、まず調査に使用した調査文の多義性である。例えば一言に「友人」と言っても、親しい仲なのか付き合いだけの仲なのかなど、筆者が想定していなかった指摘をインフォーマントから受けることが度々あった。「なら」対応形式の使い分けは非常に心的・認識的な観点からなされていることもあり、調査にあたっては、インフォーマントによって判断の相違がないような発話場面の詳細な状況設定が、他の条件形式の調査以上に必要である。

今後の課題として、東北各県の詳細な現地調査が求められる。方法としても、「なら」意味領域の特殊性から鑑みて、過去の回想になりやすい談話調査や少数の調査文を用いた共通語翻訳式ではなく、多様な場面や文脈においての空欄補充など、話し手の認識的態度をより正確に反映できる方法をとるべきである。加えて、モダリティ研究の手法を取り入れるなど、表層の形のみには依らない調査が求められる。

参考文献

- 佐藤忠雄（1981）『仙臺方言攷 一音韻と語法一』東京：溪聲出版／佐藤亨（1982）「11 宮城県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一編『講座方言学 4 北海道・東北地方の方言』東京：国書刊行会, 333-361／高梨信乃（1995）「非節的な X ナラについて」仁田義雄編『複文の研究（上）』東京：くろしお出版, 167-187／日本語記述文法研究会編（2003）『現代日本語文法 4 第 8 部 モダリティ』東京：くろしお出版／益岡隆志（1993）「日本語の条件表現について」益岡隆志編『日本語の条件表現』東京：くろしお出版, 1-20／三井はるみ（1998）「11. 条件表現」加藤正信・遠藤仁編『宮城県中新田町方言の研究』科学研究費補助金研究成果報告書, 83-95／_____（2009）「条件表現の地理的変異—方言文法の体系と多様性をめぐって—」『日本語科学』25：143-164

ジンポー語ミッチーナ方言の体系的記述

大西秀幸

(言語文化専攻 言語情報学研究コース)

キーワード: 記述言語学、音韻論、形態論、品詞論

<目次> (小項目は省略、網掛けが要旨にまとめた個所)

0. 序章	4. 名詞に関する諸問題
1. 音韻論	5. 動詞に関する諸問題
2. 語と語類	6. その他の範疇
3. 形態論	7. おわりに

0. 序章

0.1. 本稿の概要

本稿ではミャンマー連邦カチン州の州都ミッチーナ市及びその周辺で話されるジンポー語に関して筆者がコンサルタント調査で収集したデータをもとに、その共時的な言語実態を明らかにすることを目的としている。具体的には次の 3 点に着目して記述を進めている。

- ① ミッチーナ方言の音声を正確にとらえ、詳細な分析のもとに音素を確定し、体系的な音韻を確立する。
- ② 語(word)と接辞(affix)の境界を明確にし、語を形態統語に関する基準をもって 4 種の語類に分類する。接辞については、できる限り多くの要素をとりあげ、その機能と意味を可能な限り詳細に記述する。
- ③ いくつかの語が連なる句(phrase)を設定し、句を構成する要素について正確に記述する。

尚、ジンポー語に関しては 0.3.で述べる幾つかの先行研究が文法記述を行っている。本稿にはそれらの記述では不十分な部分を補完するという目的もある。

0.2. ジンポー語の概要

ミャンマー北部はジンポー語の話者数が最も多く、ジンポー語が日常的に話されている地域である。この地域におけるジンポー語の話者人口の正確な数字は不明である。24 万人(澤田 1998)、63 万人(藪 2001)などとされる。系統的には、ジンポー語はチベット・ビルマ諸語に属する言語である。この系統内でのジンポー語の正確な位置づけは、いまだ明らかではないとされる。類型論的には、主節および従属節における基本構成素順は SV、AOV であり、述語は常に節末に置かれる。

基本的に従属部標示型の言語であり、格は名詞句に標示される。ただし、任意ではあるが、主語の人称・数は、節の主要部である動詞複合体に標示されうる。所有構造では、従属部名詞に属格の格助詞が付加される。他動詞節における必須項(core argument)の格標示は、主格－対格型である。

0.3. 先行研究

ジンポー語の文法を最初に記述したものには、Hanson(1896)及びHertz(1911)がある。その後、西田(1960)で約700の基礎語彙をもとに音韻解釈を行い体系的にまとめている。これまでの研究で最も音韻に関して細かな記述を行ったものと筆者は考えている。しかし、特に音節初頭に現れる声門閉鎖音や鼻音については解釈が暫定的なものになっている。最近の大規模な研究としては倉部(2011)が挙げられる。倉部はジンポー語全体の文法記述を行っており、特に統語論・構文論に関してはかなり詳細な記述がある。その一方で音韻論、語レベルの記述に関しては厳密でないと考えられる部分が散見され、西田で問題にしていた音節初頭の声門閉鎖音、鼻音についてはやはり暫定的な解釈しか行っていない。本稿の執筆にあたっては、特にその部分を詳細に記述するように心掛けた。

中国雲南省のジンポー語の文法については、かなり大規模な記述が数多く出版されている。例えば、中国科学院少数民族語言研究所編(1959)『景颇語語法綱要』、刘編(1984)『景颇族語言簡志・景颇語』、戴・徐(1992)『景颇語語法』などがある。特に戴・徐(1992)は現在あるなかで最も包括的な文法書として知られている。

本稿ではこれらの文法記述の枠組みを参考にしながら、先行研究では記述が不十分ではないかと考えられる部分や、筆者が新たに発見したものについて、記述の中で逐次指摘しているつもりである。

0.4. 調査について

本稿は2010年6月から2011年9月まで行った日本での聞き取り調査と、ミッチーナにおいて2011年3月の1か月間行った現地調査で得られたジンポー語文法に関する音声・書記データを1次資料として分析を行ってきた。データは調査票に基づく語彙調査及び文法項目調査によって得られたものと、会話、民話の語りを録音し書き起こした2種が含まれる。

コンサルタントは1964年生まれの男性と1948年生まれの男性である。どちらも言語形成期をミッチーナで過ごしている。

1. 音韻論

1.1. 音節構造

主音節は(1-1)のような構造を持つ。

(1-1) ((C0) C1(C2))V(C3)/T

C0 は前子音、C1 は頭子音、C2 は介子音、V は音節主核である母音、C3 は末子音をそれぞれ表す。/T/ は音節全体に声調(tone)がかかっていることを表す。()は任意の要素であることを表す。つまり母音のみによる音節も存在する。先行研究の解釈との最大の違いは前子音 C0 を解釈する点である。以下に実例を示す。

(1-2) a. V が先頭に立つ場合

V /uLF/ 「鶏、鳥」

VC₃ /anHL/ (2.DU)

b. C₁ が先頭に立つ場合

C₁V /kaLL/ 「書く」

C₁C₂V /kyaLF/ 「柔らかい」

C₁VC₃ /kopLF/ 「隠す」

C₁C₂VC₃ /kyamHL/ 「騙す」

c. C₀ が先頭に立つ場合

C₀C₁V /'nuLF/ 「母親(呼びかけ語)」

C₀C₁VC₃ /'nawLL/ 「妹、年下の女性(呼びかけ語)」

C₀C₁C₂V /Np^hyeHF/ 「背負い型の鞆」

C₀C₁C₂VC₃ /Nk^hyepHL/ 「穀物」

主音節の他に多音節語の初頭にのみ現れる副次音節があり C(V)の構造をなす。次のようなバリエーションが観察できる。

/mə, pə, cə, ɛə, sə, tə, kə, k^hə, lə, ə/

図 1-0-1: 副次音節

1.2. 分節音

主音節構造の各スロットに立ちうる音素は次のように示すことができる。

C ₀	C ₁	C ₂	V	C ₃	T
/ʔ/, /N/	/p/, /p ^h /, /t/, /t ^h /, /k/, /k ^h /	/y/, /r/	/i/, /e/, /a/, /o/, /u/	/p/, /t/, /k/, /ʔ/	LF
	/m/, /n/, /ŋ/		/j/, /ɛ/, /a/, /o/, /u/	/m/, /n/, /ŋ/	LL
	/ts/, /ts ^h /, /c/, /c ^h /			/y/, /w/	HF
	/ɕ/, /r/				HL
	/l/, /y/, /w/, /h/, /f/				

このうち/ts^h/, /c^h/, /h/, /f/は外来語にしか確認できないなど極端に頻度の低い音素である。子音連続には次のようなものがある。/pr, p^hr, kr, k^hr, py, p^hy, ky, k^hy, my, ny[n]/。母音連続は [aě], [oě], [uĩ], [aö]が観察される。これらの音には/y/, /w/を当てはめて音韻的には/ay, oy, uy, aw/と解釈できる。

1.3. 超分節音素

超分節音素として声調が観察できる。障害音を末子音として持つ音節は High と Low の二声調対立 (cf. katHL「市場」, katLF「走る」)それ以外の音節では高平調 (High-level), 中平調 (Mid-level), 低下降調 (Low-falling), 高下降調 (High-falling)の4声調が対立している。

High-level : yoHL「計画する」k^hamHL「捕える」eaHL「食べる」

Mid-level: yoLL「浮かぶ」k^hamLL「健康だ」waLL「男」

Low-falling: yoLF「衰える」k^hamLF「受ける」waLF「帰る」eaLF(限定)

High-falling: yo(確認、同意求め) waHF「父」eaHF「子供」

4つの声調の中で高下降調の割合は極度に低く、現れる環境も親族名称や間投詞といったところに集中する(cf. 'nuHF「母」, əkaHF「うわあ」)。或いは低下降調から形態音韻論のプロセスによっても発生する(cf. tsqmLF「美しい」> [NHL_tsomHF]「美しくない」)。

2. 語と語類

2.1. 語

語は自由形態素である内容語(名詞類)と拘束形態素である機能語に分かれる。接辞は拘束形態素であるが語ではない。語と接辞は次のような基準を持って区別される。

表 2-1: 語と接辞の違い

		主音節が1つ以上含まれる	発音上独立しうる	単独で文の構成素になれる
語	内容語	+	+	+
	機能語 (小辞)	+	+	—
接辞		±	—	—

2.2. 語類

- 語は形態統語的特徴によっていくつかのグループに分けることができる。次のようなグループである。
- 名詞類

名詞(səraLL「先生」、əpatLL「回転」)、代名詞、指示詞、数詞

● 動詞類

動詞(t^hotLF「移る」、mitLFyuLL「考える」)、コピュラ動詞(reLL)、形容詞的動詞(tsqmLF「美しい」)

● 副詞類

副詞(kəcaLLcaLF「本当に」、lawLL「早く」)、オノマトペ(p^hroLFp^hroLF(木の葉が触れ合う音))、接続語(timHF「しかし」)

● 小辞類(具体例については修士論文を参照されたい)

類別小辞、名詞修飾小辞、後置詞、禁止の小辞、助動詞、接続小辞、動詞文標識、連体節標識、名詞節標識、引用節標識、文小辞、とりたての小辞

● 間投詞(koyLF「あらまあ、なんとまあ」、oyHF「はい、うん」)

3. 名詞に関する諸問題

名詞を中心とする名詞句は次のような配列を見せる。

名詞句<(指示詞)+(前部名詞修飾要素)+[(接頭辞)_主要部名詞_(接尾辞)]+(後部名詞修飾要素)+(数量詞句)-(名詞修飾小辞)

図 3-1: 名詞句の構造

3.1. 指示詞

指示詞は空間的な位置や前後の文脈を示す。つまり機能は直示と照応に分けられる。指示詞は近称/ 非近称の対立を持つ tay 系列と遠称で上/ 水平/ 下の対立を持つ ra 系列に分かれる。このジンポー語の指示詞は表 4-1 の通りである。

表 3-1: 指示詞一覧

a. tayLL 系列

近称	NtayLL
非近称	tayLL

b. raHF 系列(遠称)

上	t ^h oHLraHF
水平	woHLraHF
下	leHLraHF

3.2. 人称代名詞

ジンポー語の代名詞は 1、2、3 の 3 つの人称、及び単数、双数、複数の 3 つの数に区分される。

単数で基本形と所有形の区別がある。

表 3-2: 代名詞一覧

	単数		双数	複数
	基本形	所有形		
1 人称	ŋayLL	ŋye'HL	anHL	anHLt ^h eLL
2 人称	naŋLL	na'HL	nanHL	nanHLt ^h eLL
3 人称	ɕiLL	ɕi'HL	ɕanHL	ɕanHLt ^h eLL
再帰	ti'HLnaŋLL			

3.3. 数量詞句

数量詞句は数詞と類別小辞によって構成され、類別小辞-数詞の配列を見せる。数詞は単独で数量詞句を構成できる。

3.3.1. 数詞

ジンポー語の数詞は 10 進法を用いる。1 から 10 までは独自の形式を用い、それ以上の数はそれぞれの形式を並列し、組み合わせることで作られる。

表 3-3: 数詞

0	10 ɕiLL	20 k ^h unLL
ləŋayHF「1」	ɕiLLləŋayHF「11」	k ^h unLLləŋayHF「21」
lək ^h oŋHF「2」	ɕiLLlək ^h oŋH「12」	k ^h unLLlək ^h oŋHF「22」
məsumLL「3」	ɕiLLməsumL「13」	k ^h unLLməsumLL「23」
məliLL「4」	ɕiLLməliLL「14」	k ^h unLLməliLL「24」
məŋaLL「5」	ɕiLLməŋaLL「15」	k ^h unLLməŋaLL「25」
kru'HL「6」	ɕiLLkru'HL「16」	k ^h unLLkru'HL「26」
sənitLF「7」	ɕiLLsənitLF「17」	k ^h unLLsənitLF「27」
mətsatHL「8」	ɕiLLmətsatHL「18」	k ^h unLLmətsatHL「28」
cək ^h uLF「9」	ɕiLLcək ^h uLF「19」	k ^h unLLcək ^h uLF「29」

3.3.2. 類別小辞

類別小辞は類別する名詞の直後に置かれる。現れない場合もある。

(3-1) a. məcaLF mərayLL+məsumLL

人 CLF+三

b. mæaLF mæsumLL

人 三

「三人の人」

4. 動詞に関する諸問題

4.1. 動詞句

動詞を中心とする動詞句の配列は図 5-1 のように示すことができる。(…)は任意の要素である。動詞句における必須要素は動詞と vsm(verb sentence marker: 動詞文標識)である。

[名詞類]+[V(接頭辞)_動詞-(助動詞)-VSM]

図 5-1: 動詞句の構造

任意の動詞句のうち[V...]で囲んだ部分を動詞複合体と呼ぶ。動詞複合体はその前の要素と否定辞を以て切り離されうる。動詞複合体は、最小で動詞+vsm で形成され、動詞複合体にとって必須の要素となる。vsm 以降に現れる要素は動詞複合体には含まれないと考える。動詞連続では動詞スロットに複数の動詞が生起する。すべてのスロットが埋まる例を(5-1)に示す。

(5-1) mitLF+kæt^hetLF-lomLL-ayLL.

心+熱い-[共同]-VSM

「一緒に心配する/心配しあう」

(作例)

4.2. 動詞

動詞は①否定辞 nHL_を付加できる②VSM を後置できる、のいずれかを必ず満たす。ほとんどの動詞は 2 つを満たす。

4.3. 動詞連続

動詞連続は、①統語的要素が介在しない ②主語は動詞間で共有されなければならないという特徴を持つ。複数の動詞が示す事象の意味関係によって 5 つのタイプに分けられる。

● 語彙的な連続

・ 継起関係の動詞連続

(4-1) ŋayLL eiLL-p^he'HL kumHLp^ha'HL saLL yaLL-ayLL.

1.SG 3.SG-ACC 贈り物 行く 与える-vsm

「私は行って彼に贈り物を与えた。」

・ 様態・付帯状況関係の動詞連続

(4-2) ɛiLL kət^heLF tsunLL-ayLL.

3.SG 囁く 言う-VSM

「彼は囁いて言った。」

- ・ 目的関係の動詞連続

(4-3) ɛiLL səkuHF kəɛaLF-p^he'HL tɔmLL saLL-ayLL.

3.SG 羊 子-ACC 探す 行く-VSM

「彼は羊の子どもを 探しに行った。」

- ・ 補文関係の動詞連続

(4-4) ŋayLL ɛəpreLL ɛaHL ra'LF-ayLL.

1.SG 豆 食べる 好む-VSM

「私は豆を食べるのが好きだ。」

- 文法関係の動詞連続

文法関係の動詞連続は文法化した補助動詞との連続である。補助動詞が動詞であるという根拠は否定辞が付加できることにある。

(4-5) ɛiLL kəyetLF NHL_k^hrumHL-ayLL.

3.SG 殴る NEG_PASS-VSM

「殴られなかった。」

4. 4. 動詞文標識

動詞文標識(vsm: verb sentence marker)は動詞文を特徴づける形式であり、動詞複合体の末尾に置かれる。ムード、アスペクト、人称、数、方向の文法範疇による支配を受けさまざまに語形を変化させる。

4. 4. 1. ムードによる対立

VSM はムードによってそれぞれ屈折の共通形式を持つ。

表 4-1: ムードの 6 項対立

VSM	代表形	例
陳述	-ayLL	ɛaHL-ayLL「食べた」
命令	-u'LF	ɛaHL-u'LF「食べろ」
勧誘	-ka'LF	ɛaHL-ka'LF「食べよう」
祈願	-u'LFka'LF	pyqLL-u'LFka'LF「楽しくあれ」

疑問	-NniHF	ɛaHL-NniHF「食べたのか」
----	--------	-------------------

4.4.2. 陳述文におけるアスペクトによる対立

陳述文の vsm は -ayLL/-sayLL が非変化/変化 の2項対立をなす。

- -ayLL: 非変化の形式

1) 状態動詞+-ayLL 現在または過去、2) 動作動詞+-ay: 過去

(4-6) kəcaLL-ayLL

よい-vsm

「良い/良かった」

(4-7) k^hyeŋLL-ayLL

赤い-vsm

「赤い」

(4-8) k^homLL-ayLL

歩く-vsm

「歩いた」

- -sayLL: 変化の形式

開始点であれ終結点であれ、事態・状況が新局面に変化したこと・変化しつつあることを今のこととして述べる場合に用いられる。

(4-9) ko'HLsiLL-sayLL.

空腹だ-vsm

「もう空腹だ」

(4-10) ɛaHL-sayLL.

食べる-vsm

「もう食べ終わった」

(4-11) waLF-sayLL-yoHF.

帰る-vsm-SFP

「もう帰るよ」

略号一覧

└:	接辞境界	CLF:	classifier particle	類別小辞
-:	小辞境界	NEG:	negative	否定辞
+:	同一句内の語境界	PASS:	passive	受け身
1:	聞き手の人称	SFP:	sentence final particle	文小辞
3:	第三者の人称	SG:	singular	単数
ACC: accusative	対格	VSM:	verb sentence marker	動詞文標識

参考文献

日本語で書かれたもの

- 倉部慶太(2011)「ジンポー語文法の概要」京都大学大学院文学研究科修士論文.
- 西田龍雄(1960)「カチン語の研究－バモ方言の記述ならびに比較言語学的考察」『言語研究』38. pp.1-32.
- 澤田英夫(1998)「チベット・ビルマ諸語」新谷忠彦編『黄金の四角地帯－シャン文化圏の歴史・言語・民族』東京：慶友社.
- 藪司郎(2001)「カチン文字」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『世界文字辞典』東京：三省堂. pp. 224-228.

英語で書かれたもの

- Hanson, Ola(1896) *A Grammar of the Kachin Language*. Rangoon: American Baptist Mission Press.
- Hertz, Henry. Felix(1911) *A practical handbook of the Kachin or Chingpaw language*. Rangoon: Superintendent Printing Burma.

中国語で書かれたもの

- 戴庆厦・徐悉艰(1992)『景颇语语法』北京：中央民族学院出版社.
- 刘璐編(1984)『景颇族语言简志・景颇语』北京：民族出版社.
- 中国科学院少数民族语言研究所編(1959)『景颇语语法綱要』北京：科学出版社.

ニヴフ語における時の副動詞 (temporal converbs) について

蔡 熙鏡

(言語文化専攻 言語・情報学研究コース)

キーワード：ニヴフ語、時の副動詞、形態・統語論的な特徴

修士論文の目次

1. はじめに	3.3. Otaina (1978)	5.3. 上位節との意味関係
1.1. ニヴフ民族	3.4. Krejnovich (1979)	6. おわりに
1.2. ニヴフ語の概要	3.5. まとめ	6.1. 結論
1.3. ニヴフ語の表記について	4. 研究方法	6.2. 今後の課題
2. 研究対象	4.1. 調査資料	【謝辞】
2.1. ニヴフ語の副動詞	4.2. 分析方法	【略号一覧】
3. 先行研究	5. 結果及び考察	【調査資料】
3.1. Gruzdeva (1998)	5.1. 非人称標示副動詞	【参考文献】
3.2. Panfilov (1965)	5.2. 人称標示副動詞	【付録】 前接語の種類

* 下線の部分が本稿でまとめた部分である。小節は一部省略した。

1. はじめに

修士論文では、ニヴフ語のアムール方言とサハリン方言のテキスト集の分析をもとに、ニヴフ語における時の副動詞が示す形態・統語論的、意味論的な特徴について考察を行った。本稿では、その中から主に形態・統語論的な特徴に関する部分をまとめることにする。以下では、2 節でニヴフ語の概要を、3 節で先行研究と研究方法を簡潔に述べる。4 節で時の副動詞の形態・統語論的な特徴を示し、5 節で上位節との時間的な意味関係について述べた後、6 節でまとめる。本稿における例文番号、グロス、日本語訳は特に断りのない限り筆者によるものである。

2. ニヴフ語の概要

ニヴフ語は、ロシアのアムール川下流域とサハリン島に住んでいるニヴフ (Nivkh; 民族自称で「人間」という意味) の人々によって話されている言語である。2002 年のロシアの国勢調査によれば、ニヴフ民族の人口は 5,162 人、その中でニヴフ語が話せる人は 512 人であるという。

ニヴフ語は、系統関係の不明な孤立語であり、他の系統関係の不明なシベリアや極東の言語とともに古シベリア諸語 (Paleo-siberian)、または古アジア諸語 (Paleo-asiatic) に分類されることがある。類型論的な特徴としては、SOV の基本語順、修飾部-非修飾部の順序、膠着型の形態論を示すことがあげられる。屈折や派生は接辞の付加によって実現される。

方言は、アムール川下流域とサハリン島の北部・西部で話されているアムール方言と、サハリン島のトゥミ川流域と東部・南部で話されているサハリン方言に大きく分けられる (Panfilov 1962: 1, Krejnovich 1979: 296, Gruzdeva 1998: 7, 丹菊 2008: 1-2)。

母音音素は、すべての方言が /i, e, a, o, u, ə/ の 6 個を持ち、子音音素は 28 個から 33 個までと方言により若干異なる (服部 1988: 1409, Gruzdeva 1998: 10, Shiraishi 2006: 24)。以下の表 1 はニヴフ語におけるすべての子音音素を表したものである。

表 1: ニヴフ語の子音音素

	唇音	歯音	硬口蓋音	軟口蓋音	口蓋垂音	声門音
有気破裂音	p ^h	t ^h	c ^h	k ^h	q ^h	
無声/有声破裂音	p b	t d	c d ^j	k g	q ɢ	
無声摩擦音	f	r ^h	s	x	χ	h
有声摩擦音	v	r	z	ɣ	ʁ	
鼻音	m	n	ɲ	ŋ		
側面音		l				
わたり音	w		j			

ニヴフ語の動詞¹ は、以下に示すような構造を持つ。

(1) (Mattissen 2003: 16)

undergoer_prefix-root-(aspectoid/degree)-(causative)-(aspectoid/degree/temporal)-

(scalar_operator)-(modality)-mood/scalar_operator/focus/converb_suffix

受動者 - 語根 - (アスペクトイド²/程度) - (使役) - (アスペクトイド/程度/テンポラル)
- (焦点小辞³) - (モダリティー) - ムード/焦点小辞/焦点/副動詞接尾辞

Mattissen (2008) は、ニヴフ語の副動詞を人称表示、主語の制御、埋め込み (副動詞節の移動) の諸側面とその機能によって、i) 典型的な副動詞 (converb proper)、ii) 行為者標示副動詞、iii) 列挙 (enumerative) の 3 つの種類に分類している。

まず、典型的な副動詞は、行為者の人称は標示せず、主節との意味関係によってさまざまな接尾辞で現れる。副動詞節は主節とは異なる主語を持つことができる。また、副動詞節は主節の前にくることもあれば、主節の中に入ることもある。次に、行為者標示副動詞は以下の表 2 に示す接尾辞の一つをとる。

表 2: 行為者標示副動詞の接尾辞

	アムール方言	サハリン方言
一般的副動詞 (general converb)	-r / -t	-n / -r / -t
先行副動詞 (anterior converb)	-ror / -tot	-non / -ror / -tot

表 2 における /r/ を含む形式は行為者が 2・3 人称単数、/t/ を含む形式は行為者が 1 人称単数と全人称複数であることを表す。サハリン方言における /n/ を含む形式は主節動詞

¹ ニヴフ語の形容詞は、未来の接辞をとらないという点以外は、動詞と同じ形態論を示す (服部 1988: 1413)。つまり、ニヴフ語の動詞は性質動詞と非性質動詞に分けることができ、形容詞の語類を別に立てる必要はない。

² Mattissen (2003: 16) は、ニヴフ語に完了/未完了というアスペクトの対立はないとしている。アスペクトイド (aspectoid) の用語は、文法化の過程にある完了的、継続的、習慣的といったカテゴリーのために用いている。

³ 焦点小辞は ‘scalar operator’ の筆者による訳である。Mattissen (2003: 11) は「これらの接尾辞は König (1991) のいう ‘focus particles’ のカテゴリーに当てはまるが、ここではニヴフ語の焦点接尾辞との混乱を防ぐためにこの用語を用いる」と述べている。

が未来、または命令の標識を持つのであれば用いられる。以下に例を示す。

(2) EAST SAKHALIN DIALECT (Otaina 1978: 102)

- a. *ɲi cʰo-xu-tot pʰ-vo-rox vi-dʲ.*
 1SG fish-kill-CVB.1SG REFL-village-DAT go-IND
 ‘魚をとってから村に帰った’
- b. *ɲi cʰo-xu-non pʰ-vo-rox vi-j-dʲ.*
 1SG fish-kill-CVB.1SG REFL-village-DAT go-FUT-IND
 ‘魚をとってから村に帰るだろう’

最後に、列挙は等位節の連鎖に用いられ、表 2 の一般的副動詞のような方法で行為者を標示する。

(3) (Panfilov 1965: 66) 文脈: 老人が罠にかかったキツネを発見して。

- cir-kir za-rʰ iy-ra rʰo-r vi-ra,*
 wood-INS hit-CVB.3SG kill-ENU.3S carry-CVB.3SG go-ENU.3SG
inar səu-ra seu-ra verax-tox imy-ra (ha-dʲ.)
 pelt take.off-ENU.3SG dry-ENU.3SG slave-DAT give-ENU.3SG (be.so-IND)
 ‘木の棒でたたき殺して、運んで行って、皮をはがし乾かして、使用人にあげたりした’

3. 先行研究と研究方法

Panfilov (1965) と Otaina (1978) は、副動詞に関して、主節動詞と副動詞節が異主語を持ち得るか、どのような接辞をとるのか、主節動詞とどのような意味関係を持つかに重点を置いて分析を行っている。両方とも主にアムール方言を対象としているが、Otaina (1978) の場合は、性質動詞に限定して記述を行っている。Gruzdeva (1998: 50) は、時を表す副動詞接辞をアムール方言と東サハリン方言に分けてあげている。先行研究で扱っている主な形式の意味機能を以下の表 3 にまとめておく。

表 3: 先行研究における時の副動詞の意味機能 (アムール方言 (A)、東サハリン方言 (ES))

副動詞接辞	Gruzdeva (1998)	Panfilov (1965)	Otaina (1978)
- <i>ɲa(n)</i>	先行 (A) 先行・同時 (ES)	先行	同時
- <i>ba ~ -pa</i>	先行 (A) 先行・同時 (ES)	先行・同時	先行
- <i>ke</i>	先行 (A) 同時 (ES)	先行・同時	同時 (過去)
- <i>fke</i>	先行 (A) 先行・同時 (ES)	先行・同時	先行 (過去)
- <i>ge</i>	先行・同時 (A) 同時 (ES)	—	先行
- <i>data(r) / -data(t)</i>	同時	同時	同時
- <i>durɲu(r) / -durɲu(t)</i>	同時 (A)	同時	同時
- <i>ivo</i>	同時	同時	同時
- <i>ənke ~ -anke</i>	後行	—	—
- <i>ror / -tot / -non</i>	先行	先行	先行

本稿では、先行研究であげられている形式をテキスト集から収集し、分析を行った。動詞を分類する際には、Otaina (1978) に従い、性質動詞と非性質動詞に分類した。調査には、アムール方言のテキスト集である Shiraishi (2002、2003、2004、2007、2008、2009)、Puxta (2002) とサハリン方言のテキスト集である丹菊・パクリナ (2008) の計 8 冊を用いた。調査資料から得られた用例を次の表 4 に示す。

表 4: 資料から得られた時の副動詞

副動詞接辞	Shiraishi (2002 他)・Puxta (2002) アムール方言	丹菊・パクリナ (2008) サハリン方言
<i>-ŋan(A)/-ŋa~-ŋə(S)</i>	539	134
<i>-tot/-ror/-non</i>	191	53
<i>-ba ~ -pa</i>	173	23
<i>-ke</i>	97	0
<i>-ge</i>	33	0
<i>-fke</i>	1	20
<i>-data</i>	1	25
<i>-kra</i>	0	5
<i>-vuye</i>	0	2
合計	1035	262

次節では、先行研究を踏まえて、主に次の 2 点について述べることにする。まず、Panfilov (1965) によれば、*-ke* は名詞に付いて副詞を形成することがあると述べていたが、他の形式の場合はどうだろうか。次に、表 3 に見るように、時の副動詞接辞の意味機能に関する記述に差がみられるが、それはなぜかという点である。

4. 時の副動詞の形態・統語論的な特徴

4.1. *-ŋan*

-ŋan は、時の副動詞の中で一番多く用いられている。性質動詞、非性質動詞に接尾されている例が確認できる。さらに、名詞や疑問代名詞に付いている例が見られる。

(4) (Shiraishi 2009: 15)

a. *pila-nivy-ŋan*

adult-human-CVB

‘大人の人になった時’

(Shiraishi 2002: 10)

b. *nivy-mu-ŋan*

human-become-CVB

‘(熊から) 人間になった時’

(5) (Puxta 2002: 49)

jago-ŋan

ox̣t-als

q̣^hau-ra

ha-di-ra.

what-CVB

medicinal-berry

call-ENU.3SG

do.so-IND-HILI

‘時には薬用イチゴともいう’

(4a) は、名詞の後に *-ŋan* が直接後接されている例である ((4b) と比較)。それ以外にも、*parf* 「夕方」に後接している例が 1 例、*park* 「一人」に後接している例が 2 例で、計 4 例が

名詞に後接している。疑問代名詞 *jayo-*「どの」に後接されていたのは 2 例であった。これらの例は *-ŋan* の統語的な資格を論じる上で極めて重要であると思われる。Savel'eva, V. i C. Taksami (1970) には、次のような例がある。

(6) (S/T 1970: 494)

cʰəŋ jayo-bityə-gu uru-dʰ-ŋa?
 2PL what-book-PL read-IND-Q
 ‘あなたたちはどのような本を読みましたか?’

上記の例を見ると分かるように、疑問代名詞 *jayo-*「どの」は、名詞 *bityə*「本」を限定する役割を果たしている。この事実から疑問代名詞の限定を受ける *-ŋan* は名詞の特徴を一部持っていると考えられる。しかしながら、単独で用いられている例が見られないことや格接辞が付かないなど、その名詞としての地位は不完全であると思われる。サハリン方言の場合は、上記のような例は見られず、性質動詞、非性質動詞に接尾されて現れる。

Panfilov (1965: 140) は、副動詞にテンスは標示されないと述べているのに対し、Mattissen (2008: 96) は、テンスも副動詞に標示されうると述べており、両者の記述は異なっている。本稿の調査では、(7) に見るように、アムール方言からテンスが標示されている例が確認され、Mattissen (2008: 96) の記述を支持する結果となった。

(7) (Shiraishi 2002: 8)

ni cʰxəf mu-t va-nə-ŋan,
 1SG bear change-CVB.1SG fight-FUT-CVB
 ‘私がクマに変身して戦うとき’

4.2. *-ba ~ -pa*

接尾されている動詞の種類を見ると、アムール方言で得られた *tʰaŋs-*「すばやい」の一例を除き、すべて非性質動詞である。さらに、単独で副詞の役割を果たしている例が見られる。

(8) (丹菊・パクリナ 2008: 9)

qan-girʰ tʰas-toχ pa vi-jnə-d-lu.
 dog-INS somewhere-DAT soon go-INT-IND-Q
 ‘犬ぞりでどこへすぐ行こうとしたのか’

(8) のような例は、サハリン方言でのみ確認された。さらに、サハリン方言では、(9a,b) に見るように、他の副動詞接辞の後に続く例が見られる。アムール方言では、*-ŋan* と同じくテンスが標示される例が現れている (例 (9c))。

- (9) a. (丹菊・パクリナ 2008: 32) b. (丹菊・パクリナ 2008: 12)

p^hɔ̃-data-pa

come-CVB-CVB

‘来るとすぐに’

ha-ŋa-pa

do.so-CVB-CVB

‘するとすぐに’

- c. (Shiraishi 2009: 25)

hurtiv-t nana c^haj ra-na-ba himi jama-pa,

sit-CVB.1SG just tea drink-FUT-CVB upward look-CVB

‘座って、ちょうどお茶を飲もうとしていたとき、上の方を見ると’

4.3. -ke

-ke の形式は、アムール方言でのみ用いられており、性質動詞、非性質動詞に接尾されて現れる。以下にそれぞれの例を示す。

- (10) a. (Shiraishi 2008: 48)

ni mackii-ke idə-c.

1SG little-CVB see-IND

‘私は小さい時に見た’

- b. (Shiraishi 2009: 34)

vi-ke c^hɨɬ ərɕ p^hur-ra.

go-CVB bear already go.out-ENU.3SG

‘行ったときには、熊はもういなかった’

Panfilov (1965: 143) は、-ke が名詞と結合して副詞を形成することがあることを指摘していたが、今回の調査ではそのような例は見られなかった。

4.4. -fke

-fke は、ほとんどサハリン方言で見出された。アムール方言では *ha-*「そうである」の語幹に付いて現れた 1 例のみ確認できた。以下の (11) は、指示代名詞に後接している例である。

- (11) (丹菊・パクリナ 2008: 38)

i rulku-r^h tu-fke ətətə taf malɕo-bra.

river pass-CVB.3SG this-CVB INTJ house many-CVB

‘川を通って行くと、その時おやおや家がたくさんあった’

ニヴフ語の指示代名詞は対象指示語根と名詞化接辞 (アムール方言では -d/、サハリン方言では -d / -nd / -nt) によって形成され、代名詞的なふるまいをみせる。この形式には数と格 (例 (12a)) が標示されることがあり、名詞化接辞なしに用いられた場合は、連体修飾の機能 (例 (12b)) を果たす (Gruzdeva 1998: 27, Mattissen 2003: 14)。

(12) (Gruzdeva 1998: 27)

a. <i>tə-di-yir</i>	b. <i>ni</i>	<i>tə-urk</i>	<i>vi-nə-di-ra.</i>
this-NMLZ-INS	1SG	this-night	go-FUT-IND-HILI
‘これで’		‘私は今夜行くのだ’	

つまり、(11) の *-fke* は、指示代名詞の連体修飾を受けており、名詞の統語的な特徴を持っているということが分かる。しかしながら、*-fke* も *-ŋan* と同じく、単独で現れることはない。また、*-fke* が接尾されている動詞はすべて非性質動詞で、動詞語幹に直接つながっている。

4.5. *-ge*

-ge は、アムール方言でのみ現れている。用例を見ると *hoŋ-ge* 「こうして」が 31 例、*ha-ge* 「そして」と *hoqejr^hum-ge* 「こうして」が、それぞれ 1 例ずつ現れている。すべての例が接続詞として用いられている。

(13) (Shiraishi 2003: 9)

<i>hoŋ-ge,</i>	<i>par^hk</i>	<i>p^heyzdox</i>	<i>q^hola-di-yu</i>
so-CVB	oneself	thus	become.rich-IND-PL
‘こうして、彼ら自身はお金持ちになった’			

すべての例が接続詞として用いられていることから考えると、*-ge* の生産性はもはや失われている可能性がある。

4.6. *-data*

-data は、1 例を除き、サハリン方言で用いられている。性質動詞、非性質動詞、指示代名詞⁴ に接尾されて現れている。以下に指示代名詞に後接されている例を示す。

(14) (丹菊・パクリナ 2008: 44)

<i>nan-data</i>	<i>hun-k^hutə-roχ</i>	<i>p^hr^hə-t,</i>
that-CVB	that-hole-DAT	come-CVB.1SG
‘その間、あの穴まで来て’		

Krejnovich (1979: 320) は、*-data* について、アムール方言では副動詞を形成することはないとしているが、今回の調査で 1 例ではあったが、副動詞として用いられている例が見られる。

⁴ 高橋 (1942: 39) に、*nan-d* 「その」の形式がある。

(15) (Shiraishi 2008: 56)

imɣu mor^hqa-tata imɣu p^hr^hə-t imɣu ye-t.
 3PL live-CVB 3PL come-CVB.3PL 3PL take-CVB.3PL
 ‘彼らが住んでいる時に、彼らが来て連れて行った’

さらに、Panfilov (1965: 145) は「-*datar* / -*datat* は、無声閉鎖音で終わる動詞語幹の後では -*tatar* / -*tatat* になる」と述べているが、(15) に見るようにその規則も守られていない。

4.7. -*bra* / -*vuye*

-*bra* と -*vuye* は、両方ともサハリン方言でのみ見られ、すべての例は性質動詞と非性質動詞の語幹に直接つながっている。

-*bra* は、以下に示すように等位節の連鎖に用いられることがあり、Mattissen (2008) のいう列挙の形式に類似している (例 (3) を参照)。

(16) (丹菊・パクリナ 2008: 13)

p^hroksk əjk kə-bra əjk ciɣ-bra.
 suddenly INTJ rain-CVB INTJ thunder-CVB
 ‘突然、ああ！雨が降って、ああ！雷が鳴って’

4.8. -*tot* / -*ror*

-*tot* / -*ror* は、すべて非性質動詞に用いられている。1 例ではあったが、以下に示すように -*tot* / -*ror* の後に一般的副動詞接辞 (表 2 を参照) が続く例が見られる。

(17) (Shiraishi 2003: 12)

imɣu ŋəc-x tov-ror-r^h imɣu-ax pəj-r vi-ku-r^h.
 3PL leg-LOC tie-CVB.3SG-CVB.3SG 3PL-CAUSEE fly.away-3SG go-CAUS-CVB.3SG
 ‘(おばあさんは) 小鳥たちの足に (リボンを) つけてから、飛ばしてあげた’

(17) は、先行副動詞と一般的副動詞が連続している例であるが、両方とも行為者の人称を標示する接辞であるという点で、ニヴフ語においては極めて特殊である。

5. 上位節との時間的な意味関係

表 3 に示してあるように、一部の形式において、副動詞節と上位節との時間的な意味関係に関する記述に違いが見られる。ここでは、-*ŋan* の形式をとりあげて、何故このような差が見られるのかについて考察を行う。

本稿の調査では、-*ŋan* が性質動詞に後接している場合は、すべて同時の意味に解釈される。これは Otaina (1978) の記述に一致する。一方、非性質動詞に後接する場合は、以下の例に示すように上位節に先行する出来事 (例 (18a))、同時に起こる出来事 (例 (18b))、両方を表すことができる。

(18) a. (丹菊・パクリナ 2008: 43)

ɲi qar-ŋa pʰrʰə-d-yun.

1SG stop-CVB come-IND-PL

‘私が止まった時に彼らがやって来た’

b. (丹菊・パクリナ 2008: 44)

cʰamŋ lu-ŋa ɲi kuz-t,

shaman sing-CVB 1SG go.out-CVB.1SG

‘シャーマンが歌うときに、私は外へ出た’

上記の例がそれぞれ先行と同時に解釈される理由は、動詞が持つ語彙的なアスペクトの違いからくるものと筆者は考える。(18a) の *qar-*「止まる」は、瞬間的な動作を表している一方、(18b) の *lu-*「歌う」はある程度続く動作を表している。上位節の動詞を見てみると、*pʰrʰə-*「来る」と *kuz-*「出る」で両方とも瞬間的な動作を表している。⁵

このように *-ŋan* の解釈は、接尾されている動詞の意味に依存しているといえることができる。

6. まとめ

Otaina (1978) は、本稿で調査対象としたすべての副動詞接辞は、性質動詞と非性質動詞の両方に用いることができると述べている。しかし、結果を見ると、*-fke* と *-tot / -ror* は、すべて非性質動詞に接尾されていて、*-ba ~ -pa* の場合は、1 例を除いて非性質動詞とともに用いられている。

Panfilov (1965: 143) は、*-ke* が名詞と結合して副詞を形成することがあると指摘している。本稿の調査では、*-ŋan* が名詞、疑問代名詞に後接している例、*-fke* と *-data* が指示代名詞に後接している例が確認された。さらに、*-ba ~ -pa* の場合は、単独で用いられて副詞のようにふるまう例も見られる。この事実は、これらの形式を副動詞接辞として扱ってきた従来の研究では説明することが難しいと思われる。この問題に関しては、今後さらなる調査と研究を重ねていく必要がある。

⁵ 金田一 (1993[1976]: 11) は、「来る」「行く」「入る」「出る」「上る」「下る」などの動詞について、運動の途中をも表し得るし、到着の瞬間をも表し得るとし、前者を継続動詞、後者を瞬間動詞と呼んでいる。

略号一覧

1	first person	1 人称	IND	indicative	直説法
2	second person	2 人称	INS	instrumental	具格
3	third person	3 人称	INT	intentional	意図
CAUS	causative	使役	INTJ	interjection	間投詞
CAUSEE	causee	被使役者	LOC	locative	所格
CVB	converb	副動詞	NMLZ	nominalizer	名詞化
DAT	dative	与格	PL	plural	複数
ENU	enumerative	列举	Q	question particle	疑問小詞
FUT	future	未来	REFL	reflexive	再帰
HILI	highlighting focus	強調の焦点	SG	singular	単数

参考文献

- 金田一春彦 (1993[1976]) 『日本語動詞のアスペクト』 東京: むぎ書房.
- 丹菊逸治 (2008) 『アジア・アフリカ基礎語彙集 51 ニヴフ語サハリン方言基礎語彙集 (ノグリキ周辺地域)』 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 服部健 (1988) 「ギリヤーク語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 『三省堂言語学大辞典』 1, pp. 1408-1414. 東京: 三省堂.
- Gruzdeva, E. (1998) *Nivkh*. München: Lincom Europa.
- Krejnovich, E. (1979) *Nivkhskii iazyk* [The Nivkh language]. *Iaziki azii i afriki* 3, pp. 295-329. Moscow: Nauka.
- Mattissen, J. (2003) *Dependent-Head Synthesis in Nivkh: A Contribution to A Typology of Polysynthesis*. Amsterdam: John Benjamins.
- _____ (2008) Converbs in Nivkh. In Karen H. Ebert, Johanna Mattissen, Rafael Suter, *From Siberia to Ethiopia : converbs from a cross-linguistic perspective* Zürich : Universität Zürich.
- Otaina, G. (1978) *Kachestvennye glagoly v nivhskom iazyke* [Nivkh verbs denoting quality and property]. Moscow: Nauka.
- Panfilov, V. (1962) *Grammatika nivhskogo iazyka* [Nivkh grammar] 1. Moscow and Leningrad: Nauka.
- _____ (1965) *Grammatika nivhskogo iazyka* [Nivkh grammar] 2. Moscow and Leningrad: Nauka.
- Savel'eva, V. and C. Taksami. (1970) *Nivhsko-russkii slovar'* [Nivkh-Russian dictionary]. Moscow: Sovetskaia enciklopediia.
- Shiraishi, H. (2006) *Topics in Nivkh Phonology*. Ph.D. thesis, Groningen: University of Groningen.

2011 年度

卒 業 論 文 要 旨

ナポリ方言語彙使用の世代差

板久 梓織

(日本課程 日本語専攻)

キーワード: イタリア語、ナポリ方言、語彙、世代差

0. はじめに

卒業論文では、イタリア南部におけるナポリ地域の話者にアンケート調査とインフォーマント調査を行い、イタリア語¹ ナポリ方言² 語彙の使用頻度及びその変化と要因について述べた。本発表では卒業論文の一部であるアンケート調査の結果に基づき、ナポリ方言語彙使用の世代差について考察する。対象とする語彙は原則として辞書の見出し語にあるものに限る(1.2 節で後述)。

なお、特に断りがない限り、本文中の日本語訳、例文番号、太字、斜体、囲み字は発表者によるものであり、斜体はナポリ方言を表す。

1. 先行研究

本発表では紙面の都合上、本研究に最も関係の深い長神(1988)と Jaberg and Jud (1987a, 1987b)を取り上げる。長神(1988)はイタリア語とイタリア語諸方言について記述しており、Jaberg and Jud (1987a, 1987b)は 1924 年頃のナポリ方言に関して記述している研究として注目に値する。

1.1. 長神(1988)

網羅的にイタリア語について記述している長神(1988)はイタリア語を標準イタリア語と地域イタリア語に分けている。標準イタリア語、地域イタリア語、イタリア語諸方言に関する記述を以下に要約する。

¹ ロマンズ諸語の 1 つ。話者数約 6200 万人。他のロマンズ諸語同様、起源は古代ローマ人が用いたラテン語。標準イタリア語はトスカナ地方の方言、その中でもフィレンツェ方言を基盤にして形成されたものである。母音音素 7 個、子音音素 21 個、半母音音素 2 個(長神 1988: 591-598 を要約)。本発表での表記は正書法に倣う。本発表では標準イタリア語はナポリ方言と区別するため、標準イタリア語と呼ぶ。

² ナポリ方言は中・南部イタリア方言群、南部イタリア諸方言、カンパニア方言に属している(長神 1988: 592 を参考)。1976 年現在話者数は 704 万人で、ナポリ方言は標準イタリア語とは大きく異なる (Grimes ed. 1984: 320 を参考)。呼称をナポリ語とするかナポリ方言とするかは定められていないが、本発表ではナポリ方言で統一する。本発表でいうナポリ方言とはイタリア共和国カンパニア州ナポリ県の県庁所在地ナポリの方言を指す。なお、ナポリ方言の正書法はいまだ確立されていない。本発表のナポリ方言の表記は Iandolo (1994: 61)に倣い、母音 6 字(a, e, i, j, o, u)と子音 16 字(b, c, d, f, g, h, l, m, n, p, qu, r, s, t, v, z)の計 22 字を使用する。ただし引用においては原書のままにしておく。

標準イタリア語 : トスカナ地方の方言を基盤に形成されたもの。

地域イタリア語 : 標準イタリア語が話し言葉として用いられる際に特に音声面において地域ごとに異なった特徴が加わったもの。

イタリア語諸方言: その土地土地で話されていたラテン語が変化し、形成されたもの。

(長神 1988: 592 を要約)

この分類に従うと、ナポリ方言はイタリア語諸方言に当てはまる。長神(1988)はこれらの分類について、具体例を取り上げておらず、地域イタリア語についてもこれ以上は言及していない。そこでこれらの分類に関する具体例を、ナポリ方言文法書である Iandolo (1994: 251)とナポリ方言辞書の Aspromonte (2002)から取り上げて以下に示す。以降、特に断りがない限り、本発表での地域イタリア語とは、ナポリに標準語が入ってきた際ナポリの地域の特色を受けて変化したものを指すこととする。

表 1: ナポリ方言と地域イタリア語、標準イタリア語の違いを示す例

ナポリ方言	地域イタリア語	標準イタリア語	日本語訳
<i>stasciòna</i>	Stazzione	stazione	駅
<i>affiurarse, fiurarse, penzà', smacenà'</i>	immagginare	immaginare	想像する

(Aspromonte 2002 と Iandolo 1994: 251 より発表者が作成)

表 1 を見ると、まず、地域イタリア語と標準イタリア語の場合は、音の面で違いが見られる。次に、ナポリ方言と標準イタリア語の違いに注目すると、「駅」に相当する語彙の場合は音において違いが見られる一方、「想像する」という意味にはそれぞれ異なる語彙を用いることがわかる。

1.2. Jaberg and Jud (1987a, 1987b)

Jaberg and Jud (1987a, b)は 1924 年に方言調査を行い、それを地図にまとめたもので、いわゆるイタリア言語地図を提示している。方言調査の範囲はイタリア全土と南スイスの一部を含めた計 1,000 地点である。Jaberg and Jud (1987a, b)は 2 部で構成されているが、この内、第 1 部の Jaberg and Jud (1987a)は調査全般について述べている。第 2 部の Jaberg and Jud (1987b)では編者である Sanga によって方言と標準イタリア語の違いが目立つという理由で選ばれた 54 項目の方言地図が挙げられている。Jaberg and Jud (1987a, b)の書名は *AIS Atlante Linguistico ed etnografico dell'Italia e della Svizzera meridionale* である。以下 Jaberg and Jud (1987a, 1987b)の両方をさす場合を AIS、Jaberg and Jud (1987a) (第 1 部)を指す場合を AIS I、Jaberg and Jud (1987b) (第 2 部)を AIS II と呼ぶこととする。

なお地図上の表記はラテン・アルファベットではなく、イタリア言語学での音声記号を用いているが、本発表においてはラテン・アルファベット表記に直して提示する。これに関してはインフォーマント A(男性、1987 年生まれ)とインフォーマント B(女性、1988 年生

まれ)の確認を受けた。インフォーマントは両者共に 2011-2012 年現在学生で、言語形成期をナポリで過ごした。AIS II で挙げられている 54 項目の中で 7 項目がナポリ(地点 721)では空白であり、記述がみられるのは 47 個である。さらに、47 項目のすべてが辞書(Aspromonte 2002)の見出し語にあるわけではなく、そこにはさらに動詞が変化したもの(屈折)、名詞の複数形なども含まれている。以下に 47 項目の内訳を示す。

表 2: 47 項目の形式による分類 (標準イタリア語の項目名を示す)

名詞、形容詞、動詞の辞書形	<i>grembiule</i> (エプロン), <i>siepe</i> (生け垣), など	33
文あるいは句であるもの	<i>ho la febbre</i> (私は熱がある), <i>nell' acqua calda</i> (温水の中で) など	10
屈折した形式	<i>vogliono</i> (<i>volere</i> の三人称複数) <i>è piovuto</i> (<i>piovere</i> の過去形), <i>cascò</i> (<i>cadere</i> の過去形)	3
名詞の複数形	<i>due donne</i> (二人の女性)	1
合計		47

上の表 2 で太線の囲み部分で斜体の字である、辞書の見出し語 33 項目をアンケート調査の項目として取り上げる。

1. 3. 先行研究のまとめと問題点

先行研究を検討すると、標準イタリア語と地域イタリア語、そしてナポリ方言の区別が明らかではない。特に地域イタリア語について長神(1988)と Iandolo (1994) が全く同じものを指すかどうかは疑わしい。

ナポリ方言語彙使用については、AIS II のナポリ方言の調査は 1924 年に行われたものであり古い資料である。そのため、例えば「鑄掛けの行商人」といったように現在よく使うとはいえない語も見られることに問題がある。AIS II で挙げられている方言語彙が今も使われているのか、現在ナポリ方言はどの程度使用されているのかについて論じている研究は管見の限り見当たらない。

2. アンケート調査

2. 1. 調査方法

・調査対象の方言語彙について

アンケートの項目は、AIS の、辞書の見出し語である 33 語を基盤に使用する。AIS には基本的に定冠詞または不定冠詞がついている。辞書である Aspromonte (2002)の見出しには定冠詞や不定冠詞は併せて載せられていないので、アンケートでは定冠詞または不定冠詞は取り除いた。この 33 語をそれぞれナポリ方言辞書の Aspromonte (2002)で引き、違う語で記載されていればそれも対象項目に入れる。AIS II でナポリ地点に記述があったものを全て総数に数える。例えば「白」は *bianco*, *bianca*, *bianchi* (辞書の見出し語である *bianco*、それから変化した *bianca*, *bianchi*) の 3 語が AIS の項目では扱われているが、地点 721 では *bianco* に対応する語しかみられない。辞書の見出し語でも *bianco* しかないので、この場合 *bianco*

のみを扱うこととする。一方例えば「若者」は *ragazzo*(男性単数), *ragazza* (女性単数)の2語それぞれ地点 721 では記述があった。「若者」のように地点 721 で記述があった語とそれが変化したものはそれぞれ1つと数え、総数は44語とした。上述のようにこれと対応していた *Aspromonte* (2002)の語彙は複数ある場合もあった。AISの語彙と一致する場合もあれば、さらに一致しない語がいくつも得られた場合もあった。以下に例を示す。

表 3: AIS II と *Aspromonte* (2002)で異なる語が出た項目

	AIS II	<i>Aspromonte</i> (2002)
教父 (padrino)	<i>cumbare</i>	<i>cumpare, parrìno, patrìo, sangiuvanne</i>
言語 (lingua)	<i>lèngua</i>	<i>lèngua, assalanà'</i>

これら全てを重ねりのないよう集積したものを調査の対象語彙とした。その総数は114語である。これら114語は後述の表6に全て載せてある。

・質問の形式と点数化、インフォーマントについて

質問の形式と点数化は佐藤(1986)を参考にした。佐藤(1986)は山形県村山方言語彙使用の世代調査を行い、どのような方言語彙が残りやすく、また壊れやすいのかについて述べている。形式はまず AIS の、辞書の見出しにある語33語をイタリア語の単語で挙げ、AIS II と *Aspromonte* (2002)からそれに当たるナポリ方言の単語と、イタリア語、その他(どの語も使用しない場合インフォーマントが使用する語を記入してもらう)の使用度合をそれぞれに5段階 A~E に分けてもらう。そしてそれを使用語彙(A. いつも使っている、B. たまに使う、C. 昔は使ったが、今は使わない)として2点、理解語彙(D. 聞いたことはあるが、使ったことはない)として1点、意味不明語彙(E. 聞いたことも使ったこともない)として-2点を与えて数値化した。

インフォーマントはいずれも言語形成期をナポリで過ごした生え抜きである。若年層、壮年層は共に10名ずつで合計20名(10名×2世代)である。本調査では、地域差が出ないようにインフォーマントは全員ナポリ市の中心部に属する歴史地区に居住の方をお願いした。本発表では以降、ナポリ方言は歴史地区周辺を指すこととする。若年層は皆20代で、差は20歳~26歳である。男女ともに5名である。壮年層は差が48歳~63歳である。男性4名、女性が6名である。

若年層と壮年層がそれぞれ10名ずつで、使用語彙に2点、理解語彙に1点、意味不明語彙に-2点を与えた。全員が使用語彙としていれば1世代それぞれ満点20点、全員が意味不明語彙とすれば-20点である。アンケートの中には、無回答のものもみられたので、結果を均一に見るためにパーセンテージに換算した(小数点第二位は四捨五入)。

2.2. アンケート調査の前の意識調査

1.3節でも述べたとおり、ナポリ方言と地域イタリア語間にはっきりとした区別はないようである。そのため、ナポリ方言話者がナポリ方言と地域イタリア語に対する認識を持ち、

またそれが共通したものであるのかをまず調査する。2.1 節で調査対象とした語彙を、インフォーマント C(男性、1990 年生まれ)、D(女性、1985 年生まれ)の 2 名にナポリ方言か地域イタリア語か区別してもらった。両者共に 2011-2012 年現在学生で、言語形成期をナポリで過ごした。以下に両名が地域イタリア語だと答えたものを示す。ここに挙げていない語は全てインフォーマントがナポリ方言とみなしたものである。

表 4: インフォーマント 2 名が地域イタリア語と判断した語

インフォーマント C	piede (<i>péde</i> , <i>pedezullo</i>) 足 (単数) / cieco (<i>cecato</i>) 見えない、無分別な / macellaio (<i>ammazzapiécure</i> , <i>scannapiécure</i>) 肉屋 / rospo (<i>'rana</i>) ヒキガエル / porco (<i>fétente</i>) 豚 (単数) / bianco (<i>iàngo</i>) 白
インフォーマント J	testa (capo) (<i>capa</i>) 頭 / lingua (<i>assalanà</i>) 言語 / strega (<i>fattucchiara</i>) 魔女

以上のように、インフォーマント 2 名が共通して地域イタリア語と認識する語はなく、双方で地域イタリア語に対する認識が異なることがわかる。本発表では両者の区別をせず、上記で挙げた語も含めて全てナポリ方言語彙として扱うこととする。また、調査中にインフォーマント 2 名が共通して標準イタリア語と認識している語があることがわかった。それは「若者」を意味する *fanciullo* (*ragazzo*, 男性単数)と「黒」を意味する *scuro* (*nero*, 男性単数)である。イタリア語の辞書である郡(2005)で確認したところ、見出し語として郡(2005)に記載されていることを確認した。標準イタリア語である可能性が非常に高いが、ナポリ方言の辞書である Aspromonte (2002)にも記載があったため、本発表では調査語彙に入れておく。

3. 調査結果

調査語彙 114 語の使用率の世代差の結果を述べる。やはり壮年層の方が若年層よりも使用率が高い語が多かったものの、壮年層の方が若年層よりも低い語もみられた。以下に結果とその内訳を表で示す。パーセンテージは小数点第 1 位で四捨五入したものである。

表 5: 使用率の世代差の結果

世代差	語数	割合
壮年層の方が若年層よりも使用率が高い語	56	49%
壮年層の方が若年層よりも使用率が低い語	32	28%
壮年層と若年層の使用率が同じ語	26	23%
計	114	100%

表 6: ナポリ方言語彙使用の世代差の内訳

壮年層の方が若年層よりも使用率が高い語 (56 語)	壮年層の方が若年層よりも使用率が低い語 (32 語)	壮年層と若年層の使用率が同じ語 (26 語)
padrino (<i>cumpare, sangiuvanne</i>) 教父 / ragazza (<i>tetèlla, zancòlla, zetèlla, perzechèlla, quattranèlla</i>) 若者 (女) / testa (<i>capo</i>) (<i>capa, mmùmmèra, chiòcca, còccia, lampiòne</i>) 頭 / lingua (<i>lèngua</i>) 言語 / piede (<i>pedezzullo, perezullo, pedecóne</i>) 足 (単数) / piedi (<i>piere</i>) 足 (複数) / calderaio (<i>ambulante</i>) (<i>caouararara, stanatiella, rammàro</i>) 鋤掛けの行人 / fabbro (<i>ferraro</i>) 鍛冶屋、鉄工 / falegname (<i>màstorasce</i>) 家具職人 / macellaio (<i>ammazzapiécure, scannapiécure</i>) 肉屋 / uno (<i>une, 'nu</i>) 1 / due (<i>ri</i>) 2 / gennaio (<i>gennare</i>) 一月 / venerdì (<i>vièrnari</i>) 金曜日 / pipistrello (<i>trapestèllo</i>) コウモリ / rospo (<i>granavuóttulo</i>) ヒキガエル / lucciola (<i>luce-luce</i>) ホタル / farfalla (<i>palómma, palummèlla</i>) チョウ / buono (<i>buone, 'e còre, lélla-palélla, sanfasò</i>) よい (男性単数) / buona (<i>bona</i>) よい (女性単数) / buono (<i>buone</i>) よい (男性複数) / strega (<i>fattucchiara, ianara</i>) 魔女 / accendere (<i>appiccià, abbambà, allummà</i>) 火をつける、点灯する / ape (<i>vèspere</i>) ミツバチ / fiore (<i>accupatura</i>) 花 (単数) / fiori (<i>scúre</i>) 花 (複数) / bianco (<i>iangò</i>) 白 / prato (<i>prate</i>) 牧草地 (単数) / prati (<i>prate</i>) 牧草地 (複数) / lavorare (<i>faticà</i>) 働く (原型) / lavora (<i>fatic</i>) 働く (三人称単数) / siepe (<i>sèpa</i>) 生け垣 / nero (<i>nire</i>) 黒 (単数) / neri (<i>nire</i>) 黒 (男性複数)	padrino (<i>cumbare</i>) 教父 / ragazzo (<i>guaglione</i>) 若者 (男) / culla (<i>cònnola, cònnula</i>) ゆりかご、幼年期 / testa (<i>capo</i>) (<i>capazzèlla</i>) 頭 / labbro (<i>musso</i>) 唇 / piede (<i>pède, pedagna</i>) 足 (単数) / piedi (<i>pède, catapède</i>) 足 (複数) / cieco (<i>'ncatarattato</i>) 見えない、無分別な / fabbro (<i>chiuvaruólo</i>) 鍛冶屋、鉄工 / macellaio (<i>canjiero</i>) 肉屋 / arcobaleno (<i>àrcobbaleno</i>) 虹 / rospo (<i>'rana, ritroso</i>) ヒキガエル / farfalla (<i>papaglióne</i>) チョウ / strega (<i>strega, arrobapiccerille</i>) 魔女 / porco (<i>puórcò, chiavecòne, fétente, schifenzuso, schifuso, zuzzuso</i>) 豚 (単数) / porci (<i>puórcò</i>) 豚 (複数) / bianco (<i>ianco</i>) 白 / grembiule (<i>màndesino, antecunnale</i>) エプロン / nero (<i>annegrecato, scuro</i>) 黒 (男性単数) / nera (<i>nere</i>) 黒 (女性単数)	padrino (<i>parrìno, patrio</i>) 教父 / ragazzo (<i>fanciullo</i>) 若者 (男) / ragazza (<i>guaglióna</i>) 若者 (女) / culla (<i>naca</i>) ゆりかご、幼年期 / testa (<i>capo</i>) (<i>cataròzzula</i>) 頭 / lingua (<i>assalanà</i>) 言語 / piede (<i>pére</i>) 足 (単数) / cieco (<i>cecato</i>) 見えない、無分別な / fabbro (<i>chiuvarulo</i>) 鍛冶屋、鉄工 / macellaio (<i>bucciéro, chianchiére, vuccèra, vucciére</i>) 肉屋 / pipistrello (<i>spurtiglióne</i>) コウモリ / lucciola (<i>lucelalucele, asciacatascia, catacatascia, culelùceta</i>) ホタル / epilessia (<i>gliòcce</i>) 癲癇 / ape (<i>cacchióne</i>) ミツバチ / fiore (<i>scióre</i>) 花 (単数) / grembiule (<i>mantesino, panùnzio, senale, sinale</i>) エプロン

上の世代差の分類それぞれに特に共通する特徴はないようである。本発表では紙面の都合上、上の表 5 と表 6 の斜体部分の、「壮年層の方が若年層よりも使用率が低い語」について考察する。

4. 考察

壮年層の方が若年層よりも使用率が低い語が現れた要因については、以下の 3 点が考えられる。

- ① 標準イタリア語の侵入により、より標準イタリア語に形に近い語(または地域イタリア語)がもともとのナポリ方言語彙に置き換わった場合(標準語化)
- ② そのナポリ方言語彙が新方言である場合(①の場合を除いたもの)
- ③ そのナポリ方言語彙の復興によるものである場合

②は新方言と断定するのは早計であるため、本発表では②に関しては言及せず①と③のみを取り上げる。

① 標準イタリア語の侵入により、より標準イタリア語に形に近い語 (または地域イタリア語) がもともとのナポリ方言語彙に置き換わった場合(標準語化)

これは、2.2 節で行った地域イタリア語に関する意識調査で、インフォーマント 2 名が地域イタリア語と認識している語、2 語がこれに対応すると考える。また 2.2 節で挙げた標準イタリア語の可能性が非常に高い語は 1 語がこれに対応すると考える。更に 32 語の内、地域イタリア語であると判断される語が 3 語ある。その内訳を以下に示す。

表 7: 地域イタリア語、または標準イタリア語と考えられる語の内訳

意識調査により地域イタリア語と考えられる語	piede (<i>pède</i>) 足 (単数) rospo (<i>'rana</i>) ヒキガエル	2 語
標準イタリア語と考えられる語	nero (<i>scuro</i>) 黒 (男性単数)	1 語
発表者により地域イタリア語と考えられる語	labbro (<i>musso</i>) 唇 arcobaleno (<i>àrcobbaleno</i>) 虹 bianco (<i>ianco</i>) 白	3 語

まず、「黒(男性単数)」を意味する *scuro* (標準イタリア語は *nero*)は、2.2 節の意識調査に基づくと、標準イタリア語である可能性が高い語である。ところが、若年層と壮年層の使用率がそれぞれ 90%と 0%で、著しい差が見られることが注目される。このことから考えると、*scuro* (標準イタリア語は *nero*)は比較的新しくナポリ地域に入ってきた語彙である可能性が高いと思われる。

次に、「虹」の *àrcobbaleno* (標準イタリア語は *arcobaleno*)と「白」の *ianco* (標準イタリア語は *bianco*)は、音の違いが見られることから、地域イタリア語である可能性が高いと看做し得る。「唇」の *musso* に関しては、AIS I に挙げられた標準イタリア語の *labbro* と形が違う。郡(2005)で確認したところ、標準イタリア語で「動物の鼻孔部、人間の顔」を意味する *muso* があり、この 2 語の音の違いが見られることから、地域イタリア語であると推測する。

「唇」を意味する *labbro* (*musso*)と「虹」を意味する *arcobaleno* (*àrcobbaleno*)を囲み線で示した理由については次の段落で述べる。

③ そのナポリ方言語彙の復興によるものである場合

ナポリ方言語彙の復興による語には、AIS で記載がある語、もしくは AIS と Aspromonte (2002)両方に記載がある語が該当すると考えられる。これに対応する語は前者は 9 語、後者は 2 語である。AIS の語は 1924 年の方言調査で得られた語で、古くからあるナポリ方言語彙である。そのため、通常であれば壮年層の方が高い、もしくは 2 世代は同じ使用率を示すと考えられる。ところがアンケート調査の結果、若年層の方が高い使用率を示す語もみられた。その要因としては該当する語が 1924 年の時点で存在したが、壮年層では廃れ、若年層で復興した語である可能性が挙げられる。上の 2 パターンに該当する語を次の表に示す。

表 8: ナポリ方言語彙の復興によると看做される語

AIS で記載がある語	padrino (<i>cumbare</i>) 教父 / ragazzo (<i>guaglione</i>) 若者 (男) / culla (<i>cònnola</i>) ゆりかご、幼年期 / macellaio (<i>canjiere</i>) 肉屋 / arcobaleno (<i>àrcobbaleno</i>) 虹 / strega (<i>strecà</i>) 魔女 / porci (<i>puórco</i>) 豚 (複数) / grembiule (<i>màndesino</i>) エプロン / nera (<i>nere</i>) 黒 (女性単数)	9 語
AIS と Aspromonte (2002) 両方に記載がある語	labbro (<i>musso</i>) 唇 / porco (<i>puórco</i>) 豚 (単数) /	2 語

囲み線の 2 語は①と③の両方に当てはまる語である。この 2 語に関しては、地域イタリア語が 1924 年の時にすでに使われていた語であり、①に属する他の語よりも前にナポリ地域に入ってきた語であると考えられる。

5. まとめと今後の課題

アンケート調査の結果、ナポリ方言語彙は全体的に壮年層において使用率の高い語が多かったが、若年層の方の使用率の高い語も 28%見られた。本発表では、若年層の方の使用率が壮年層を上回る語彙を提示するとともにその要因について考察を行った。標準イタリア語の可能性が高い語でも世代差が現れる語が 1 語ではあるがあることがわかった。今回の調査では調査語彙を語種や品詞別に分けた際、数に偏りが見られ、また語数自体が少なかった。今後、語彙数を増やし、語種、品詞によって語彙の使用率とその世代差の特徴があるかどうかについて調べることが必要である。そして同じナポリ方言でも、標準イタリア語と似ている語彙があるかどうか、標準イタリア語からの由来の可能性、さらにはラテン語または他の語からの由来の可能性も考慮して今後より詳細な分類をしていきたい。

参考文献

- (日文によるもの) 郡史郎・池田廉編(2005)『ポケットプログレッシブ伊和・和伊辞典』(初版) 東京: 小学館／佐藤和之(1986)「山形県村山方言語彙の崩壊と残存(2): 上山市檜下地区の一家族四世代調査より」『弘前大学文経論叢人文科学篇』6, 45-63／長神悟(1988)「イタリア語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典(第 1 巻世界言語編 上)』591-612, 東京: 三省堂
- (伊文によるもの) Aspromonte, Luigi (2002) *VOCABOLARIO NAPOLETANO-ITALIANO, ITALIANO-NAPOLETANO*. Napoli: LIDIAL ITALIA／Iandolo, Carlo (1994) 'A lingua 'e Pulecenella. *Grammatica Napoletana*. Napoli: Franco Di Mauro Editore／Jaberg, Karl and Jakob Jud (1987a) *AIS Atlante Linguistico ed etnografico dell'Italia e della Svizzera meridionale. Volume 1* (1st edition) edizione In Sanga, Glauco, ed., Milano: UNICOPLI／_____(1987b) *AIS Atlante Linguistico ed etnografico dell'Italia e della Svizzera meridionale. Volume 2* (1st edition) edizione In Glauco Sanga, ed., Milano: UNICOPLI
- (英文によるもの) Grimes, Barbara F. ed. (1984) *Language of the World ETHNOGUE*. (10th Reprinted Edition), 320, Texas: Wycliffe Bible Translators Dallas

ドイツ語の純粋与格と日本語の対応表現について

鈴木 真衣

(欧米第一課程 ドイツ語専攻)

キーワード: 日独対照、ドイツ語の純粋与格、日本語の助詞、日本語の補助動詞構文

0. はじめに

0.1. 研究対象と目的

成田・中村(2004: 117)によれば、ドイツ語には主格(～が)、属格(～の)、与格(～に)、対格(～を)という4つの格がある。名詞の格は主に冠詞類や形容詞の語尾によって示され、代名詞の格は代名詞自身の語形変化によって示される。属格、与格、対格は、前置詞に支配されるものと前置詞に支配されないものに分けられる。本稿では成田(2009)に従って、前置詞に支配される格を前置詞格、前置詞に支配されない格を純粋格と呼ぶ。

片岡(1998: 25)によれば、ドイツ語の純粋与格は一般に、動詞や形容詞などに支配される「目的語の与格」と、任意でわれる「自由な与格」に区分される。「自由な与格」は伝統文法で、さらに「所有の与格」「利益／損害の与格」「関心の与格」の3つのタイプに区分されてきた。しかし片岡(1998)は、ドイツ語の純粋与格の分類については、研究者の間で見解が一致しておらず、文法書の記述にも混乱が見られると述べている。そこで本稿では、伝統的な分類方法は一部参考にするに留め、純粋与格全般を調査対象とする。

本稿の目的は、ドイツ語の純粋与格と日本語の対応表現を対照し、ドイツ語の純粋与格と日本語表現がどのように対応する傾向にあるのか明らかにすることである。なお、本稿で扱う例文の例文番号、グロス、太字、下線、囲み線は、特に断りのない限り筆者による。

0.2. 本研究を理解する上で必要な日本語の文法知識

ここでは、日本語記述文法研究会編(2009)を取り上げ、本稿の調査で得られた日本語の形式について、予め説明が必要な文法事項をまとめる。

0.2.1. 日本語の格の用法・連体修飾の用法

日本語における「格」とは、名詞と述語とのあいだに成り立つ意味関係を表す文法的手段である。名詞の格は格助詞「が」「を」「に」「へ」「で」「から」「より」「まで」「と」によって表される。格助詞と、格助詞が表す意味関係の対応は、表1のようにまとめられている。なお、格助詞は表1のおもな意味のほか、出頻度の少ない、限界、領域、目的、様態、役割、割合、対応・不对応、内容といった意味を表すものもあるが、本稿では「その他」でまとめ、詳しい意味の考察には立ち入らない。

さらに日本語記述文法研究会編(2009)は、名詞が名詞を修飾する際に、修飾名詞と被修飾名詞の間に介在する「の」を、連体助詞として挙げている(例: 「私の家」「食品の製造」)。本稿ではこの連体助詞「の」の用法を「連体修飾」として取り扱う。

表 1: 格助詞と用法の対応

格助詞	用法	例文
が	主体	子どもたちが <u>か</u> 公園で遊ぶ。
	対象	恩師の死 <u>が</u> 悲しい。
を	対象	ハンマーで氷 <u>を</u> 砕いた。
	起点	昨日は8時に家 <u>を</u> 出た。
	経過域	川 <u>を</u> 泳いで渡った。
	着点	子どもが学校 <u>に</u> 行く。
に	相手	隣の人 <u>に</u> 話しかける。
	場所	机の上 <u>に</u> 本がある。
	起因・根拠	職員の横柄な態度 <u>に</u> 腹を立てる。
	主体	この子 <u>に</u> 専門書が読めるはずがない。
	対象	親 <u>に</u> さからう。
	手段	全身が泥 <u>に</u> まみれる。
	時	午前中 <u>に</u> 用事を済ませた。
	着点	船が港 <u>へ</u> 向かう。
で	場所	庭 <u>で</u> 犬が吠えている。
	手段	ナイフ <u>で</u> チーズを切る。
	起因・根拠	急用 <u>で</u> 家へ帰った。
	主体	私と佐藤 <u>で</u> その問題に取り組んだ。
から	起点	子どもたちが教室 <u>から</u> 出てきた。
	主体	私 <u>から</u> 集合時間を連絡しておきます。
	起因・根拠	たばこの火の不始末 <u>から</u> 火事になった。
	経過域	虫は窓 <u>から</u> 出て行った。
	手段	国会は衆議院と参議院 <u>から</u> 成り立っている。
より	起点	遠方 <u>より</u> 友来たる。
まで	着点	子どもが学校 <u>まで</u> 自転車を通う。
と	相手	弟 <u>と</u> けんかをする。
	着点	氷が溶けて水 <u>と</u> なる。

(日本語記述文法研究会編 2009: 5-6 を一部改変)

0.2.2. 恩恵的事態表示に関係する補助動詞構文

補助動詞は、動詞のテ形につき、さまざまな意味を添える働きをする動詞である。ここでは、本稿の調査で多く得られた、恩恵的事態表示に関係する補助動詞構文を作る「てあげる」「てくれる」「てもらう」について述べる。「てあげる」「てくれる」「てもらう」は、恩恵のやりとりを表す。その際、話し手を中心とした序列という使い分けの意識が働き、内から外に、話し手→聞き手→第三者という序列で置く。この序列上の二者間の移動は、内から外への遠心的方向性と、外から内への求心的方向性のいずれかとしてとらえられる。

「てあげる」は遠心的方向性をもつ恩恵や、第三者間の恩恵の移動を表す。動作者は恩恵の与え手となる((1)a.)。また、「てあげる」は内から外への遠心的方向性をもつ恩恵を表すため、受益者として話し手がくることはない((1)b.)。「てくれる」は求心的方向性をもつ恩恵を表す。動作者は恩恵の与え手となる(2)。「てもらう」は求心的方向性をもつ恩恵や、第三者間の恩恵の移動を表す(3)。

(1) a. 田中が鈴木のために引っ越しを手伝ってあげた。b. *君が僕に英語を教えてあげたんだ。(2) 娘が私のために料理を作ってくれた。(3) 妹が父に自転車を買ってもらった。

【日本語記述文法研究会編 2009: 127-128】

1. 先行研究

1.1. 藤縄(2005)

藤縄(2005)は、「多くの教科書や学習文法書で、ドイツ語と日本語の格はおおよそ、主格＝「が」、属格＝「の」、与格＝「に」、対格＝「を」に対応すると説明されているが、その経験的妥当性はこれまで十分に検討されてきたとは言い難い」と述べている。そこで、そのような検討の基盤となりうるデータを提供するために、ドイツ語の「基礎動詞 1300」のうち与格または対格の補足語を取る動詞 700 語余りを Duden の用法辞典¹ からリストアップし、約 2,500 件について、ドイツ語の与格と対格が日本語のどの格助詞に対応するのか調査を行っている。

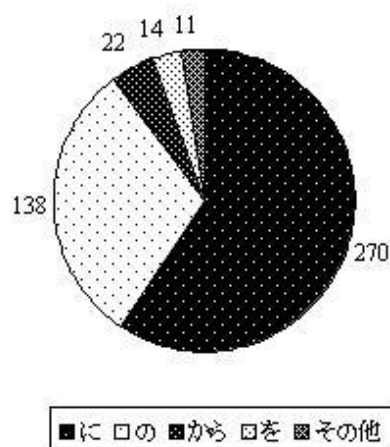


図 1: 純粹与格に対応する日本語の格
(藤縄 2005: 108 をもとに筆者が作成)

調査結果をまとめた図を右に挙げ、本稿の調査では得られなかった、格助詞「から」の用例を挙げる。なお、格の対応は、基本的に既存の独和辞典数冊の訳を参照して決めたものであるが、藤縄の語感が優先されている部分もある。

(4) Mir ist der Knopf abgerissen.

I.1SG.DAT be.3SG.PRS the.NOM button.SG tear.PSTP

私(の服)から ボタンが外れてしまった。

【藤縄 2005: 93】

1.2. 先行研究のまとめ

ドイツ語の与格に関する先行研究で、片岡(1998)のように純粹与格の分類に触れているものは数多いが、目的語の与格と自由な与格は区別されており、純粹与格全体を対象とする研究は少ない。藤縄(2005)はドイツ語の純粹与格と日本語の助詞を対照し、対応のパターンと用例を示しているが、調査対象は独和辞典等であり、実際の使用に即しているとは言い難い。また、用例の提供が目的であり、用例の詳しい分析は行っていない。そこで本稿では、これらを参考に、先行研究で調査されていない部分に注目して調査を行った。

2. 調査

2.1. 概要

本調査では、成田(2009)で純粹与格の頻度が高いとされていた小説を対象に与格を収集した。調査には、ホフマンの短編小説『砂男』(E.T.A Hoffmann 1817, *Der Sandmann*)、ケス

¹ 藤縄(2005)では、「基礎動詞 1300」と Duden について、それぞれ、在間進・岡田公夫・清野智昭編(1990: 9)「語研資料 10」『東京外国語大学語学研究所 ドイツ語の統語論的意味的研究資料—データベースを用いた試み—』と Duden(1988): *Stilwörterbuch der deutschen Sprache. Die Verwendung der Wörter im Satz*, Mannheim Dudenverlag を参照しているが、筆者はこれらの文献を確認していない。

トナーの小説『飛ぶ教室』(Erich Kästner 1933, *Das fliegende Klassenzimmer*)を用いた。なお、卒業論文では、宮沢賢治の『注文の多い料理店』のドイツ語訳(Johanna Fischer 1994, *Das Gasthaus mit den vielen Aufträgen*)、時雨沢恵一の『キノの旅』のドイツ語訳(Jens Ossa 2006, *Kinos Reise*)に関しても調査を行ったが、紙幅の関係上本稿では省略する。『砂男』『飛ぶ教室』『キノの旅』は、『注文の多い料理店』の総語数に合わせて冒頭から約 2,300 語ずつ切り取り、それぞれ手作業で全ての与格を収集し、Microsoft Excel を用いて集計した。前置詞与格を含む全与格の集計結果は、紙幅の関係上省略する。調査にコーパスを使用しなかった理由については、成田(2009)の記述を以下に要約する。

ドイツ語の名詞の格は冠詞の語尾などで示されると説明されているが、例えば定冠詞 *der* だと、男性主格(*der Mann*)、女性属格(*der Frau*)、女性与格(*der Frau*)、複数属格(*der Männer*)という 4 通りの可能性があるなど、冠詞類の語形から格を特定できるわけではない。また、名詞に冠詞類が付かない場合も多い。したがって、文字列検索によってドイツ語のテキストから与格名詞句を抽出することは不可能である。

(成田 2009: 94-95 を要約)

収集した用例は日本語の対訳と対照し、日本語訳を表 1 でまとめた用法に当てはめ、ドイツ語の純粹与格が日本語の格助詞・連体助詞の用法とどの程度対応しているのかを確認した。『砂男』『飛ぶ教室』については、翻訳者によるばらつきの有無を確認するため、それぞれ 2 冊の訳本² を用いて調査を行った。

また、日本語記述文法研究会編(2009)によれば、名詞が主題となる場合、「弟とは」のように格助詞に「は」がつくことがある。「が」や「を」のような文法格をとる名詞は、主題化の際「がは」や「をは」のような形をとることができず、「は」だけで表す。本稿の調査では、主語を主題化した「は」を格助詞「が」、目的語を主題化した「は」を格助詞「を」としてカウントした。なお、主題の「は」については、今回は調査対象としていない。

2.2. 調査結果

全体の調査結果を表 2 にまとめる。

表 2: ドイツ語純粹与格の日本語格助詞におけるわれ方 (ドイツ語から日本語への翻訳)

格助詞	用法	『砂男』①	『砂男』②	『飛ぶ教室』①	『飛ぶ教室』②	合計
が	主体	2	3	1	1	7
を	対象	1	2	3	1	7
に	相手	5	1	3	2	19
	主体	4	0	0	0	
	場所	2	2	0	0	
と	相手	1	1	0	0	2
の	連体修飾	9	3	3	3	18
その他		21	33	24	27	105
合計		45	45	34	34	158

² 『砂男』は種村(1991)を①、池内(1984)を②と表し、『飛ぶ教室』は、山口(2003)を①、高橋(1962)を②と表す。

3. 考察

3.1. ドイツ語の純粋与格が日本語の格助詞・連体助詞と対応する用例についての考察

全体的には、(5)のように、格助詞「に」で日本語訳されている用例や、(6)のように、連体助詞「の」による連体修飾の用法で日本語訳されている用例が多く、格助詞「に」と「の」が多いという藤縄(2005)の結果を裏付けるものとなった。藤縄(2005)では挙げられていなかった格助詞は、「が」の用例が7例、「と」の用例が『砂男』①②で各1例ずつ確認できた。藤縄(2005)で22例見られた格助詞「から」の用例は、本調査では確認できなかった。

格助詞「に」相手の用法

- (5) Oft gab er uns Bilderbücher in die Hände
often give.3SG.PST he.3SG.NOM we.1PL.DAT picture book.PL in the.ACC hand.PL

① ぼくたちには絵本を与え

② ときおりぼくたちに絵本をもたせたきりで 【砂男 [ド]: 372 [①]: 796 [②]: 150³】

連体助詞「の」による連体修飾の用法

- (6) Die fliegen ihm auf die Hand
it.3PL.NOM fly.3PL.PRS he.3SG.DAT on the.ACC hand.SG

① しじゅうからは、彼の手の上に飛んできて、

② シジューカラは彼の手の上に飛んでき、 【飛ぶ教室 [ド]: 17 [①]: 21 [②]: 22】

格助詞「が」主体の用法

- (7) wo er mir sichtbar werden mußte.
where he.3SG.NOM I.1SG.DAT visible become.INF must.3SG.PST

① こちらが相手の姿の見えるはずの場所

② 姿が見えるところ 【砂男 [ド]: 375 [①]: 798 [②]: 153】

用法に注目すると、ドイツ語の純粋与格が日本語の格助詞・連体助詞と対応する場合は、用法が「主体」「対象」「相手」「連体修飾」に偏っていると分かる。日本語で「連体修飾」の用法に翻訳されるドイツ語の純粋与格は、片岡(1998)の「所有の与格」と解釈できるものが多いと考えられる。この他に、ドイツ語の純粋与格は日本語で「場所」という空間的な意味を表す格助詞で現れることも確認できた。格助詞「から」の起点の用法も空間的な意味を表す格助詞と解釈できる。これらのことから、ドイツ語の純粋与格が「主体」「対象」「相手」「所有」「空間」という意味を持つと解釈可能なとき、日本語では格助詞・連体助詞としてこれらの意味が表現されやすいと言える。ただし純粋与格がこれらの意味を担っていると考えられる場合も、0.2.2. で見たような構文等でその意味を表現する場合も多い。この点については、3.2. で詳しく見ていく。

³ ドイツ語文の引用元は[ド]で示し、日本語文の引用元は[日]もしくは[①] [②]で示す。『注文の多い料理店』の原文に関しては、青空文庫からの引用であるので、例文にはドイツ語文の引用元のみ示す。

3.2. その他の用例についての考察

ここでは、ドイツ語の純粋与格の対象が、日本語の主な格助詞・連体助詞以外の形で現れた用例 105 例の分析を行う。105 例は筆者の設定した 3 つの基準に従って分類した(表 3 参照)。さらに、日本語訳において、i) から iii) の要素に加え、ドイツ語の純粋与格の対象に対する影響を表す語句が付け加えられているものを、「影響」としてカウントした。影響を表す語句とは、0.2.2. で見た「てあげる」「てくれる」「てもらう」の他、「てくる」「てしまう」や、ドイツ語の純粋与格と対応する名詞句を、主体として前景化した受身文である。

表 3: その他の用例の分類基準

i) 省略	日本語訳の文中に、ドイツ語の純粋与格に対応する名詞句を不自然な文にすることなく補えるが、実際には現れていないもの。
ii) 意識	日本語訳において、作者による意識により、ドイツ語の純粋与格の対象が現れていないもの。また、日本語では表現しがたい慣用表現や熟語表現の翻訳。
iii) その他	ドイツ語の純粋与格に対応する名詞句は日本語訳に現れているが、主な格助詞・連体助詞の用法以外の表現が用いられているもの。

分類した結果と、影響が付け加えられている用例の数を表 4 に示す。

表 4a: その他の用例の現れ方

	『砂男』①	『砂男』②	『飛ぶ教室』①	『飛ぶ教室』②	合計
i) 省略	12	18	15	18	63
ii) 意識	4	11	7	8	30
iii) その他	5	4	2	1	12
合計	21	33	25	28	105

表 4b: 影響が付け加えられている用例

	『砂男』①	『砂男』②	『飛ぶ教室』①	『飛ぶ教室』②	合計
影響	6	4	8	6	23
i)+影響	5	4	6	5	20
ii)+影響	0	0	2	0	2
iii)+影響	1	0	0	0	1

その他の用例 105 例中、最も多く見られたのは、i) 省略の 63 例だった。この 63 例中 20 例には、日本語訳において、省略されているドイツ語の純粋与格の対象に対する影響を表す語句が付け加えられていた。影響を表す語句の内訳と用例を以下に挙げる。

表 5: 影響を表す語句の内訳

	『砂男』①	『砂男』②	『飛ぶ教室』①	『飛ぶ教室』②	合計
やりもらいの表現 ⁴ (例(8))	5	3	4	2	14
「てくる」 (例(9)②)	0	0	1	1	2
「てしまう」 (例(10))	1	1	0	0	2
受身文 (例(11))	0	0	3	2	5
合計	6	4	8	5	23

ドイツ語では、「相手」や「所有」といった意味が純粋与格によって明示されるが、日

⁴ ここでは、0.2.2. で見た、恩恵的事態表示に関係する「てあげる」「てくれる」「てもらう」を「やりもらいの表現」としている。

本語では、これらの意味を表す格助詞や連体助詞を用いた表現は省略⁵ されやすい。日本語訳で省略されうるドイツ語の純粋与格は、移動や影響の方向を表している場合が多い。そのため日本語では、助詞を用いた表現の代わりに、(8)のような、恩恵の移動の方向を表す語や、(9)②の「てくる」のような、空間的な移動の方向を表す語、(10)の「てしまう」のような、事態の移動を表す語が付け加えられることが多い。また、(11)のように、ドイツ語の純粋与格に対応する名詞句を主体として、日本語の受身文に翻訳し、ドイツ語の純粋与格の対象を前景化して主題として表現することもある。

(8) Oft erzähle er uns viele wunderbare Geschichten

often tell.3SG.PST he.3SG.NOM we.1PL.DAT many.ACC miraculous.ACC story.PL

① 父はよくいろいろふしぎな物語を(ぼくたちに)聞かせてくれた。

② おりおり、世にも不思議な物語のたぐいを(ぼくたちに)いろいろとしてくれた。

【砂男 [ド]: 372 [①]: 796 [②]: 150】

(9) Komme mir ja nicht ohne die Weihnachtsgeschichte nach Hause!

come.IMP I.1SG.DAT yes not without the.ACC christmas story.SG to house.SG

① クリスマスの物語も書かずに(私の所に)帰っちゃいけませんよ。

② クリスマス物語を書かないで(私の所に)帰ってきてはいけませんよ。

【飛ぶ教室 [ド]: 10 [①]: 11 [②]: 12】

(10)er [...] geriet darüber so in Eifer, daß ihm die Pfeife

he.3SG.NOM start.3SG.PST about.it so in zeal.SG that he.3SG.DAT the.NOM pipe.SG

immer ausging,

always go out.3SG.PST

① 父は [...] 話に熱がこもりすぎるといつも(彼の)パイプの火が消えてしまい、

② 話に熱中したあまり(彼の)パイプの火が消えてしまったりしてね。

【砂男 [ド]: 372 [①]: 796 [②]: 150】

(11)Schließlich nahm ich ein Kinderbuch vor, das mir

finally take.1SG.PST I.1SG.NOM a.ACC children's book.SG SEP which.NOM I.1SG.DAT

der Verfasser geschickt hatte, und las darin.

the.NOM author.SG present.PSTP have.3SG.PST and read.1SG.PST it.in

① とうとう私は、(私が)ある筆者から贈られた子どもの本をもちだし、それを読みだしました。

② とうとう私は、(私が)ある筆者から贈られた子どもの本をとりあげて、読みはじめ

⁵ 成山(2009)でも述べられているように、日本語の主語や目的語を提示しないことを「省略」ということは、日本語学の未解決の課題である。本稿では、先に分類基準として挙げたように、日本語訳の文中に、ドイツ語の純粋与格に対応する名詞句を不自然な文にすることなく補えるが、実際には現われていない場合、便宜的に「省略」として取り扱う。

ましたが、

【飛ぶ教室 [ド]: 14 [①]: 17 [②]: 18】

これらのことから、ドイツ語では「主体」「相手」「対象」などに均等に焦点を当て、主格・与格・対格などを当てはめる表現が多いが、日本語では、話者の視点や、主題が何であるかによって、表現の焦点を変えることが多いことが指摘できる。

4. まとめと今後の課題

卒業論文では、ドイツ語の純粋与格を収集し、それらの純粋与格と対応する日本語表現について、翻訳における両言語の対応という観点から調査した。そして、ドイツ語の純粋与格と日本語の表現がどのように対応する傾向にあるのかを、藤縄(2005)の結果と比較しながら確認した。その結果、ドイツ語で書かれた文章と、日本語をドイツ語に翻訳した文章における、ドイツ語の純粋与格の使われ方の違いや、翻訳における両言語の特徴を指摘できた。しかし、日本語からドイツ語に翻訳された小説については、一般的に、ドイツ語の純粋与格と対応しているとされている格助詞「に」を収集することができなかった。日本語の格助詞「に」がドイツ語ではどのように翻訳されていたのかについては、改めて調査する必要がある。また、ドイツ語の純粋与格と日本語の補助動詞構文の関係についても、さらに調査したい。

略語一覧

1: 1 st person	DAT: dative	PRS: present
2: 2 st person	INF: infinitive	PST: past
3: 3 st person	NOM: nominative	PSTP: past participle
ACC: accusative	PL: plural	SEP: separable prefix

参考文献

片岡宜行(1998)「ドイツ語の与格の分類について」『京都大学文学部独文研究室 研究報告』11: 25-39／成田節(2009)「研究ノート: ドイツ語の与格と対格—コーパスを使って数える—」『東京外国語大学大学院総合国際学研究院グローバル COE プログラム コーパスに基づく言語学教育研究報告』3: 93-110／成田節・中村俊子(2004)『ドイツ語文法シリーズ3 冠詞・前置詞・格』東京: 大学書材／成山重子(2009)『日本語の省略がわかる本 誰が? 誰に? 何を?』東京: 明治書院／日本語記述文法研究会編(2009)「第3部 格と構文」『代日本語文法 2』東京: くろしお出版／藤縄康弘(2005)「ドイツ語の格と日本語の格: 対応パターンと用例」『愛媛大学 法文学部論集』19: 85-10

調査資料

Hoffmann, E.T.A(1817): *Der Sandmann*, 【Zeno.org】
<http://www.zeno.org/Literatur/M/Hoffmann,+E.+T.+A./Erz%C3%A4hlungen,+M%C3%A4rchen+und+Schriften/Nachtst%C3%BCcke/Erster+Teil/Der+Sandmann> (2011/07/03)／種村李弘訳(1991)「砂男」『集英社ギャラリー [世界の文学] 10 ドイツ I』793-829 東京: 集英社／池内紀訳(1984)「砂男」『ホフマン短編集』147-212 東京: 岩波書店／Kästner, Erich(1933): *Das fliegende Klassenzimmer*, Hamburg: Cecilie Dressler Verlag／山口四郎訳(2003)『飛ぶ教室』東京: 講談社／高橋健二訳(1962)『飛ぶ教室』東京: 岩波書店
 宮沢賢治(1924)『注文の多い料理店』【青空文庫】
http://www.aozora.gr.jp/cards/000081/files/43754_17659.html (2011/07/03)／Fischer, Johanna(1994): *Das Gasthaus mit den vielen Aufträgen*, Mainz: Verlag Mainz／時雨沢恵一(2000)『キノの旅』東京: 角川グループパブリッシング／Ossa, Jens(2006): *Kinos Reise*, Hamburg: TOKYOPOP

フィンランド語における属格と接格・向格の 統語的・意味的機能の類似について

高橋 健太郎

(南・西アジア課程 トルコ語専攻)

キーワード: フィンランド語、属格、接格、向格、経験者

0. はじめに

フィンランド語¹の属格と場所を示す格である接格や向格²は、統語的・意味的機能に関していくつかの類似点があると考えられる。属格と接格の用法が類似した例を以下にあげる。属格と接格で示された語をそれぞれ囲い線で示す。

- (1) Lapsen oli ikävä äitiään.
子供.GEN である.3SG.PAST 恋しい 母親
子供は母親が恋しかった。

(佐久間 2004: 178)

- (2) Lapsella oli ikävä äitiään.
子供.ADE である.3SG.PAST 恋しい 母親
子供は母親が恋しかった。

(佐久間 2004: 178)

(1)と(2)の文意はほぼ同じであるが、(1)では意味上の主語は属格で表示されており、(2)では接格で表示されている。卒業論文ではこのような属格と接格・向格の用法を比較し、この用法における統語的・意味的な類似点・相違点を明らかにした。本稿中のグロス、日本語訳、例文番号、囲い線、下線は特に断りがない限り筆者による。

1. 先行研究

ここでは先行研究内の記述をもとに属格と接格・向格の用法を筆者がまとめ直した。属

¹ フィンランド語はウラル語族、フィン・ウゴル語派、バルト・フィン諸語に属する言語であり、主にフィンランド国内で話される。話者数は約 500 万人。子音音素は 13 個、母音音素は 8 個である。母音調和や子音階程交替などの現象がある。類型論的には膠着語である。基本語順は SVO である(松村 1992: 678 要約)。本稿での表記は正書法に倣う。

² フィンランド語は主格対格型の格表示体系を持つ言語である。松村(1992)に倣い、本稿では格の数は全部で 14 とする(主格、属格、分格、内格、出格、入格、接格、奪格、向格、様格、変格、欠格、共格、具格)。本稿で扱う 3 つの格(属格、接格、向格)のうち、属格は接尾辞 -n を用いて表示される。接格と向格は基本的に場所関係を表わす格である。接格は接尾辞 -lla/-llä を用いることで外部(上・表面・近傍)における静止位置「～の上で」を表わし、向格は接尾辞 -lle を用いることで外部における到着点「～の上へ」を表わす。接格の接尾辞には母音調和による異形態が存在する。

格については松村(1992)と Sulkala(1992)を、接格・向格については Sulkala(1992)を参照した。再分類した3つの格の用法を比較し、それぞれの類似点と相違点を以下の表1～3にまとめる。3つの格で類似した用法は太字と枠線で示してある。

表1: 属格名詞句の用法

統語機能	主な意味役割
名詞的要素の修飾 ³	
非定形動詞に関わる	動作主
非人称構文に関わる	責任者、 経験者
コピュラ文における補語	所有
単数対格目的語	対象、被動者など

表2: 接格名詞句の用法

統語機能		主な意味役割
副詞的な用法		場所(静止位置)、時間、 所有 、被使役者
特定の構文における用法	存在文 ⁴	場所(静止位置)
	所有文	所有
	経験者構文	経験者

表3: 向格名詞句の用法

統語機能		主な意味役割
副詞的な用法		着点
特定の構文における用法	存在文 ⁵	
	所有文	
	経験者構文	経験者

³ 属格名詞句における名詞的要素の修飾に関しては、属格で表示した修飾部の意味によっていくらかでも意味を設定できるので表1では空欄とし深く立ち入らない。

⁴ 松村(1992)によれば、「存在文」は「場所格名詞句＋自動詞＋主格または分格の名詞句」で表される。接格や向格など場所関係を示す格は場所格と呼称する。ここでは場所格で表示されていない方の名詞句を存在文の主語とみなす。その場合「存在文」は以下の特徴を持つ(なお、存在文ではない一般の自動詞文を普通文と称する)。①普通文の主語は常に主格で現れるのに対し、存在文の主語は肯定文で主格または分格、否定文では分格で表示される。②普通文の動詞は人称、数において主語と一致するが、存在文の動詞は常に3人称単数形である。③普通文の主語は通常は動詞の前におかれるが、存在文の主語は動詞の後ろにおかれるのが普通である。一方、存在文の自動詞が olla「である」ならば、所有を表わす文に相当する意味を持つとされる。佐久間(2004)ではこのような文を「所有文」として扱っている。「所有文」の構文上の定義は「存在文」と同じとする。本発表の「存在文」「所有文」の定義はこれらに倣う。

⁵ 向格名詞句を用いた存在文、所有文は先行研究内で見られなかったため、表3中の意味役割の箇所は空欄にしてある。

上で示したように所有や経験者を表わす用法に関して類似していると言うことができる。
表 1～3 を踏まえて、調査を進める際に以下のことを念頭に置く。

- ①向格名詞句に所有の用法は認められるのか。ある場合は属格・接格とどのような違いがあるのか。
- ②太枠線内の類似した用法は、それぞれの格を用いることでどのような相違点があるのか。

向格名詞句の所有の用法について、先行研究内に具体的な記述を見ることはできなかった。もし向格名詞句の所有の用法を認めることができれば、属格や接格の用法により類似しているということを示すことができる。

2. 研究方法

本研究の調査は次のような手順で行う。まず考察に必要な用例を抽出する。用例を集めるためのテキスト資料としてフィンランド語で書かれた小説⁶を用いる。これを転写したテキストファイルを `antconc` という検索ソフトにかけて用例を収集する。検索する際に属格、接格、向格を指定しその格が付与されている単語を含む文が選出されるように設定する。次に、収集した用例をそれぞれの統語機能に分類する。分類の基準は表 1～3 に従う。表 1～3 を見ると、問題となる 3 つの格の用法で類似したものは所有文や経験者構文などを含む非人称構文である。したがって用例の分析は非人称構文に焦点を当てる。非人称構文の定義は義務・当然の構文、存在文、所有文、経験者を表わす構文に共通した特徴を持つものとする。その特徴を以下に示す。

< 非人称構文の定義 >

- ①動詞の人称は常に 3 人称である。
- ②それぞれの格で表示された語は常に動詞の前に来る。

最後に、選出した非人称構文の用例を観察し問題の格で表示された名詞句の意味役割を特定する。異なる格の場合と意味役割を比較し、3 つの格の類似点、相違点を考察していく。

3. 調査結果

3.1. 統語機能による分類

統語機能による分類の結果を以下に示す。非人称構文の欄は太字と枠線で示してある。

⁶ 用例収集に用いた小説は Nevalainen, Liisa. (1981) *Musta sinfonia* である。これはフィンランド語で書かれた推理小説であり、総ページ数は 220 ページである。この小説を選んだのは、現在の筆者のフィンランド語の力量を考慮した上で、用例収集が効率よく行えると考えたためである。

表 4: 属格名詞句の用例数

統語機能	用例数
名詞的要素の修飾	309(55.4%)
単数対格目的語	108(19.4%)
非定形動詞に関わる	85(15.1%)
非人称構文に関わる	44(7.9%)
コピュラ文における補語	12(2.2%)
合計	558(100%)

表 5: 接格名詞句の用例数

統語機能	用例数
副詞的な用法	234(77.5%)
非人称構文に関わる	68(22.5%)
合計	302(100%)

表 6: 向格名詞句の用例数

統語機能	用例数
副詞的な用法	172(85.6%)
非人称構文に関わる	29(14.4%)
合計	201(100%)

表 4～6 で示したように、非人称構文に関わる格の用例はそれぞれ属格が 44 例、接格が 68 例、向格が 29 例であった。先行研究でまとめた用法に含まれないものは見られなかった。

3. 2. 意味役割による分類

非人称構文に分類した用例をさらに意味で分類した結果を以下に示す。分類は表 3 に従う。共通の意味である経験者の欄は太字と枠線で示す。

表 7: 属格名詞句の用例数

意味役割	用例数
責任者 (義務・当然・必要を表わす構文)	31(70.5%)
経験者(経験者構文)	13(29.5%)
合計	44(100%)

表 8: 接格名詞句の用例数

意味役割	用例数
所有(所有文)	45(66.2%)
場所(静止位置)(存在文)	13(19.1%)
経験者(経験者構文)	10(14.7%)
合計	68(100%)

表 9: 向格名詞句の用例数

意味役割	用例数
経験者(経験者構文)	29(100%)
合計	29(100%)

向格名詞句の用例は経験者を表わすものしか確認できず、完全な所有の意味を持つと判断できるものはなかった。

4. 考察

属格、接格、向格の類似した用法の一つは非人称構文にあるということがわかった。特に意味の点では経験者を表わす場合で類似している。ここではその場合、どのような相違点があるのかという点を考察する。考察はそれぞれの格を比較して行う。

4.1. 属格と接格の比較

非人称構文における属格名詞句と接格名詞句の共通の用法は経験者を表わす場合である。

< 属格名詞句の場合 >

- (3) Minun tekee mieli soittaa sinulle.
 1SG.GEN したい.3SG 電話をかける.1INF 2SG.ALL
 私は君に電話したい。

- (4) Mitä Kertun on käynyt?
 どのように PRN.GEN である.3SG 生じる、なる.PASTP
 ケルトゥは怎么样了のですか？

< 接格名詞句の場合 >

- (5) Kyllä minä tiedän että teillä kahdella oli
 そう 1SG.NOM 知っている.1SG ということ 2PL.ADE 二つ.ADE である.3SG.PAST

joskus nuoruudessa jonkinlaista teerenpeiliä keskenämme...

時々 若いころ.INE ある種の 浮気性.PART 彼ら自身に

そう、彼ら二人は、若いころ時々ある種の浮気性があったということを私は知っている。

属格名詞句の(3)と接格名詞句の(5)を比べると、経験者という点ではあまり違いが感じられない。しかし、(4)の例文は「変化」を表わす意味を持つことが分かる。属格名詞句の経験者構文の中にはこのような「変化」を示す用例がいくつか見られた。属格を伴う非人称構文で経験者構文であるものの13例のうち、「変化」を表わすと思われる例はうち5例である。「変化」を表すか否かはそれぞれの格で示された名詞句に共起する動詞によって判断した⁷。一方で接格名詞句にはこのように、「変化」を表わす用例はほとんど見られなかった。したがって「変化」の有無が属格名詞句と接格名詞句の経験者構文における違いであると言える。

4.2. 接格と向格の比較

接格名詞句と向格名詞句の経験者構文では「変化」を表わす意味合いの有無が極端に異なった。

< 接格名詞句の場合 >

(6) Minulla on kiire.

1SG.ADE である.3SG 忙しい

私は忙しい。

< 向格名詞句の場合 >

(7) Mitä sinulle oikein on tapahtunut?

何.PART 2SG.ALL 結局 である.3SG 起こす.PASTP

結局君はどうなるのですか？

(7)のように経験者構文として用いられる向格名詞句は29例であるが、全てが「変化」を表していた⁸。向格名詞句に伴う動詞には on tapahtunut「起こる、生じる」、tuli「なる」、selvisi「明らかになる」などがあった。一方で、接格名詞句では「変化」を表わす意味的な用法はほとんどなかった。

4.3. 向格と属格の比較

向格名詞句と属格名詞句の場合ではどちらも「変化」の意味合いを表わす場合を確認で

⁷ 「変化」の意味の付与に関わる動詞は表10に挙げる。

⁸ ただし向格名詞句の非人称構文の中には経験者用法と分類できるが若干所有の意味を感じさせるものがあった。

きる。

< 向格名詞句の場合 >

- (8) Ja Sepolle selvisi totuus.
そして PRN.ALL 明らかになる.3SG.CON 真実
そしてセッポには真実が明らかになるだろう。

< 属格名詞句の場合 >

- (9) Minun teki mieli uutta auroa.
1SG.GEN したい.3SG.PAST 新しい.PART 車.PART
私は新しい車が欲しかった。

非人称構文で向格名詞句が用いられる場合には(8)のように常に「変化」を表わす。一方で属格名詞句の場合の(9)の例は「変化」を表わしていない。しかし 4.1 節で示したように、属格名詞句は向格名詞句ほどの頻度ではないが「変化」を表わす場合も多少ある。

5. まとめ

1 節で、問題点の一つ目として向格に所有の用法は認められるのかという点を挙げたが、非人称構文では所有の用法は見られなかった。よって所有という点から属格や接格との類似は認められない。二つ目の問題点である、それぞれの格で類似した用法の違いに関しては、以下にこれまでの考察の結果を踏まえて、属格、接格、向格の用法を類似点と相違点に分けてまとめる。

< 類似点 >

- ①統語的な分類の観点から、3つの格はその共通の用法に非人称構文を持つ(表 4～6 より)。
- ②非人称構文において、経験者という共通の意味役割を担うことがある(表 7～9 より)。

< 相違点 >

- ①非人称構文では向格以外の格はそれぞれ独自の用法を持つ。属格名詞句は責任者(義務・当然・必要を担う者)を表し、接格名詞句は所有や場所(静止位置)を表す(表 7～9 より)。
- ②類似した用法である経験者構文においても、それぞれの格を用いることで、「変化」の意味合いが付与される頻度が異なる。すなわち、向格>属格>接格、という順番で「変化」の意味合いが付加される度合いは低くなっていく。

②に関して「変化」の意味合いを判断する手がかりとして3つの格で表示された名詞句とそれに共起している動詞を見る。「変化」を表わすと判断した用例数と動詞を以下の表 10 にまとめる。表中の動詞は例文中の活用形のままにしてある。

表 10: 「変化」を表わす用例数とその用例中の動詞

	動詞(用例数)	「変化」を表わす用例数 / 経験者構文の全体数
向格名詞句	tuli 「なる(過去形)」(11), on tapahtunut 「起こる、生じる」(7), kuuluu 「なる」(5), olisi 「である(条件法)」(3), selvisi 「明らかになる」(1), oli noussut 「上がる」(1), levisi 「広がる」(1),	29 / 29 (100.0%)
属格名詞句	tuli 「なる(過去形)」(3), tulee 「なる」(1), on käynyt 「なる、生じる」(1)	5 / 13 (38.5%)
接格名詞句		0 / 10 (0%)

表 10 を見ると向格表示の場合は「変化」の意味合いが必ず含まれ、接格表示の場合は含まれない。属格表示はその中間であり「変化」の意味を含む時とそうでない時がある。よって「変化」を表わす程度によって格が選択されていると考えることができる。

6. おわりに

以上、フィンランド語における属格と接格、向格の統語的、意味的機能について考察を行った。今回の調査では扱うテキスト資料の分量が不足していたため今後はより大きな分量のデータを扱いたい。その上で動詞との関連も含めながらより深い考察をしていきたい。

略号一覧

ADE adessive 接格 / ALL allative 向格 / CON conditional 条件法 / GEN genitive 属格 / INE inessive 内格 / NOM nominative 主格 / PART partitive 分格 / PAST past 過去 / PASTP past participle 過去分詞 / PL plural 複数 / PRN person name 人名 / SG singular 単数 / 1, 2, 3 各 1, 2, 3 人称 / 1INF first infinitive 第 1 不定詞

参考文献

<日本語で書かれたもの>

佐久間淳一(2004)『フィンランド語のすすめ』東京: 研究社

松村一登(1992)「フィンランド語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典(第 3 巻 世界言語編 下-1)』671-688. 東京: 三省堂

<英語で書かれたもの>

Sulkala, Helena., and Merja Karjalainen. (1992) *FINNISH*. London: Routledge

調査資料

Nevalainen, Liisa. (1981) *Musta sinfonia*. Espoo: Amer-yhtymä Oy Weilin+Göös kirjapaino

文末の「し」の用法について

中澤 明恵

(日本課程 日本語専攻)

キーワード: 日本語、話し言葉、文末、言いさし、接続助詞の終助詞化

0. はじめに

日本語の話し言葉において、文末で「し」が用いられることがある。本稿では、この文末の「し」の用法について明らかにする。先行研究をまとめたのち、漫画による調査と談話録音による調査を行う。次に、それらの調査から得られた用例に対して置き換え、構文的特徴、要素による分類を行う。さらに、3つの分類と表れた感情との分類を掛け合わせ、相関関係を示す。例文番号と引用部分を除いた下線はすべて筆者による。

1. 先行研究

日本語記述文法研究会編(2008)は、文末の「し」の用法について以下のように述べている。

◆「し」により文を言いおわる言い方には、累加を表す用法と、理由を表す用法がある。

(1) あの店、おいしいね。値段も安いし。(累加)

(2) もうだいぶ遅い時間になりましたし。(理由) (日本語記述文法研究会編 2008: 290)

さらに、累加の「し」による関係づけの文は、以下の例のように「し」を用いずに「それに」でつなぐこともできるとしている。

(3) この料理は簡単だからいいね。材料費もいらないし。

(3') この料理は簡単だからいいね。それに材料費もいらない。

(日本語記述文法研究会編 2008: 293)

朴(2005)は、文末の「し」の用法として「並列」「原因・理由」「補足説明」を挙げている。加えて、それらのいずれの意味・用法での解釈も難しい用例として、以下のようなものを挙げているが、詳しい考察は行われていない。

(4) a. 意見(不満)を述べながらも、断定・言い切りを避け、語尾を濁す感じの発話

「私もやるし」「見てないし」「そんなこと言われても困るし」

b. 自分の感情や希望しない気持ちを表す場合、不服の気持ち、相手に対する拒否の態度を強く表現している場合

「嫌だし」「行きたくないし」

c. 「当然～だよ」といった意味で、聞き手に対する自己主張または自慢する気持ち

「知ってるし」

d. 現在の状態や出来事についていう場合

「やったし」、「テレビ見たし」

(朴 2005: 31-32、一部筆者により改変)

上記2つの研究から、文末の「し」には「累加」や「理由」など接続助詞の「し」と共通する用法があるとともに、不満や自慢の感情を述べる用法もあるということが分かる。

本稿では、文末に「し」が用いられている例をさまざまな角度から観察することで、文末の「し」の全体像を明らかにする。

2. 調査

文末の「し」の用法を調査するために、漫画を用いた調査(以降『調査 A』)と録音した談話を用いた調査(以降『調査 B』)の2つを行った。

調査 A で漫画を用いた理由は2つある。まず、漫画では小説よりも会話体が多く用いられているため、文末に「し」を使う用例が現れやすいと考えられる。さらに、文字になっているため、短期間で用例を集めることができ、前後の文脈もすぐに参照できる。以上の理由から、調査 A では用例を収集する資料として漫画が適切であると考えた。

2.1. 調査概要

調査 A: 漫画を用いた調査

東京を舞台とした少年漫画である『バクマン。』の1～5巻において、「し」が用いられている用例を手作業で収集した。資料として用いた漫画の作品概要と分量および作者の情報については以下の通りである。

- ・作品概要: 『バクマン。』 埼玉県が舞台。中学3年生の男子生徒2人が、漫画家として成功するという夢に向け奮闘する姿を描く。主人公の男子生徒2人の発話が多い。
- ・分量: 約 200 ページ／冊(1 ページあたりの文字数: 120 字前後)
- ・作者の情報: 原作者: 大場つぐみ¹ / 東京都出身、埼玉県在住。

調査 B: 録音した談話を用いた調査

許可を取って複数人の会話を録音し、文末に「し」が現れている部分をすべて書き起こした。録音の日時と時間及びインフォーマント情報(年齢/性別/言語形成地域)については以下の通りである。なお、インフォーマント B は筆者である。

- | | |
|-------------------------------------|-------------------------------------|
| ・第1回談話録音調査
(2011年9月2日/2時間17分37秒) | ・第2回談話録音調査
(2011年9月5日/3時間12分25秒) |
| A: 21歳/女性/茨城 B: 22歳/女性/東京、栃木 | B: 22歳/女性/東京、栃木 C: 22歳/女性/東京 |
| ・第3回談話録音調査 | ・第4回談話録音調査 |

¹ 『バクマン。』には原作と作画の2人の作者がいるが、発話部分を担当している原作者の情報のみを掲載した。また、大場つぐみのプロフィールは、一部ガモウひろしのものを参考にした。

(2011 年 9 月 6 日/48 分 21 秒)

B: 22 歳/女性/東京、栃木 D: 21 歳/男性/茨城

(2011 年 9 月 8 日/4 時間 17 分 37 秒)

B: 22 歳/女性/東京、栃木 E: 23 歳/女性/静岡

F: 21 歳/女性/神奈川

G: 20 歳/女性/群馬

H: 19 歳/女性/埼玉

I: 21 歳/女性/山梨

2.2. 調査結果

調査 A で収集した例のうち「し」が用いられている発話は 205 例あった。そのうち文中の「し」が 110 例、文末の「し」が 95 例である。本稿は文末の「し」の用法を明らかにすることを目的としているため、文中の「し」については扱わない。文末かどうかの判断基準は次の 4 つである。

- ① 「し」で発話が終わり別の人物の発話に移行している場合。
- ② 「し」の後に発話自体は終わっていないが、「し」で一旦文が終わり次の文に移っている場合。
- ③ 「～し。～し。」と列挙している場合。
- ④ 「し」に「ね」や「な」などの終助詞がついている場合。

調査 B では文末に「し」が用いられている発話は 245 例あった。なお、文末の判断基準は調査 A と同様である。調査 A、B の調査結果の詳細を、表 1 にまとめる。

表 1: 調査結果

調査 A	用例数	調査 B	用例数
『バクマン。』1	27	第 1 回談話録音調査	51
『バクマン。』2	19	第 2 回談話録音調査	105
『バクマン。』3	17	第 3 回談話録音調査	26
『バクマン。』4	16	第 4 回談話録音調査	63
『バクマン。』5	16	調査 A・B 合計	340

以上の調査 A、B で収集した 340 例に対し、置き換え、構文的特徴、要素、感情による分類を行う。

3. 分析

集めた用例に対し、3.1 で「から」と「それに」の置き換えによる分類を行い、3.2 で構文的特徴による分類を行う。さらに 3.3 で要素による分類を行ったのち、3.4 で感情が表れた例文を分類し、他の分類との相関を示す。

3.1. 置き換えによる分類

文末に「し」を用いた用例を「それに」と「から」で置き換える。置き換えの方法は、以下の通りである。

・「から」との置き換え：文末の「し」を取って、「から」に置き換えても不自然でないか。不自然でない場合は置き換え可、不自然な場合は置き換え不可と判断する。

(置き換え例：もう寝るの？／明日朝早いし。→もう寝るの？／明日朝早いから。)

・「それに」との置き換え：文末の「し」を取って、その文頭に「それに」を入れてつないでも不自然でないか。不自然でない場合は置き換え可、不自然な場合は置き換え不可と判断する。置き換え例は、既に例文3で取り上げたため、割愛する。

上記の方法で調査 A、B で収集した 340 例を分類したところ、文が不自然かどうかの判断に迷う例が 340 例中 54 例あった。これらの例文に関しては、第三者による置き換えのチェックを行い、その結果をもとに再度分類をし直した。なお、分類のチェックを行ったインフォーマントは 22 歳の女性で、言語形成地域は埼玉、東京である。第三者によるチェックの結果、分類にズレのあった例文は 54 例中 23 例であった。ズレのなかった 31 例はもとの分類のまま使用した。残りの 23 例を再度分類し、13 例については第三者の分類に従い、10 例についてはもとの分類に従った。

「から」と「それに」との置き換えによる分類結果を表 2 にまとめる。表中の＋は置き換え可、－は置き換え不可を表す。表 2 に挙げた 4 つのパターンについては、次節以降にまとめる。

表 2: 「から」「それに」置き換え分類結果

	調査 A	調査 B	計
「から」＋「それに」－	48	89	137
「から」＋「それに」＋	14	87	101
「から」－「それに」－	18	34	52
「から」－「それに」＋	15	35	50
計	95	245	340

3.1.1. 「から」＋「それに」－

(5) A: なんか、就活実際年内にやるの？

B: わかんない。やりたいと思った時にやればいいんじゃない？なんか、すごい遅く始めて決まる人いるしね。3月とかにね。なんかそれ、人それぞれ。

(第 1 回談話録音調査)

(6) 高木「なっ やってみようぜ」

真城「あのさ 読書感想文とかとマンガ 全然違うし」

高木「わかってる」

(バクマン。1)

「から」に置き換えられても、「それに」に置き換えられない例は例文 5 のように文末に「し」を用いて理由を述べる例がほとんどだったが、例文 6 のように、「から」に置き換えられるものの理由を表しているとはいづらい例も 14 例見られた。このような例は、「累

加」も「理由」も表していない。14 例のうち 11 例では感情が強く表れていた。

3.1.2. 「から」＋「それに」＋

(7) B: まじバイトしなきゃなー。

C: 10 月から。

B: 9 月がいいや。卒論忙しいし。

C: 夏休みだもん。合宿あるし。

(第 2 回談話録音調査)

例文 7 の下線付きの「し」は、「累加」と「理由」の両方を表している。直前の B の発言中の「し」は「から」＋「それに」－に分類されたものである。この 2 つを比べると、B は「9 月はバイトしなくていい」ことの理由として「卒論が忙しい」と述べるために、文末に「し」を用いている。一方、C は「9 月はバイトしなくていい」ことの理由としてまず「夏休みだ」ということを挙げ、さらに「合宿もある」という理由を累加している。先行研究では「し」の意味機能は主に「累加」と「理由」に分けられていた。しかし、「から」＋「それに」＋に分類した例は、「累加」と「理由」の両方の特徴を備えている。文末の「し」のこのような用法を、本稿ではこれ以降「累加的理由」と呼ぶ。

3.1.3. 「から」－「それに」－

(8) B: 結局行き先も決まってるじゃん。

D: はい…

B: はいじゃなくて。なんなんだし。

(第 3 回談話録音調査)

例文 8 の文末の「し」は「累加」も「理由」も表していない。文末の「し」を用いることによって、話者の[苛立ち]の感情を表しているだけである。3.1.1 でも既に述べたが、「累加」も「理由」も表していない用法では感情が強く表れるものが多く、「から」－「それに」－では 52 例中 25 例に感情が表れていた。

3.1.4. 「から」－「それに」＋

(9) 見吉「真城 睡眠時間 3 時間だって…… 学校でも寝ないで なんか描いてるし」

高木「3 時間！……」

(バクマン。5)

(10) C: 実際留学楽しそうだよ。

B: 楽しそう。今しかできないし。

C: そう。

B: いいなあ。1 年とか行ったらね。絶対楽しいよ。

(第 2 回談話録音調査)

(11) 高木「なあ 俺達 恵まれてるよな 皆が応援してくれてる サイコーのおじさんの好きだった人が亜豆の母ちゃんってのも 運命的だし」

(バクマン。1)

例文 9 は、「真城は睡眠時間が 3 時間だ」という情報に、「学校でも寝ないで何か描いて

いる」というさらに詳しい情報を、文末の「し」を用いて累加している。この用法は「理由」を表しているとは言い難く、「累加」の用法と考えることができる。例文 10 も同様に、C の「留学は楽しそうだ」という意見に同意して、さらに「今しかできない」という意見を加えているとみることもできる。しかし、この例文に関しては「留学は今しかできないから、楽しそうだ」と捉えることもでき、その場合は「理由」も表していることになる。例文 11 は、「俺たちは恵まれている」という意見の理由として、まず「皆が応援してくれている」ことを挙げ、さらに「運命的である」という理由を累加している。しかし、この例文の文末の「し」を置き換えた場合、「それに」には置き換ええるが「から」に置き換えると不自然である。以上の例文からわかるように、「から」－「それに」＋に分類された例文には、単に「累加」を表すものと「累加的理由」を表すもの、さらにはその中間のような例も含まれていた。

3.2. 構文的特徴による分類

次に、文末の「し」と共に現れることの多い 15 の構文的特徴に着目して分類した。「じゃん」と「もん」に関しては、文末で「し」が使われた直前(または直後)の文末で「じゃん」または「もん」が使われているものを数えた。構文的特徴による分類結果を表 3 にまとめる。

表 3: 構文的特徴による分類結果

	形	調査 A	調査 B	計		形	調査 A	調査 B	計	
	共起要素ナシ	45	79	124	副詞・ 助詞	「いえ/いや」	4	1	5	
副 詞 ・ 助 詞	「も」	21	59	80		「どうせ」	1	1	2	
	「仮定」	4	29	33		「やっぱり」	0	2	2	
	「逆接」	7	21	28		前後の 文末	「じゃん」	9	15	24
	「しかも」	1	24	25			「もん」	1	6	7
	「だから/から」	3	10	13		後続要 素	「ね」	2	44	46
	「だって」	1	8	9			「さ」	0	12	12
	「なんて」	6	0	6			「な」	3	1	4
合計	調査 A: 108(95)	調査 B: 312(245)		全体: 420(340)						

構文的特徴による分析例の合計数が全体数より多くなっているのは、複数の構文的特徴を含む用例があるためである。括弧内の数字は、もとの用例数を示す。

3.3. 要素による分類

次に、要素に着目して一つ一つの文を分析した。要素は<>に入れて表す。これらの要素は筆者が独自に考案したものである。要素と定義、分類結果を以下に示す。

<主張>: 話し手の意見や主張

<根拠>: 主張に対する根拠、理由、裏付け

＜問い＞: 話し手による問いかけ ＜答え＞: 問いに対する応答、答え
 ＜提案＞: 話し手の聞き手に対する提案 ＜反論＞: 主張、提案に対する反論

表 4: 要素による分類結果

分類	調査 A	調査 B	計	分類	調査 A	調査 B	計
＜主張＞に対する＜根拠＞「し」	49	183	232	＜反論＞「し」	3	3	6
＜主張＞「し」	19	20	39	＜反論＞に対する ＜根拠＞「し」	0	2	2
＜要素ナシ＞「し」	11	21	32	＜提案＞に対する ＜根拠＞「し」	0	2	2
＜問い＞に対する＜答え＞「し」	8	5	13	＜問い＞に対する ＜根拠＞「し」	0	1	1
＜答え＞に対する＜根拠＞「し」	5	8	13	計	95	245	340

3. 4. 感情による分類

感情が強く表れている例は、調査 A で 18 例、調査 B で 28 例の計 46 例あった。感情の表れとして分類したものは、[不満、苛立ち、責め立て、侮蔑、遠慮、戸惑い、驚き、興奮、動揺、自慢、嘆き]の 11 種である。各用例の分布は表 5 の通りである。

表 5: 感情による分類結果

	感情	調査 A	調査 B	計		感情	調査 A	調査 B	計
「不満」	a. [不満]	7	13	28	「主張」	i. [驚き]	1	1	5
	b. [苛立ち]	1	2			j. [興奮]	0	2	
	c. [責め立て]	1	1			k. [動揺]	1	0	
	d. [侮蔑]	0	2			l. [自慢]	0	4	5
	e. [呆れ]	0	1			m. [嘆き]	0	1	
「戸惑い」	f. [遠慮]	2	1	8	計		18	28	46
	g. [戸惑い]	3	0						
	h. [迷い]	2	0						

上記の表の a, b, c, d, e を[不満]系、f, g, h を[戸惑い]系、i, j, k を[驚き]系、l, m を[主張]系とすると、[不満]系が 28 例、[戸惑い]系が 8 例、[驚き]系が 5 例、[主張]系が 5 例であった。感情の表れている例についての置き換えによる分類結果、構文的特徴による分類結果、および要素による分類結果を次節以降にまとめる。

3. 4. 1. 感情例と置き換えによる分類の相関

感情が表れている 46 例のうち 25 例が、「から」－「それに」－の例であった。つまり、

「累加」にも「理由」にも入らない用例が感情を表すことが多いということである。また、「から」+「それに」-に分類されたものは46例中15例であるが、このうち11例が、3.1.1の例文6のように、「から」に置き換えられるが理由を表していない例であった。さらに、残りの4例はすべて[戸惑い]系の用例であった。これらは、「し」を付けて語尾を濁すことで、[遠慮]、[迷い]などの弱い感情を付与していると考えられる。

3.4.2. 感情例と構文的特徴による分類の相関

感情の表れている46例のうち24例は共起要素のない「し」であった。また、「でも」「も(逆接)」「のに」が9例あり、構文的特徴の中では2番目に多い。このことから、文末の「し」を用いて感情を表す際、逆接とともに使われることが比較的多いことも分かる。また、感情が表れた例文で「も」「しかも」を用いているものでは6例中4例で[不満]の感情が表れている。

3.4.3. 感情例と要素による分類の相関

感情の表れている46例のうち32例は<要素ナシ>であった。つまり、会話の流れから孤立して表れる「し」が感情を表すことが多いということである。このことは、置き換えによる分類結果で「から」-「それに」-が最も多いことや、構文的特徴による分類結果で共起要素のない「し」が最も多いことから導かれる結論とも一致する。

4. 結論

文末で「し」を用いる際には、接続助詞の「し」の用法である「累加」、「理由」に加えて、「累加的理由」、「累加でも理由でもない用法」、「理由と累加の中間」などの用法があることが分かった。さらに、「累加でも理由でもない用法」の場合に感情が付与されることが多いことが明らかになった。このことから、「累加」や「理由」として用いられていた文末の「し」の意味が徐々に薄れ、感情を付加する終助詞的な用法に発展してきたのではないかと推測することができる。「累加」や「理由」の意味を残しつつ感情を付加している例は、その中間の姿であると考えられる。

接続助詞の言いさし表現について扱っている朴(2005)では、原因・理由を表さない「から」「ので」、逆接を表さない「けど」「が」「のに」「くせに」があると指摘されている。接続助詞を終助詞的に用いる際に本来の意味が薄れる傾向があり、文末の「し」でも同様のことが起きていると考えられる。

参考文献

日本語記述文法研究会編(2008)『現代日本語文法 6代 11部 複文』東京: くろしお出版
朴仙花(2005)「接続助詞で終わる日本語の言いさし表現—対人関係を中心に—」名古屋大学
院国際言語文化研究科修士論文

参考資料

大場つぐみ・小畑健(2009)『バクマン。』1-5 東京: 集英社

ブラジル・ポルトガル語の動詞による可能表現

– poder, conseguir, saber, dar について –

安田 彩

(欧米第二課程 ポルトガル語専攻)

キーワード: ポルトガル語、可能表現、口語表現、意味範囲、相関関係

1. はじめに

ポルトガル語¹には可能²を表わす代表的な動詞が4つある。すなわち、poder [can³], conseguir [achieve], saber [know], そして口語表現の dar [give]である。本稿の目的は、この4つの動詞が表わす意味範囲とその相関関係を、コーパス調査・小説を用いた調査・インフォーマントへのアンケート調査によって明らかにすることである。

なお、本稿で扱う例文の、斜字・下線・例文番号・日本語訳・グロス は筆者による。

2. 先行研究

本稿では紙幅の関係上、日本語で記述されたポルトガル語文法書である Takeda et al. (2004a, b)のみを取りあげる。Takeda et al. (2004a, b)は、日本人のポルトガル語学習者のために書かれた文法学習書である。以下に poder, conseguir, saber によって表わされる可能表現について記述された箇所を要約する。

Takeda et al. (2004a)によると、poder は英語の can に相当する動詞で、「…できる」という意味を持つ。Takeda et al. (2004a)は、poder は非常に使用範囲の広い動詞であるとして、「可能」・「禁止」・「依頼」・「許可を求める」という4つの用法を提示している。更に、poder, conseguir, saber はいずれも「…できる」という意味で用いられるが、ニュアンスが異なるという。これらの3動詞の意味を整理した表を以下に示し、それぞれ例文を挙げる。

表 1: poder, conseguir, saber の整理

poder	可か不可か／権利があるかないか
conseguir	達成するかどうか／力が及ぶか及ばないか
saber	技能があるかどうか

[Takeda et al. (2004a): 192 を参考に筆者が作成]

¹ ポルトガル語は本国ポルトガルの他、ブラジルやアンゴラなど4大陸10ヶ国で公用語となっている。このうち、最大の話者人口を持つブラジルとその他の地域では、音韻・文法・語彙など様々なレベルで違いが存在する。本稿は研究範囲をブラジル・ポルトガル語に絞り、インフォーマント調査を全てブラジル・ポルトガル語の母語話者に対して行う。調査Ⅱで用いた文献も全てブラジルで刊行されたものである。

² 従来の日本語における研究では、可能表現とは「人間その他の有情物(ときに非情物)が、ある動作(状態)を実現することが可能・不可能であることあるいはあったことを表す表現形式類」とし、「能力可能」「状況可能」「許可・許容」などを可能表現として取り扱っている(渋谷 1993)。本稿では、これらに相当する表現がポルトガル語ではどのように表わされているのかを見ていく。

³ 英語訳はひとつの目安として提示していることを断っておく。

- (1) Eu não posso comer, porque tenho problema de estômago.
 I NEG poder.1SG.PRES eat.INF because have.1SG.PRES problem of stomach.
 「胃の調子が悪いので食べられない」 [Takeda et al. (2004a): 192]

- (2) Estou satisfeito. Não consigo comer mais.
 be.1SG satisfied NEG conseguir.1SG.PRES eat.INF more
 「お腹がいっぱいだ。これ以上食べられない」 [Takeda et al. (2004a): 192]

- (3) Eu não sei comer com pauzinhos.
 I NEG saber.1SG.PRES eat.INF with chopsticks
 「私は(使い方が分からないので) お箸で食べられない」 [Takeda et al. (2004a): 192]

ただし、これらの動詞が全く異なる意味を持っているというわけではないので、状況によつては複数の動詞が使える場合も多くあると Takeda et al. (2004a)は述べている。

また、dar は「与える」という意味の動詞だが、<dar (3 人称単数)+para+意味上の主語+不定詞>という形で「～できる」という意味を表わす⁴。以下に例文を挙げる。

- (4) Não dá para o ônibus passar por esta rua.
 NEG dar.3SG.PRES para the bus pass.INF by this way
 (= O ônibus não pode passar por esta rua.)
 「バスはこの道を通ることができない」 [Takeda et al. (2004b): 75]

3. 研究方針と研究対象

先行研究において言及されていなかった点を以下に 2 点挙げ、本稿では特にこの 2 点を明らかにするべく研究を進めることとする。

- I. dar で表わされる possible の意味範囲について。
- II. poder, conseguir, saber の意味の重なる範囲について。

本稿では、(1)(2)(3)(4)のように<poder, conseguir, saber, dar para+一般動詞>の動詞連続で表わされるものをポルトガル語の動詞による可能表現とみなして研究対象とする。なお、poder などの動詞で文章が終わっているものの、文脈によって動詞省略だと判断できる場合は、動詞連続の一例とみなし研究対象に含む。

4. 調査

卒業論文では、各動詞の意味範囲と相関性を調べるために 4 つの調査を行ったが、ここでは紙幅の関係上調査 II・III・IV の概要と結果についてのみ挙げるものとする。

⁴ dar について、「可能」の意味で用いられる dar para はブラジル・ポルトガル語に見られる口語であるとの記述がある(Perini 2002: 281)。

4.1. poder, conseguir, saber に関する調査(調査 II)

poder, conseguir, saber の 3 動詞の使用実態とその意味範囲を調べてその後の調査につなげるため、Antoine de Saint-Exupéry (1943) *O Pequeno Príncipe* (邦題『星の王子さま』内藤濯訳、96 ページ), Paulo Coelho (1995) *O Alquimista* (邦題『アルケミスト～夢を旅した少年』山川紘矢・亜希子訳、123 ページ), Jorge Amado (1966) *Terras do Sem Fim* (邦題『果てなき大地』武田千香訳、288 ページ)を用いて調査を行った。各小説の中から 3 動詞が用いられている文を抜き出し、文脈から用法を判断し分類した。その際、各小説の日本語訳版も一部参照した。『星の王子さま』と『アルケミスト』がそれぞれ約 100 ページの小説であるため、『果てなき大地』も 124 ページまでを調査範囲とした。

分類基準について、まず渋谷(1993)を参考に「状況」・「許可／禁止」・「能力」を立てたが、分類していくうちにこれでは不十分であるということが分かったため、poder の意味の一つである「可能性」と conseguir の意味の一つである「達成」も分類基準として立てた。更に「能力」を「知識」と「技能」に分け、金(2006)を参考に「許容」を加えることとした。以上 7 つの分類基準とその説明を以下の表にまとめる。

表 2: 可能の用法の分類基準

状況	外的状況が許すために、その動作・状態の実現が可能である場合。或いは外的状況に必要な条件が整っていないため、その動作・状態を実現できない場合。
許可／禁止	社会的な取り決め(法律・習慣・道徳・規則など)や、権限を持つ人によってその動作・状態を実現することが可能である場合(許可)、あるいは不可能である場合(禁止)。
許容	状況等によって自分自身のある行動の実現が可能で、それを自身で容認する場合。
可能性	あることが実現される条件がそれを妨げる条件よりも優勢であることが確認されている場合。
知識	主体が持つ知識によって、ある動作・状態を実現することが可能である場合。あるいはその知識がないため、実現することができない場合。
技能	主体の持つ技能によって、ある動作・状態を実現することが可能である場合。あるいはその技能がないため、実現することができない場合。
達成	能力や状況が揃っているだけではなく、主体が自身の努力を加えることで初めてその動作を成し遂げることが出来る場合。

本調査の結果、poder, conseguir, saber の各動詞を使った例文は、3 冊から計 388 例みつけた。意味分類の内訳は以下の表のとおりである。

表 3: 得られた poder, conseguir, saber の用法別用例数

	状況	達成	可能性	技能	知識	許容	許可／禁止	その他	計
poder	109	57	39	12	9	21	19	11	277
conseguir	5	54		5	1			1	66
saber		3		20	22				45
計	114	114	39	37	32	21	19	12	388

4.2. poder, conseguir, saber と dar の互換性に関する調査(調査 III)

poder, conseguir, saber の 3 動詞と dar の互換性に関して調べるため、調査 II で得られた 388 の例から、人称・時制・用法を考慮して 57 例を選び出し、インフォーマント⁵ 3 人にアンケート調査を行った。例文は、後続する動詞・活用形・主語を基準に選び出した。以下の表 4 に、調査対象の 57 例の用法別内訳を示す。なお、空欄は 0 を表わす。

表 4: 調査 III: 調査対象の用法と用例数の内訳

	poder	conseguir	saber	計
達成	8	6	2	16
可能性	9			9
状況	7	1		8
技能	2	1	4	7
知識	1	1	5	7
許容	5			5
許可・禁止	5			5
計	37	9	11	57

アンケートでは、57 文のうちの poder, conseguir, saber の各動詞を筆者が dar に置き換え、変えた文の意味が通じるか・変わらないかを聞いた。回答としては、以下のように A, B, C, D の 4 択を設け、B と C の場合は理由を記述してもらった。

- A: 文法的に正しく意味も変わらない。
 B: 文法的には正しいが意味が異なる。→どのように意味が異なりますか。
 C: 文法的に正しく意味も変わらないが自分では使わない。→どうしてですか。
 D: 文法的に誤りで意味もなさない。

結果を以下の表にまとめる。縦の欄が用法、横の欄が A~D の回答を表わしており、パーセンテージはそれぞれ各用法の用例数全体に占める割合を示している。表中最も数が多かった選択肢を網掛けした。

表 5: dar との互換性調査: 意味用法別結果

	A		B		C		D		無回答		計	
達成	32	(65%)	6	(13%)	6	(13%)	4	(9%)			48	(100%)
状況	23	(77%)	1	(3%)	3	(10%)	3	(10%)			30	(100%)
可能性	10	(48%)	3	(14%)	4	(19%)	4	(19%)			21	(100%)
技能	9	(43%)	5	(24%)	2	(9%)	4	(19%)	1	(5%)	21	(100%)
知識	6	(29%)	12	(57%)	1	(5%)			2	(9%)	21	(100%)
許容／提案	10	(67%)	4	(26%)					1	(7%)	15	(100%)
許可／禁止	6	(40%)	7	(46%)	1	(7%)			1	(7%)	15	(100%)
計	96	(56%)	38	(22%)	17	(10%)	15	(9%)	5	(3%)	171	(100%)

⁵ インフォーマントの情報を以下に記す。

インフォーマント S・男性・44 歳・パラナ州出身・大学教授／インフォーマント V・女性・50 歳・サンパウロ州出身・大学非常勤講師／インフォーマント Y・男性・24 歳・サンパウロ州出身・大学院生

まず用法別に見ると、「達成」「状況」「許容／提案」の用法は **dar** との互換性が高いということが分かる。一方、「知識」の用法は **dar** との置き換えが難しいということがわかった。

表 6: 調査 III まとめ: 動詞別

	A		B		C		D		無回答		計	
poder	69	(62%)	16	(14%)	13	(12%)	11	(10%)	2	(2%)	111	(100%)
conseguir	21	(78%)	2	(7%)	1	(4%)	1	(4%)	2	(7%)	27	(100%)
saber	6	(18%)	20	(61%)	3	(9%)	3	(9%)	1	(3%)	33	(100%)
計	96	(56%)	3	(22%)	17	(10%)	15	(9%)	5	(3%)	171	(100%)

次に動詞別に見ると、**poder** と **conseguir** の互換性は高いが、**saber** は **dar** と置き換えることは難しいことが分かった。**saber** は知識による可能を多く表わすが、**dar** は広くそれ以外の可能の要素も表わすため、多くの場合 **saber** とは置き換えられないと判断される。

統語的な面では、有生の主語が **dar** の前に来ると可能の意味を表わさないことが確認された。さらに、**dar** は従属節で使われる際、主文の主語と対応している場合でなければ使えず、ゆえに目的語を修飾する従属節においては使うのは難しいということがわかった。後続する動詞については、コピュラ動詞が **dar** に続く場合、分詞が置かれて受動態などを表わす場合は互換できるが、名詞や形容詞が後置される場合は許容度が低かった。

4.3. poder, conseguir, saber の動詞間の互換性の調査(調査 IV)

poder, conseguir, saber の動詞間の互換性に関して調べるため、調査 III で用いた 57 例から、**poder** のみの用法であった 3 用法以外の状況・知識・技能・達成の用例を計 38 例選び出し、インフォーマント⁶ 3 人にアンケート調査を行った。アンケートでは、各動詞が使われた 38 文の動詞部分を筆者がそれ以外の 2 つの動詞に置き換えて(状況の場合は、調査 II で **saber** の用例が見られなかったため、**saber** には置き換えなかった)、意味が変わらないかを聞いた。回答は A, B, C の 3 択で、文法的に正しく意味も変わらない場合は A、文法的には正しいが意味が異なる場合は B、意味をなさない場合は C を解答用紙にマークしてもらった。また、B の場合はどのように意味が異なるかも記述してもらった。調査した用例の内訳を以下に示す。

表 7: 調査 IV: 調査対象の用法と用例数の内訳

	poder	conseguir	saber	計
達成	8	6	2	16
状況	7	1	0	8
技能	2	1	4	7
知識	1	1	5	7
計	18	9	11	38

⁶ インフォーマントは、前述したインフォーマント V と Y の他に、以下の方をお願いした。
インフォーマント Z・女性・25 歳・パラナ州出身・大学生

結果を以下の表にまとめる。括弧に入れた結果は、用例数が2例以下と少ないため、参考として示すものである。

表 8: poder, conseguir, saber の間の互換性調査結果

	達成	状況	技能	知識
poder→conseguir	○	×	(△)	(△)
poder→saber	×	／	(×)	(△)
conseguir→poder	△	(○)	(○)	(○)
conseguir→saber	×	／	(○)	(○)
saber→poder	(○)	／	△	△
saber→conseguir	(○)	／	○	△

結果を見ると、「達成」に関しては、conseguir 以外の動詞で表わされたものは conseguir に置き換えられるが、conseguir で表わされた「達成」を他の2動詞への置き換えることは難しいといえる。また、調査 II でも saber による「達成」は非常に用例数が少なかったが、調査 IV の結果でも saber で「達成」を表わすのは難しいということが確認された。一方、こちらも調査 II で見られたように、「状況」を表わす場合では conseguir を使わない傾向が見られた。

「技能」・「知識」に関しては、saber と conseguir の互換性は saber と poder の互換性よりも高いことがわかった。これは、poder による可能は状況等の外部要因によるものが多いものに対して、conseguir と saber による可能は主体自身の努力や知識・技能など個々の主体に焦点を当てていることが理由ではないかと考える。

5. まとめ

1章の最後に挙げた疑問点を再び引用し、その2点について調査を通じた考察を述べる。

- I. dar で表わされる可能の意味範囲について。
- II. poder, conseguir, saber の意味の重なる範囲について。

1点目のdarで表わされる可能の意味範囲については、調査 III で見たように、互換性があるといえる用法は「達成」「状況」「許容・提案」、ある程度は互換できるのが「可能性」「技能」「許可・禁止」、互換できるとは言えない用法が「知識」であった。動詞別にみると、poder と conseguir との互換性は高かった。

2点目の poder, conseguir, saber の意味の重なる範囲については、調査 IV で詳しく見た。poder と conseguir は「達成」、conseguir と saber は「技能」の用法で多く重なる部分があったが、今回調査した範囲では poder と saber は意味の重なる部分はあまりなかった。

今回の調査結果をもとに、4動詞の意味範囲を図にして以下に示す。

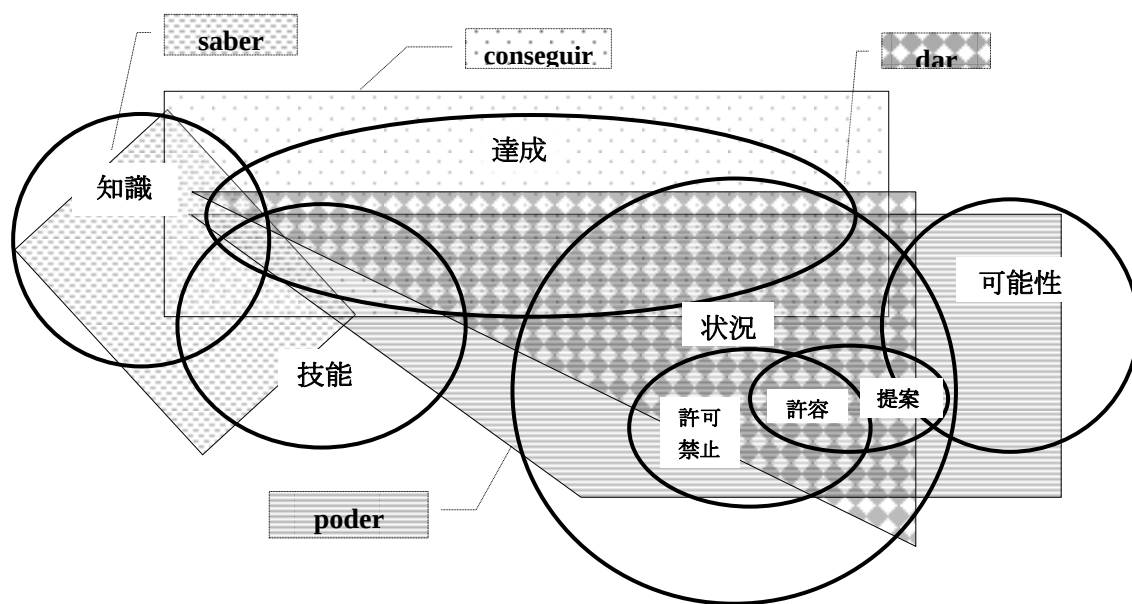


図 1: 可能の意味範囲(円形) と各動詞の表わす意味範囲(網掛け四角形)

以上が筆者の提案する、4 動詞の表わす可能の意味範囲と各動詞の相関関係である。円形がそれぞれ可能の意味範囲を表わし、各動詞の表わす範囲を網掛けされた図形で示した。

6. 今後の課題

今回は4つの調査を行ったが、それぞれインフォーマントが少なかったため、今後はインフォーマントの数を増やし、更に信頼できるデータを集める必要がある。

可能表現一般に関しては、渋谷(1993)の定義する実現可能・潜在可能についても調査できればよかった。今回は動詞による可能表現を調べたが、形容詞による可能表現についても調査し、意味範囲の違いを見るのも興味深いだろう。dar に関しては口語表現であり、世代差・地域差・社会階級によって意味範囲が異なってくる可能性が十分考えられ、今後更に研究を続ける価値があると考えられる。

略号一覧

1, 2, 3	人称	IMPF	不完全	PLUP	大過去	REL	関係詞
AUGM	増大辞	INF	不定詞	PRES	現在	SG	単数
DIM	縮小辞	INTJ	間投詞	PRON	代名詞	SUB	接続法
FUT	未来	NEG	否定詞	PST	過去		
GEM	分詞	PL	複数	REFL	再帰		

参考文献

- 金京淑(2006)「日中朝の可能表現に関する対照研究--許可・許容の意味を中心に」『北海道大学大学院文学研究科研究論集』 6: 195-206
- 渋谷勝己(1993)「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』 33(1): i-262
- Perini, Mário A. (2002) *Modern Portuguese. A Reference Grammar*. New Haven: Yale University Press
- Takeda, Chika, Naotoshi Kurosawa and Ronald Polito (2004a) *MAR E SOL Curso Básico de Língua Portuguesa Volume I*. edição revista e aumentada. Tokyo: Curso de Estudos Luso-brasileiros da Universidade de Estudos Estrangeiros de Tóquio
- _____(2004b) *MAR E SOL Curso Básico de Língua Portuguesa Volume II*. edição revista e aumentada. Tokyo: Curso de Estudos Luso-brasileiros da Universidade de Estudos Estrangeiros de Tóquio

参考資料

- 池上岑夫・金七紀男・高橋都彦・富野幹雄・武田千香編(2005)『現代ポルトガル語辞典(改訂版)』 東京: 白水社

調査資料・コーパス

- サン・テグジュペリ(1962)『星の王子さま』 東京: 岩波書店 内藤濯訳
- ジョルジュ・アマード(1996)『果てなき大地』 東京: 新潮社 武田千香訳
- パウロ・コエーリョ(1994)『アルケミスト 夢を旅した少年』 東京: 地勇社 山川紘矢・亜希子訳
- Amado, Jorge (1966) *Terras do Sem Fim*. São Paulo: Livraria Martins Editora
- Coelho, Paulo (1995) *O Alquimista*. Rio de Janeiro: Rocco
- Saint-Exupéry, Antoine de (2006) *O Pequeno Príncipe*. Rio de Janeiro: Editora Nova Fronteira
- Corpus do Português <http://www.corpusdoportugues.org> (最終閲覧日: 2012 年 1 月 3 日)

ベトナム語の《動詞+目的語/(ϕ)+方向動詞 lại》

山本 一八

(東南アジア課程 ベトナム語専攻)

キーワード：ベトナム語、動詞、方向動詞

0. はじめに

ベトナム語¹には《動詞²+目的語/(ϕ)³+方向動詞》の形をもつ構文がある。その構文中で用いられる方向動詞は ra「出る」、lên「登る」、đi「行く」、lại「来る」の四つに限られている。ここでは、本動詞としての使用がほとんどなく、最も文法化が進んでいると考えられる lại「来る」に着目し、その意味と用法を網羅的に調査する。なおことわりのない限り、例文番号、例文、太字、網掛けは発表者によるものであり、例文はハノイ出身のネイティヴの方のチェックを経ている。

1. 先行研究

卒論本体では Thompson (1965)、川口・春日編(1995)、川口編(1998)、Đặng et al. (2005)、Đoàn et al. (2009)を取り上げたが、ここでは紙面の都合上特に重要な Thompson (1965)および Đặng et al. (2005)の《動詞+目的語/(ϕ)+方向動詞 lại》に関連する記述部分のみ示す。

1.1. Thompson (1965)

Thompson (1965)は動詞に後置する語についての節で、動詞に後置する lại について(i) 繰り返し返し、(ii) 継続の二つの用法を挙げている。

- (1) Anh nói lại, tôi không nghe rõ.

2.SG.M 言う lại 1.SG NEG 聞く はっきり

もう一度言ってください。よく聞こえませんでした。

(Thompson 1965: 232)

- (2) Lúc bạn tôi ra Hà-Nội tôi ở lại Sài-Gòn làm-việc.

時 2.SG 1.SG 出る PRN 1.SG いる lại PRN 仕事する

私の友達がハノイに行った時私はサイゴンで仕事していた。 (Thompson 1965: 232)

¹ ベトナム社会主義共和国において総人口の約 87%を占める京族（キン族）の母語。ベトナムを中心に 7000 万以上の話者がいる。オーストロアジア語族に属するとされ、典型的な孤立語である。北方方言・中部方言・南方方言の三つに大別される。北部・中部方言で 6 声調、南方方言で 5 声調の区別がある。標準語とされているハノイ方言は北方方言に分類される。

² ベトナム語の動詞を Cao (1998)に拠り形容詞も含めて定義する。Cao (1998)はその根拠として、動詞と形容詞の統語的役割の近似性を挙げている。なお Cao (1998)によるとベトナム語の動詞は「動的動詞(動作動詞)」と「静的動詞(状態動詞)」に分けられる。

³ (ϕ)は目的語がない場合を指す。

1. 2. Đặng et al. (2005)

Đặng et al. (2005) は方向動詞 lại を本動詞的なものと、その他の用法の二つに大別したうえで以下のように記述している。

表 1: 越英辞書による本動詞以外の lại の意味

lại	(a) 繰り返し
本動詞	Phải làm lại thôi, như-thể này không được.
以外	OBL する lại ただ ~の様 この NEG 良い 「もう一回しなければならない。こんな風では駄目だ。」
	(b) 反対に、お互いに
	Đánh nó thì nó đánh lại.
	叩く 3.SG CONJ 3.SG 叩く lại 「彼を叩くと、彼は叩き返す。」
	Giúp người thì người lại giúp mình.
	助ける 人 CONJ 人 lại 助ける 1.SG 「人を助けると人に助けてもらえる。」
	(c) 動詞の整然さ、狭まりを強調
	Gập tờ-báo lại cho vào cặp.
	畳む新聞紙 lại 使役 入れる 鞆 「新聞紙を畳んで鞆に入れる。」
	(d) 停止へと向かう
	Hãm xe lại.
	ブレーキをかける 車 lại 「車にブレーキをかける。」

(Đặng et al. 2005: 625 を参考に発表者が作成)

(a)～(d)は主に動詞に後置する方向動詞 lại を扱っているが、(b)で示されている第2例(斜自体で表示した部分)は動詞に前置する lại であり、接続の異なる lại が同じ用法として挙げられていることが問題だと言える。

2. 先行研究のまとめと仮説

2. 1. 先行研究のまとめ

先行研究は「減少・停止」、「継続」、「繰り返し」、「収縮」、「逆方向」の5つの例を挙げている。しかし、lại の方向性の有無が指摘されていないことや、接続の異なるものを同時に挙げているなどの問題がある。また、動詞と形容詞を区別しているか否かの違いもある。

2. 2. 仮説

先行研究を統合的に判断した結果、《動詞+目的語/(ϕ)+方向動詞 lại》の表現には方向性の有無により大別したうえで、以下のように5つにまとめられると判断した。

表 2: lại の用法に関する仮説

方向性の有無	方向動詞 lại によって付加される意味	例文番号
方向性あり	(i) 本動詞的用法	(3)
	(ii) 以前と動作が逆方向	(4)
	(iii) 収縮・減少の方向性	(5)
方向性なし	(iv) 動作・状態の継続、結果の強調	(6)
	(v) 動作の繰り返し	(7)

- (3) Đường này nhiều người đi lại.
道 この 多くの 人 行く lại
(動詞本来の意味が付加)：この道は大勢が行き来する。
- (4) Nó đã trả tiền lại.
3.SG PRF 返す 金 lại
(以前の方向と比較して逆)：彼はお金を返してよこした。
- (5) Phòng này hẹp lại.
部屋 この 狭い lại
(収縮・狭窄の意味の追加)：この部屋は狭くなってきている。
- (6) Nó nhớ lại.
3.SG 思い出す lại
(動作の結果が強調)：彼は思い出した。
- (7) Nó nghĩ lại (một) lần nữa.
3.SG 考える lại (1) 回 また
(繰り返し)：彼はもう一度考えた。

3. テキストからの調査

上記の仮説を確かめるべくテキストからの調査を行った。本稿で用いた調査対象はベトナムの作家 Nhất Linh⁴ による著作 *Giòng sông Thanh Thủy* (1961)⁵ であり、第一章から第三十八章までの約 9 万 4 千語を対象とした。本文中から《動詞＋目的語/(*phi*)＋方向動詞 lại》の例文を抽出した。結果 lại と共起した動詞は延べ語数で 341 例、異なり語数で 89 例であった。抽出された動詞は方向性の有無で 2 つに分けた上で、表 3 で示した 5 つの用法へと分類した。結果、延べ語数 301、異なり語数 72 の動詞が分類された。なお、複数例が上がった動詞も、基本的に用例は一つであると判断できたが、nói 「言う」は、「以前と逆方向の動作」および「動作の繰り返し」の二つの用例があり、二次数えられているため異なり語数の総計は 73 となっている。以下に抽出された動詞の分類とそれぞれの典型的例文を挙

⁴ ベトナムの政治家・作家(1906-1963)。ベトナム北部生まれ。1927 年から 1930 年までフランスに留学。帰国後、国民文学を志し「自力文団」を結成。中心人物として活動した。

⁵ Nhất Linh の晩年の長編小説『タイントゥイー河の流れ』。第二次世界大戦後のベトナム北部地域の農村を舞台に知識人の苦悩と葛藤を描いた作品。

げる。

表 3: 抽出された動詞の分類

用法	動詞 【動詞「意味」(出現回数)】のように表示	延べ 語数	異なり 語数
(i) 本動詞的 用法	trở「戻る」(23)、đi「行く」(15)、qua「過ぎる」(15)、quay-trở 「帰る」(2)、sang「渡る」、vọng「聞こえる」	57	6
(ii) 以前と動 作が逆方向	quay「回す」(23)、đáp「答える」(15)、trả「返す」(5)、ngoái 「回す」(3)、ngược「反対の」(2)、tiến「進む」(2)、bắn 「つ」、bước「進む」、cãi「口論する」、chống「反抗する」、 chống-cự「対抗する」、gửi「送る」、nói「言う」、nói-đùa 「冗談を言う」、xích「移動する」	58	15
(iii) 収縮・減 少の方向性	ngừng「止まる」(27)、dừng「止まる」(5)、nhắm「閉じる」 (5)、chậm「遅い」(4)、bịt「閉じる」(3)、cau「顰める」 (2)、đỗ「止める」(2)、gói「つつむ」(2)、chặt「きつい」、 gấp「たたむ」、ngăn-chàng「止まる」、nheo「眉間に皺を 寄せる」、quây-quần「集まる」、tròn「丸める」	55	14
(iv) 動作・状 態の継続、結 果強調	ở「いる・ある」(24)、nhớ「思い出す」(17)、còn「ある・ 残る」(13)、đứng「立つ」(11)、giữ「保つ」(6)、để「残し ておく」(3)、nghỉ「休む」(3)、gác「棚上げする」(2)、ngủ 「寝る」(2)、rỗng「空の」、rộng「広い」、sót「取り残す」	84	12
(v) 動作の繰 り返し	nhìn「見る」(7)、gặp「会う」(5)、cản「邪魔する」(3)、lấy 「取る」(3)、thăm「訪問する」(3)、yêu「愛する」(3)、nghĩ 「考える」(2)、thấy「見る」(2)、xem「見る」(2)、bói「占 う」、chạy「走る」、chiếm「占領する」、dọn「掃除する」、 đọc「読む」、đổi「交換する」、ghi「書く」、giảng「説明す る」、hát「歌う」、hỏi「尋ねる」、in「印刷する」、ngâm「吟 ずる」、nghe「聞く」、nhắc「繰り返す」、nhảy「踊る」、nói 「言う」thổi「風が吹く」	47	26
計		301	73

(i) 本動詞的用法

大多数が「移動」に関連したものだが vọng「聞こえる」のみは「知覚」の類であった。

(8) Khi trở lại Mông-Tútôi sẽ báo-cao...

時 帰る lại PRN 1.SG FUT 報告

「モントゥに帰る時、私は報告するつもりで…」

- (9) ... có tiếng người vọng lại.
ある 声 人 聞こえる lại 「…人の声が聞こえてきた。」

(ii) 以前と動作が逆方向

多くの動詞が「やりとり」に関連する動詞である。また、ngoài「回す」や quay「回す」のように方向性の定まっていない動作に方向性を付与することもある。静的動詞(形容詞)に関しては唯一 ngược「反対の」が上がった。

- (10) Ngọc quay lại hỏi.
PSN 回す lại 尋ねる 「ゴックは振り返って尋ねた。」

- (11) ... chú làm được ngược lại...
2.SG.M する できる 反対 lại 「…あなたは逆にすることができて…」

(iii) 減少・収縮の方向性

「止まる」などの停止に向かう動詞や、減少や収縮に関連する動詞が収集された。

- (12) Xe ngừng lại...
車 止まる lại 「車が止まって…」

- (13) Mọi người quây-quần lại
PL 人 集まる lại 「人々が集まり…」

(iv) 動作・状態の継続、結果強調

Cao (1998)にある「静的動詞(形容詞)」が多く抽出された。

- (14) Tôi còn phải ở lại đây.
1.SG まだ OBL いる lại ここ 「私はまだここにいなければならない。」

- (15) ... tiền thì để lại rồi...
お金 TM 残す lại PRF 「…お金は残してあり…」

(v) 動作の繰り返し

動作の繰り返しに関しては広く、様々な意味をもつ動詞が抽出された。

- (16) Hôm-quà tôi thức mình bói lại lần nữa...
昨日 1.SG 起こす 自分 占う lại 回 また
「昨日私は起きてまた占ってみたところ…」

- (17) Tôi nhắc lại.
1.SG 繰り返す lại 「私は繰り返した。」

以下の動詞(延べ語数: 40、異なり語数: 18)は分類を保留した。

表 4: 分類できなかった動詞一覧表

đóng 「閉じる」(5)、kể 「語る」(5)、tái 「青ざめた」(5)、ngồi 「座る」(4)、sửa 「修理する」(3)、hoãn 「延期する」(2)、lùi 「後ずさりする」(2)、mua 「買う」(2)、sống 「生きる」(2)、thắt 「結ぶ」(2)、chụm 「合わせる」、đan 「織る」、đen 「黒い」、tái-xanh 「青ざめた」、tối 「暗い」、túm 「握る」、vẽ-chép 「真似して描く」、xếp 「整える」

4. アンケート調査

表 4 で挙げた未分類の《動詞+目的語/(ϕ)+方向動詞 lại》の分類を試みるために、アンケート調査を行った。

4.1. インフォーマントの選定

文献調査で用いたテキストの作者が言語形成期をベトナム北部で過ごしていることを考慮して、言語形成期をベトナム北部地方で過ごしたベトナム語母語話者を対象に、面接方式でアンケート調査を行った。インフォーマントの情報は以下のとおりである。

インフォーマント A: 1960 年生まれ、ハノイ出身、女性

インフォーマント B: 1960 年生まれ、ハノイ出身、男性

4.2. アンケート結果

アンケート調査ではテキスト調査で抽出された未分類の例文を 5 つの用例のいずれに分類するかを調査した。以下に両者の意見が一致した 14 の動詞を表にして示す。

表 5: インフォーマントによる動詞の分類

動詞の用法	分類された動詞
(i) 本動詞的用法	例なし
(ii) 以前と動作が逆方向	hoãn 「延期する」、lùi 「後ずさりする」
(iii) 収縮・減少の方向性	chụm 「合わせる」、thắt 「結ぶ」、túm 「握る」
(iv) 動作・状態の継続、結果強調	đen 「黒い」、đóng 「閉める」、ngồi 「座る」、tái 「青い」、tái-xanh 「青ざめた」、tối 「暗い」
(v) 動作の繰り返し	kể 「語る」、mua 「買う」、vẽ-chép 「真似して描く」

4.3. 例外に対する考察

インフォーマントによる調査では以下に示した 4 つの動詞に関して、インフォーマントは似通った用法だとしながらも分類に迷い、さらに両者の意見が異なった。

(18) Lúc rồi chàng đem đan lại mấy đôi hài-sáo...

時 暇な 3.SG.M もつ 編む lại 幾つか 対 草履

「暇な時、彼は何対かの草履をもって編み…」

(19) ...lạy Trời-Phật phù-hộ cho ông sống lại.

願う 仏様 加護する ～に 3.SG.M 生きる lại

…仏様、どうか彼を生き返らせるように加護を与えてください。

(20) ...sửa lại chỗ tóc...

直す lại 場所 髪

「…髪の毛の場所を治して…」

(21) ...xuống xếp lại phòng khám-bệnh...

下りる 整える lại 部屋 診察

「…下りて診察室を整えて…」

表 6: インフォーマントによる結果の差異

インフォーマント	インフォーマント A	インフォーマント B
分類	分類不可能	?? 結果の強調
意味	「本来あるべき姿になった」という回帰的な意味	「元の状態、あるいはあるべき状態にした/なった」という結果強調

両者の分類は異なっているが、「あるべき姿になった」もしくは「元の状態になった」という意味的解釈は類似的なものとなっていることが分かる。よって本稿では両者の意見を折衷する形で《動詞＋目的語/(ϕ)＋方向動詞 lại》の第六番目の用法として「元の状態、あるいはあるべき姿になる/するという回帰的意味」を立てる。また、この「回帰的意味」においては lại の方向性が保持されていると考えられる。

5. 《動詞＋目的語/(ϕ)＋方向動詞 lại》のまとめ

今回の文献調査およびアンケート調査で明らかになったことは以下のとおりである。

・《動詞＋目的語/(ϕ)＋方向動詞 lại》の構造をもつ文において方向動詞 lại のもたらす意味は、lại の方向性の有無で大きく二つに大別される。

・ lại に方向性がある場合は以下の四つに分類できる。

- ①本動詞的用法、すなわち「来る」の意味の追加
- ②以前と逆方向に動作が行われていることを示す
- ③収縮・減少の方向性を示す
- ④元の状態、ないしあるべき状態になる/するという回帰的意味

・ *lại* に方向性がない場合は以下の二つの用例に分類できる。

- ①動作状態の継続もしくは結果の強調
- ②動作の繰り返し

6. 今後の課題

本稿では《動詞＋目的語/(*phi*)＋方向動詞 *lại*》に注目して考察を行ったが、テキストによる調査では動的動詞が圧倒的多数を占め静的動詞(形容詞)が少ないなど、語彙に偏りが出てしまったことは否めない。また、テキストによる調査で用いた資料は 1961 年の作品であり、今現在のベトナム語との隔たりが少なからずあることも問題である。また、本稿では方向動詞 *lại* のみに注目したが、他の方向動詞を含めてより広く、《動詞＋目的語/(*phi*)＋方向動詞》の構造をもつ文の意味・用法を調べていく必要があるといえる。

略号一覧

CONJ	Conjunction	接続詞	PRF	Perfect	完了
FUT	Future	未来	PRN	Proper Noun	固有名詞
M	Male	男性	PSN	Personal Name	人名
NEG	Negative	否定	SG	Singular	単数
OBL	Obligation	義務	TM	Topic Marker	話題マーカー
PL	Plural	複数	1/2/3	1st/2nd/3rd person	1/2/3 人称

参考文献

【日本語の文献】川口健一, 春日淳編(1995)『ベトナム語文法の諸問題(II)』東京: 東京外国語大学語学教育研究協議会。/ 川口健一編(1998)『ベトナム語中級文法ノート(I)』東京: 東京外国語大学語学教育研究協議会。

【英語の文献】Thompson, Laurence C. (1965) *A Vietnamese Grammar*. Seattle: University of Washington Press. / Đặng Chấn Liêu, Lê Khả Kế and Phạm Duy Trọng (2005) *Vietnamese-English Dictionary*. Ho Chi Minh City: TP Ho Chi Minh Publishers. / Đoàn Thiện Thuật, Nguyễn Khánh Hà and Phạm, Như Quỳnh (2009) *A CONCISE VIETNAMESE GRAMMAR*. Hanoi: Thế giới Publishers.

【ベトナム語文献】Cao Xuân Hạo (1998) *TIẾNG VIỆT mấy vấn đề ngữ âm, ngữ pháp, ngữ nghĩa*. T.P.Hồ Chí Minh: Nhà xuất bản giáo dục.

調査文献

Nhất Linh (1961) *Giòng sông Thanh Thủy*

<http://www.talawas.org/talaDB/suche.php?res=8898&rb=0302> (2011 年 11 月 4 日閲覧)

東京地方の若者世代に使用される「動詞の命令形＋シ」の 意味・用法と使用実態について

山本 ちひろ
(欧米第一課程 英語専攻)

キーワード：動詞の命令形＋シ、若者世代、話し言葉、命令表現、既実現に対する命令

0. はじめに

東京在住の若者の間では、特に話し言葉において「動詞の命令形＋シ」という表現が用いられる事がある。以下に例をあげる。

例) 早く行けシ。

本稿では、「動詞の命令形＋シ」の表す意味と用法、及び使用者の年齢層、性別等について調査する。なお、特に断りのない限り、太字・下線は筆者によるものである。

1. 先行研究

「動詞の命令形＋シ」では、助詞シが用いられている。シに関しては森田 (1984) と江端 (1986) を取り上げる。森田 (1984) は「動詞の命令形＋シ」と同じく、接続助詞シで文を言い終わる言いさし表現に言及し、言外の意味を込める用法があるとしている。

山梨県周辺で使用される甲州方言¹でも、「動詞の命令形＋シ」が使用される。江端 (1986) は、甲州方言で使用される「動詞の命令形＋シ」の使用例を挙げている。

例) 行けシ。「行きなさい。」

(江端 1986: 6)

一方、「動詞の命令形＋シ」はその形式から、命令表現である可能性がある。命令表現を含む、モダリティに関する研究である仁田 (1989) は、命令表現は未実現の出来事に対してのみ使用でき、既実現の出来事に対しては使用できないとしている。

シと同じく、動詞の命令形に接続する助詞の用法に関する研究に田中 (1973) と日本記述文法研究会編 (2003) がある。田中 (1973) ではヨなどの助詞を挙げ、それぞれどのような情意が加わるか説明している。日本記述文法研究会編 (2003) は、田中 (1973) が挙げたヨの意味・用法をより詳細に説明している。

¹ 山梨県地域で使用される方言。江端 (1986) は、1973年から1976年にかけて採録された現地の聞き取り調査の資料をもとにした研究である。

2. 先行研究の問題点と調査方法

江端 (1986) が挙げた「動詞の命令形+シ」は、東京地方で用いられる「動詞の命令形+シ」と完全に一致するかどうかは不明である。本稿では表題にもある通り、東京地方で「動詞の命令形+シ」のみを調査対象にした。

仁田 (1989) は、既実現の出来事には命令が出来ないとしているが、実際の使用例を見ると、「動詞の命令形+シ」は既実現の出来事への命令が出来ると筆者は考える。後述するアンケート調査では、既実現の出来事に「動詞の命令形+シ」が使えることを確認した。

田中 (1973) が挙げたヨは、動詞の命令形に後続し、話者の感情を表すという点でシと類似している。文の形としては「動詞の命令形+ヨ」と「動詞の命令形+シ」は同一であり、ヨとシの使用範囲は重なっている可能性がある。さらに日本記述文法研究会編 (2003) によると、ヨは最も頻繁に用いられる助詞だという。そこでヨをシとの意味等の比較対象にし、アンケートを作成して調査した。

後述するアンケート調査で使ったアンケートの設問の文意に関しては、田中 (1973) が挙げた「命令形+助詞」で表される文の余情、「高圧・同調・哀願・親しみ・威圧・投げやり」を参考にした。作例時は文意をさらに細かく、親しみ・からかい・投げやり・いらだち・威圧・命令・懇願・依頼・念押し・提案とした。

2.1. 本稿における「既実現の出来事への命令」の意味

ここで、「既実現の出来事への命令」という言葉の定義をしておく。本稿での既実現の出来事とは、「動詞の命令形+シ」に含まれる動詞が表す、聞き手が既に行った動作の事を表す。よって未実現の出来事とは、聞き手がまだ実現していない動作の事を表す。

仁田 (1989) は「したな」という表現を例に挙げ、この表現は聞き手の過去の行動への命令であり、物理的に不可能な命令表現であるとした。しかし本稿では既実現の出来事への命令の意味を広く捉え、過去の行動を受けてこれからの行動を命令する場合でも「既実現の出来事への命令」とした。

3. 調査

3.1. アンケート調査

3.1.1. 調査概要

「動詞の命令形+シ」が、若年層に実際に使用されているか、使用する際話者はどのような感情を持っているか、既実現の行動・未実現の行動のどちらに対して使われる傾向があるか等を調査するため、高校三年生を対象にアンケート調査を行った。インフォーマント選出時、留意したのは以下の二点である。

(a) 山手² 方面に居住するか、あるいは生活圏を持っている。

(b) 言語形成期を東京都内で過ごしている。

この基準をもとに、東京都立一橋高等学校³ (東京都千代田区) 及び東京都立三田高等学

² 東京の区部の内、西部に位置する、本郷・小石川・牛込・四谷・赤坂・青山・麻布などの地域を指す。

校（東京都港区）の3年生を選出した。インフォーマントの情報は紙幅の都合上割愛した。
アンケートの設問は次のような形式にした。

（友人に対して、家に入るよう勧める）

- (1) おい、あが {
れ。
れよ。
れし。

自由記述欄

回答者には選択肢から、最も自然と思えるものを◎、次に自然と思えるものを○で選んでもらった。◎は一つの設問につき、最低一つを選択肢に付けてもらった。○の個数は実際の個数を 0.5 倍して結果に反映させた。設問は全部で 16 問設定した。以下に作成した設問を示す。

親しみ / 未実現

（友人に対して、家に入るよう勧める）

- (1) おい、あが {
れ。 ()
れよ。 ()
れし。 ()

威圧 / 未実現

- (2) 考えても見 {
ろ。 ()
ろよ。 ()
ろし。 ()

懇願・依頼 / 既実現

（相手に頼みごとをしたが断られたので、
どうしてもと懇願して）

- (3) そう言う {
な。 ()
なよ。 ()
なし。 ()

命令・依頼 / 未実現

- (4) 明日は早く起き {
ろ。 ()
ろよ。 ()
ろし。 ()

命令・威圧 / 未実現

- (5) 三時までに駅に来 {
い。 ()
いよ。 ()
いし。 ()

念押し / 未実現

(6) (そそっかしい人に対して言い含
るつもりで)

- 運ぶ途中で壊さないようにし {
ろ。 ()
ろよ。 ()
ろし。 ()

³ 一つの学年に定時制（午前・午後・夜間の三部）と通信制の二つが存在するが、今回は東京出身の対象者を狙いとするため、定時制の生徒を対象とした。

投げやり / 既実現

(7) (自分勝手な人に対して、呆れて)

勝手にし $\left\{ \begin{array}{l} \text{ろ。 ()} \\ \text{ろよ。 ()} \\ \text{ろし。 ()} \end{array} \right.$

いらだち / 既実現

(8) (急いでいるのに、なかなか進まない行列に並んでいて)

早く行 $\left\{ \begin{array}{l} \text{け。 ()} \\ \text{けよ。 ()} \\ \text{けし。 ()} \end{array} \right.$

親しみ / 未実現

(9) (出かける友人に対して)

気をつけ $\left\{ \begin{array}{l} \text{ろ。 ()} \\ \text{ろよ。 ()} \\ \text{ろし。 ()} \end{array} \right.$

親しみ / 既実現

(10) (目の前で転んでしまった友人に対して、からかうつもりで)

いやいや、気をつけ $\left\{ \begin{array}{l} \text{ろ。 ()} \\ \text{ろよ。 ()} \\ \text{ろし。 ()} \end{array} \right.$

提案 / 未実現

(11) (忘れ物をしてしまった相手を気遣って、自分のものを貸してあげる時)

これ、使 $\left\{ \begin{array}{l} \text{え。 ()} \\ \text{えよ。 ()} \\ \text{えし。 ()} \end{array} \right.$

威圧 / 未実現

(12) (人のものを奪おうと命令して)

おい、それ、ちょっとよこ $\left\{ \begin{array}{l} \text{せ。 ()} \\ \text{せよ。 ()} \\ \text{せし。 ()} \end{array} \right.$

強い親しみ / 未実現

(13) (電話で、相手から「待ち合わせに遅れる、本当にごめん」と連絡があり、気にしていないことを伝えようとして)

まあ、焦らないでいいから

ゆっくり来 $\left\{ \begin{array}{l} \text{い。 ()} \\ \text{いよ。 ()} \\ \text{いし。 ()} \end{array} \right.$

強いいらだち / 既実現

(14) (相手に質問をされ、丁寧に答えてあげたが、数分後に全く同じ質問をしてきた)

ちゃんと聞 $\left\{ \begin{array}{l} \text{け。 ()} \\ \text{けよ。 ()} \\ \text{けし。 ()} \end{array} \right.$

親しみ・提案 / 未実現

(15) (相手を遊びに誘う)

お前もこっちに来て遊

{	べ。	()
	べよ。	()
	べし。	()

親しみ・からかい / 既実現

(16) (一緒に文化祭の準備をしている相手が不器用だったので、可笑しくて)

もっときれいに貼

{	れ。	()
	れよ。	()
	れし。	()

3.1.2. 調査結果

得られた結果を男女別のグラフで示す。アンケートは横軸が設問番号、縦軸が回答数である。設問ごとに、文末が命令形で終わるもの、「動詞の命令形+ヨ」で終わるもの、「動詞の命令形+シ」で終わるものの3つの回答数をまとめて示した。

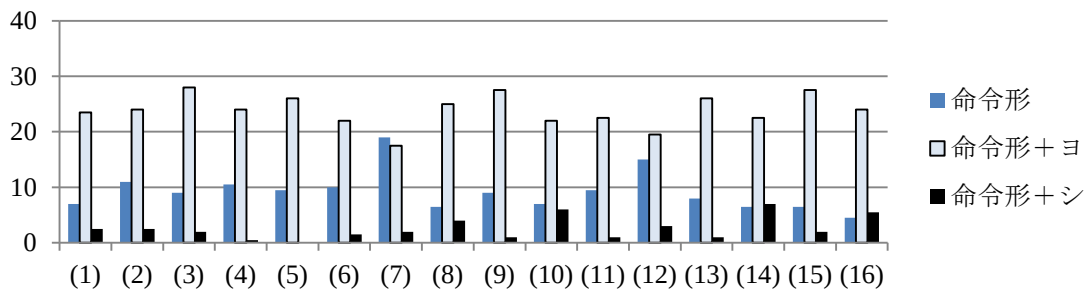


図 1a: 東京都立一橋高等学校でのアンケート調査結果 (男性)

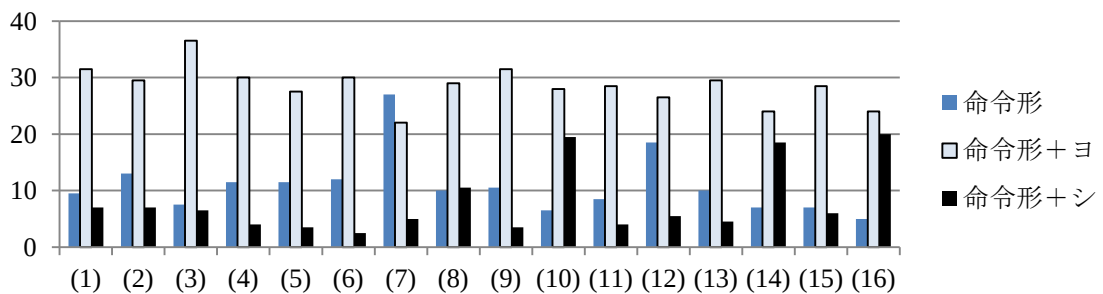


図 1b: 東京都立一橋高等学校でのアンケート調査結果 (女性)

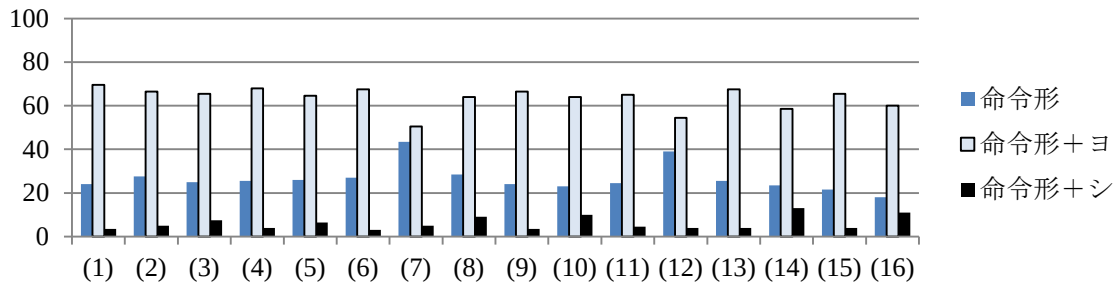


図 2a: 東京都立三田高等学校でのアンケート調査結果 (男性)

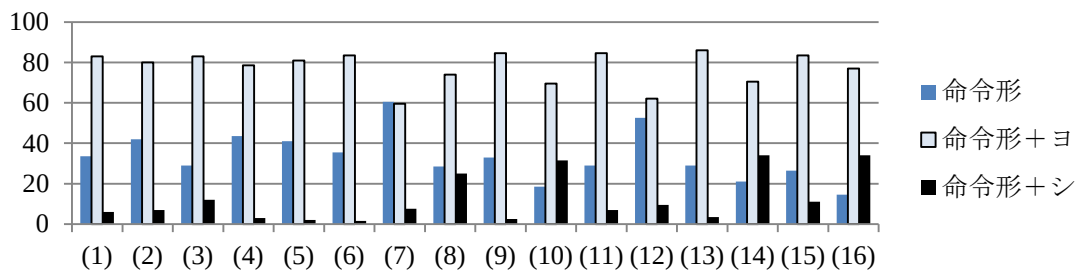


図 2b: 東京都立三田高等学校でのアンケート調査結果 (女性)

図 1、図 2 の回答数は、紙幅の関係上割愛した。「動詞の命令形+シ」はほぼ全ての設問で選択されており、この表現は通常の会話表現として使用されている可能性がある。

「動詞の命令形+シ」が自然な表現であると答えた回答数を男女間で比べると、設問 (1) や (16) では女性の回答数が男性の約 2 倍であった。このように、回答数における男女差が他の設問でも多く見られ、特に女性が「動詞の命令形+シ」を使用する頻度が高かった。

また男性、女性とも、設問 (8)・(10)・(14)・(16) で「動詞の命令形+シ」を選ぶ割合が高くなっている。いずれの設問も、既実現の出来事に言及して「動詞の命令形+シ」が使われている一方、文意はバラバラで統一性が見られない。よって、これら四問と他の設問との差は、言及している事態が既実現か未実現かによるものと予想される。

3.2. インフォーマントからの聞き取り調査

3.2.1. 調査概要

「動詞の命令形+シ」を使用する世代を調査するため、大学生に対し聞き取り調査を行った。まず 3.1.1. で用いたアンケートに最後まで回答してもらい、続いて「動詞の命令形+シ」に◎又は○をつけた設問の話者の感情等を質問するという方法を取った。

なお、女性の話し言葉では動詞の命令形で終わる表現や「動詞の命令形+ヨ」はあまり使用されず、「動詞+テ (ヨ)」などの文末表現が使用されることが多い。そのため今回のアンケートの選択肢では女性が回答しづらい可能性があった。この調査では女性も回答し易い様、「動詞+テ (ヨ)」も選択肢として示し、「動詞の命令形+シ」と「動詞+テ (ヨ)」のどちらを選ぶかも調査した。インフォーマント選出に当たっては、東京都出身であり、

言語形成期を東京都で過ごしている 20～22 歳の協力者を選んだ。

表 1: インフォーマント調査フェイスシート

略称	性別	年齢	居住地	調査地
A	女	22	東京: あきる野市	東京
B	男	21	東京: 大田区	
C	男	20	東京: 文京区	
D	女	20	東京: 板橋区	

3. 2. 2. 調査結果

「動詞の命令形＋シ」が使える文脈として各インフォーマントの回答が集中したのは (8)・(10)・(16) だった。話者の感情に関しては、「いらいらしている」という回答が多く得られた。「動詞の命令形＋シ」という表現を使う場合は「行列」に対して発話したり、独り言として発話したりする表現で、相手に直接発する命令には用いないという結果を得た。話者の年齢層についての内省では、A～D 全て「若い世代が使う表現である」と回答した。

4. アンケート調査及びインフォーマント調査からの考察

インフォーマント調査では、独白としてこの表現を使用するという回答があった。これに関しては、アンケート調査でもインフォーマント調査でも、独白と捉えられる (8) は「動詞の命令形＋シ」が自然であるという回答が多かった。

聞き手の動作が既実現か未実現かに関してはアンケート調査でもインフォーマント調査においても、既実現の出来事に対し「動詞の命令形＋シ」が多く使用されるようである。からかったり、茶化したりする意味があるとした回答は、この表現が既実現の出来事に対して頻繁に使われることと関係がある。既実現の出来事はすでに完了していて、そのことに対して命令表現を使用しても、聞き手は実行できない。「動詞の命令形＋シ」を使用する事で、相手をからかいながら「次は失敗しないように」と念を押していると予想できる。

5. まとめと今後の課題

今回の調査では、「動詞の命令形＋シ」がいだち・親愛等の情意を表す可能性がある結果を得たが、はっきりと意味を断定することはできなかった。

「動詞の命令形＋シ」の使用世代も、今回は詳しく調査出来なかった。

調査地について、今回の調査は東京に地域を限定したが、少なくとも関東には「動詞の命令形＋シ」を使用する地域が他にも見られる。調査結果には含めなかったが、栃木県で言語形成期の数年間を過ごした女性インフォーマントは、いくつかの設問で「動詞の命令形＋シ」を使うと回答した。今後は東京以外の地域の調査も必要であろう。

【参考文献】

- 江端義雄 (1986) 「方言の表現とその研究: 山梨県域方言に見られる命令表現の修辞方言学的分析を通して」 国語教育研究 30: 1-12
- 田中章夫 (1973) 「終助詞と間投助詞」 鈴木一彦・林巨樹編 (1973) 『品詞別 日本文法講座 助詞』 東京: 明治書院
- 仁田義雄 (1989) 「現代日本語文のモダリティの体系と構造」 仁田義雄・益岡隆志 (1989) 『日本語のモダリティ』 東京: くろしお出版
- 日本記述文法研究会編 (2003) 『現代日本語文法 4 第 8 部 モダリティ』 東京: くろしお出版
- 森田良行 (1984) 『基礎日本語 3』 東京: 角川書店

タイ語の方向動詞が担う意味・機能 —動詞と共起する場合—

若山 絢子

(東南アジア課程 タイ語専攻)

キーワード: タイ語、コーパス調査、方向動詞、動詞連続、アスペクト

0. はじめに

タイ語¹には6つの方向動詞があり、それらはほかの動詞に後続することで様々な意味・機能を持つとされている。卒業論文では①pay「行く」、maa「来る」がどのような種類の動詞と共起する際にアスペクト用法として用いられるのか、②?òók「出る」、khâw「入る」およびkhân「上がる」、lɔŋ「下がる」が否定辞を伴った場合の構造・意味の違いについて調査・考察を行った。本稿では卒業論文の中から、pay/maaがもつアスペクト用法を中心に上げる。なお、以下例文番号・日本語訳・グロス・下線・囲み線は筆者によるものである。

1. 先行研究

1.1. 田中(2002)

田中(2002)は方向動詞を「空間・時間の方向や程度を表す補助動詞」(田中 2002: 89)としている。田中(2002)が挙げているpay/maaの意味を以下にまとめる。

pay/maa {
・ 空間、時間の離反、接近 [シテ行ク/来ル]・・・(1)
・ 偶然や過失 [シテシマウ]・・・(2)
・ 本動詞 [シニ行ク/来ル]・・・(3)

(1) dæən càak bāan pay thŭŋ roonrian

歩く から 家 行く まで 学校 「家から学校まで歩いていく」 (田中 2002: 89)

¹ タイで共通語として使用される標準タイ語であり、タイではほぼ全国で通用する。1984年当時の話者数は約5000万人である。タイ語は、接辞を伴うことのない孤立語である。(三谷 1992: 529-545を要約)。

タイ語は〈主語＋述語動詞＋目的語＋補語〉を基本語順とし、〈被修飾＋修飾〉、〈名詞＋修飾＋数詞＋類別詞＋指示詞〉の語順で修飾する文構造である。動詞には文法範疇としてのテンスはなく、文脈状況や時間副詞などによって時制が示される(田中 2002を要約)。

本稿におけるタイ語表記は富田編(1997)にならい、以下のとおりである。

子音: n=k, ɲ=kh, ɲ=kh, ɲ=kh, ɲ=ŋ, ɲ=c, ɲ=ch, ɲ=ch, ɲ=s, ɲ=ch, ɲ=y, ɲ=d, ɲ=t, ɲ=th, ɲ=th, ɲ=th, ɲ=n, ɲ=d, ɲ=t,
ɲ=th, ɲ=th, ɲ=th, ɲ=n, ɲ=b, ɲ=p, ɲ=ph, ɲ=f, ɲ=ph, ɲ=f, ɲ=ph, ɲ=m, ɲ=y, ɲ=r, ɲ=l, ɲ=w, ɲ=s, ɲ=s, ɲ=s, ɲ=h,
ɲ=ʔ, ɲ=h

母音: i, e, ɛ, a, ɔ, o, u, ɯ, ə, ii, ee, ɛɛ, aa, ɔɔ, oo, uu, ɯu, ia, ua, ɯa, ay, aw, am

- (2) tham ɲən h ă ay pay
CAUS お金 失う 行く 「お金をなくしてしまった」 (田中 2002: 90)

- (3) pay súu burii
行く 買う タバコ 「タバコを買いに行く」 (田中 2002: 90)

田中 (2002)では、方向動詞 maa を使ったアスペクトを表す例文も取り上げていた。

- (4) tham ɲaan maa sǎam pii léew
する 仕事 来る 3 年 PRF 「3年間働いてきた」 (田中 2002: 88)

1.2. 中山(2006)

中山 (2006)によると、「してくる」「していく」がもつ用法の違いに直接的に関与している条件は「V シテ」の部分の動詞である。中山 (2006)は、「してくる」「していく」と共起し、アスペクト用法をもつ動詞を以下の5つに分類している。なお、アスペクト用法を表す動詞は何れかに属すが、属す動詞全てがアスペクト用法を持つというわけではない。

- ・移動動詞: 進展過程を表すかどうかには動詞の限界性の関係
- ・出現動詞: 全て限界動詞で、出現の具体的な方法・様態に言及
- ・消滅動詞: 終止形で用いられて具体的なものの消滅を表す
- ・変化動詞: 時間的な幅を持ってとらえられる
- ・一時的状態動詞: 以前の状態から一時的に動詞の状態に移行する

タイ語の pay/maa は、中山 (2006)がいう「していく」「してくる」に相当すると筆者は考える。

1.3. 先行研究のまとめと問題

田中 (2002)では pay/maa に関して、方向動詞が持つ意味・機能を、例を見ながらまとめられた。中山 (2006)を参考に、日本語の「してくる」「していく」が持つアスペクト用法について要約を行ったことで、アスペクト用法かどうかを決めるのは、共起する動詞の性質が重要であることが確認できた。

タイ語において、方向動詞はほかの動詞と共起した際に多くの用法を持つ。しかし、上に挙げた(4)のようなアスペクト用法であるとされている例も見受けられたことから、方向動詞が担う意味・機能は、共起する動詞の性質によって判断することが可能ではないかと筆者は考える。これは、中山 (2006)による記述からもうかがえることである。したがって、本稿では、pay/maa に関して、どのような種類の動詞と共起する際に、アスペクト用法として用いられるのかを確認する。

2. 調査方法

調査には、チュラロンコン大学言語学部によるタイ語書き言葉コーパス “Thai Concordance” を使用する。ここには本、新聞、社説、定期刊行物、公式文書、1997 年憲法、民事法・商業法、古語、インタビュー、オンラインニュースより約 77,000,000 語のテキストが収録されており、検索する際にはジャンル、地域が指定できる。短編小説ジャンルにはウェブサイト Siam Story およびタイ語小説 *sĩi phɛ̀n dìn* から 2002 年 5 月 14 に収集したデータ 797,900 語が収録されている。文脈が分かるように該当する方向動詞の前後 100 字を表示するように設定し、500 例ずつ無作為に抽出した。その後、手作業で V_1 +pay/maa となっている例を収集し、抽出した動詞を、Boonyapatipark (1983) による指標を参考にして分類を行った。

3. 調査結果と考察

3.1. pay の結果

2 節で挙げたコーパスで無作為に抽出した pay が動詞に後続した例は 236 例あり、そのうち異なり語数は 114 語であった。114 語を 1 例ずつ見ていき、用法ごとに分類を行った。その結果を以下に表で示す。

表 1: pay が共起した動詞の用法

	アスペクト	移動	程度 ²	その他	合計
1 類: 性質、特徴を表す動詞	10	3	7	4	24
2 類: 不活性の知覚動詞 ³	1	1	0	0	2
3 類: 所有、存在を表わす動詞	0	1	0	2	3
4 類: 不動の知覚動詞	1	1	0	0	2
5 類: 感覚を表わす動詞	0	1	0	2	3
6 類: 感情・態度を表わす動詞	6	0	0	0	6
7 類: 非完了の動作動詞	19	20	0	0	39
8 類: 完了の動作動詞	4	1	0	0	5
9 類: 到達を示す動作動詞	17	0	0	0	17
10 類: 瞬間的行動を示す動詞	0	5	0	0	5
11 類: 有生物主語をとる動詞	0	2	0	2	4
12 類: 両方になりうる動詞	0	1	0	1	2
13 類: 無生物主語をとる動詞	0	1	0	1	2
合計	58	37	7	12	114

² 表中の「程度用法」とは、程度が著しい様を表し、「 V_1 過ぎる」という意味を表す。

³ 2 類: 不活性の知覚、態度(原語では *inert cognition/attitude*)より心理的・感情的感覚を表わす動詞類のことである。例は、上記のほか、嫌う、信じる、尊敬する、好むなどがある。

まず初めに、pay が 6 類および 9 類の動詞と共に起した場合には、アスペクト用法のみが用いられることが分かった。以下に例を挙げる。

6 類: 感情、態度を表わす動詞

- (5) braasia thăam tuaeen nîn pay lòn patisèet mǎan koohòk phûan
 PSN 尋ねる 自身 黙る 行く 彼女 否定する 同じ 嘘を吐く 友達
 「ブラーシア自身に黙り続けるかと尋ねた。彼女は友達にうそをつくのと同様に否定した」

9 類: 到達を示す動作動詞

- (6) sǐi nǎa mǎy khôy phocay khǎw satrii sǎaw yǎy plian pay yím
 色 顔 NEG あまり 満足 ~の 女性 娘 大きい 変わる 行く 微笑む
 「大きい彼女のあまり満足したようではなかった顔色が変わり、(後略)」

(5)の例は、「黙る」という動作主ブラーシアの態度が続くことを表している、継続アスペクトである。感情や態度を表す動詞に pay が続くことで、その感情・態度が継続することを意味することになる。

(6)の例は、目的語である彼女の顔色が変化したことを意味する完了用法である。過ぎる、変わる、終わるなど、到達を意味する動詞と pay が共起した場合は、結果完了アスペクトとして用いられることが多い。

7 類に分類される動詞は、最も頻繁に使われる類の動詞のため、収集できた用例数も最も多かった。7 類の動詞と共に起した場合には、移動用法とアスペクト用法がほぼ半数ずつ出現した。

7 類: 非完了の動作動詞

- (7) ɛwɲrɛk khunpâa cùap bòn phumphant pay ʔik sǎw sǎam kham
 最初 お婆さん ~まで 不平を言う 呟く 行く さらに 2 3 語
 「当初、お婆さんはもう二言三言文句を言うところだった。」

(7)の例は、動詞の後ろに続く「さらに二言三言」という副詞句が、pay が共起した「呟く」という動詞と関連することで、呟きが続くという意味を実現しているため、継続アスペクトを意味している。非完了の動詞類に関して言えば、動詞句と修飾関係にある時を表す副詞が共起したことで、アスペクト用法として用いられる場合が多かったことも着目すべき点である。

1 類の動詞と pay が共起した場合も、半数以上がアスペクト用法として用いられている。

1 類: 性質、特徴を表す状態動詞

(8) mây mii sǎŋ tòɔp nòkcaak sǎŋ ʔuuʔɔɔ nɔy lamkhɔɔ léɛw ɲáɲ pay
 NEG ある 声 答える 以外 声 嗚咽 中 喉 PRF 静かだ 行く
 「嗚咽以外に答える声は無くなり、静かになった。」

(8)の例は、泣いていた弟が静かな状態になったという変化を表している。

pay がアスペクト用法として用いられる場合には、実際に人・物の移動を表す動詞ではなく、感覚的・知覚的な動詞と共起することが多いことが見て取れた。また、これらの動詞は「(V₁しようとしたわけではないが)結果として V₁になった」という、不随意動作的な意味合いが強いことも明らかになった。

3. 2. maa の結果

pay と同様にコーパスで maa の用例を検出した結果、有効な例は 487 例あった。maa が同紙に後続した 132 例に注目すると、異なり語数では 68 語であった。68 語をそれぞれ 1 例ずつ見ていき、用法ごとに分類を行った。その結果を以下の表 5 で示す。

表 2: maa が共起した動詞の用法

	アスペクト	移動	その他	合計
1 類: 性質、特徴を表す動詞	7	1	4	12
2 類: 不活性の知覚動詞	1	0	0	1
3 類: 所有、存在を表わす動詞	1	0	0	1
4 類: 不動の知覚動詞	1	0	0	1
5 類: 感覚を表わす動詞	2	0	0	2
6 類: 感情・態度を表わす動詞	0	0	0	0
7 類: 非完了の動作動詞	15	16	0	31
8 類: 完了の動作動詞	3	2	1	6
9 類: 到達を示す動作動詞	5	2	0	7
10 類: 瞬間的行動を示す動詞	0	2	0	2
11 類: 有生物主語をとる動詞	0	2	0	2
12 類: 両方になりうる動詞	0	1	1	2
13 類: 無生物主語をとる動詞	0	0	1	1
合計	35	26	7	68

まず、動詞分類表の 1 類から 6 類にあたる状態動詞と共起した場合の maa は、アスペクト用法として用いられることが、圧倒的に多いということが分かった。以下に例を挙げる。

1 類: 性質特徴表す状態動詞

- (9) tèε mûlîi hàkcay léew cingciŋ... lòŋ nɔŋ som maa cèt wan...
 しかし PSN 抑え PRF 本当に 彼女 寝る 重体な 来る 7 日
 「しかし、ムーリーは本当に抑えていた…彼女は7日間寝込んでいた…」

5 類: 感覚を表わす動詞

- (10) sǐi nâa khun lin coŋ mây sabăay maa lăay wan...
 色 面 ~さん PSN しなければならない NEG 心地よい 来る いくつも 日
 「リンさんの表情は何日間も優れないはまだ…」

(9)の例は、maa の直前におかれた動詞 som は、その前の「寝る」という動詞との結びつきが強く、重体で寝込んだ状態にあるということにまず注目する。さらに、7 日間という具体的な時間が付随し、「寝込んでいた」という継続アスペクトを表している。

(10)の例も同様に、maa の直前にある動詞は、その前に置かれた否定辞 mây と強く結びついている。さらに maa の直後に「何日も」と時の流れを示唆する語があり、「体調がすぐれない状態が何日間も続いていること」を表している。

2 類: 不活性の知覚動詞

- (11) lâw sânsân taam thîi rúu maa càak rpph. léew tàtbòt
 語る 短く 従う REL 知る くる ~から 警備員 PRF 中断する
 「警備員から、知っていることについて短く語り中断した。」

4 類: 不動の知覚動詞

- (12) braasia pay tòklùm rák khray dâyvin maa bèpníi
 PSN 行く 落ちる 愛する 誰か 聞く 来る このように
 「ブラーシアは恋に落ちた」と誰かがこのように聞いた。」

(11)の例は、主動詞である「語る」の目的語を修飾する形で出現している。富田 (1997) で maa は過去から現在に関する記述とあったように、ここでも、「昔から知っている」として継続アスペクトとして用いられている。

(12)の例では、「(過去に話された話を)誰かが聞いた」という過去の出来事を表していて、maa の用法としては完了アスペクトであるといえる。

次に、maa が 7 類の動詞と共起した場合を見ると、pay と同様に、移動用法とアスペクト用法がほぼ半数ずつ出現した。今回の調査では、maa が 7 類に分類される動詞と共起している例の出現頻度が最も高く、15 例あった。以下に例を挙げて詳しく見る。

7 類: 非完了の動作動詞

(13) mûa phaakhwǎn khayǎaykhwaam maa thǔŋ tɔɔnnii
 ~の時 PSN 説明する 来る ~まで 今

「パークワンが今まで説明してくると(後略)」

これは、説明するという動詞と maa の後に置かれた「今まで」という語によって継続アスペクトとして解釈できる。もし「*説明しに来た」と移動を表す訳にするならば、maa+khayǎaykhwaam という語順にしなければならないため、(13)の語順では「*説明しに来た」とは解釈することは出来ない。

以上の例から、状態動詞、非完了の動作動詞、完了の動作動詞、到達を示す動作動詞のいずれかと共起した maa が、アスペクト用法として用いられる場合には、V₁+maa の前後に、具体的な時間を示す語や、動作の前後関係などがわかるような「時にまつわる副詞または修飾語」が添えられる傾向があることが分かった。

4. まとめ

pay/maa に関しては、タイ語書き言葉コーパス『Thai Concordance』の小説ジャンルから用例を収集した。さらに、pay/maa が動詞に後続した場合に着目し、その動詞を Boonyapatipark (1983)の指標にしたがって分類を行った。今回の調査では、pay/maa が共起することでどのような意味・機能になるのかを確認することができた。そこから、pay/maa がアスペクト用法として用いられる場合には、実際に身体的な移動を表す動詞ではなく、感覚的・知覚的な動詞と共起することが多いことが見て取れた。1 類に属する動詞が pay/maa と共起した場合には、圧倒的にアスペクト用法になる頻度が高いことが明らかになった。

さらに、6 類および 9 類の動詞が pay と共起した場合、pay が意味するのはアスペクト用法のみで、本来の移動の意味が薄れていることも知ることができた。pay が動作動詞と共起した場合には「(V₁しようとしたわけではないが)結果として V₁になった」という、不随意動作的な意味が表出することもあった。また、maa がアスペクト用法として用いられる場合には、V₁+maa の前後に、具体的な時間を示す語や、動作の前後関係などがわかるような「時にまつわる副詞または修飾語」が添えられている傾向があることが分かった。

5. おわりに

卒業論文では、pay/maa が後続した単語の頻度を確認し、共起した動詞一覧を挙げた。さらに、移動用法・程度用法・その他の用法のそれぞれについて考察を行い、pay と共起した 1 類の動詞のみが程度用法をとりうることや、10 類にあたる動詞が pay/maa と共起した場合には、移動用法としてのみ用いられることが分かった。

また、方向動詞を含んだ動詞連続構文が否定辞を伴った場合に関しても、構造・意味の観点から調査を行い、共起する動詞が状態動詞か動作動詞かによって訳し方が変わるという傾向を知ることができた

今回の調査では、タイ語書き言葉コーパス『Thai Concordance』の小説ジャンルから方向動詞が動詞と共に起した用例を集めたが、今後はより多くの用例を集めて考察を行うことが必要である。また、今回は取り上げなかったが V+N+方向動詞の語順をとっている用例に関しても調査を行ってみたい。

略語一覧

CAUS	causative	使役	POT	potential	可能
CLF	classifier	類別詞	PRF	perfect	完了
NEG	negative	否定	PSN	personal name	個人名
NMLZ	nominalizer	名詞化	REL	relative	関係詞
PASS	passive	受動態			

参考文献

日本語の文献

坂本比奈子(1985)「タイ語の動詞の下位分類について」『アジアアフリカ言語文化研究 No.30』, 177-192, 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所／田中寛(2002)「動詞構文をめぐる日タイ語対照研究」『対照言語学的手法・視点にもとづく、日本語とタイ語の基本語彙・語法に関する比較研究』, 82-103, 東京: 大東文化大学外国語学部日本語学科／富田竹二郎編(1997)『タイ日大辞典』, 東京: 株式会社めこん。／中山健一(2006)「「してくる」「していく」形式について」『東京外国語大学日本研究教育年報 10』, 59-82, 東京: 東京外国語大学日本課程・留学生課共編／三谷恭之(1989)「タイ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第2巻』, 529-545, 東京: 三省堂／峰岸真琴, タッサニー・メーターピスィット(2003)「タイ語の「行く・来る」」『東南アジア大陸部諸言語の「行く・来る」／東南アジア諸言語研究会編』, 211-248, 東京: 慶應義塾大学言語研究所

英語の文献

Boonyapatipark, Tasanalai (1983) The subclassification of verbs. *A Study of Aspect in Thai*. Ph.D. dissertation, University of London, 47-61.／Chuwicha, Yajai (1993) *Clausehood in Serial Verb Constructions in Thai*. Ph.D. dissertation, Chulalongkorn University.／Takahashi, Kiyoko and Kingkarn, Thepkanjana (1997) Negation in Thai Serial Verb Constructions: A Pragmatic Study. Abramson, Arthur S. (ed.) *Southeast Asian Linguistic Studies in Honor of Vichin Panupong*, 273-282.／Takahashi, Kiyoko (2009) Basic Serial Verb Constructions in Thai. *Journal of the Southeast Asian Linguistics Society*, 1: 215-229.

調査資料

Department of Linguistics, Chulalongkorn University (1999) *Thai Concordance*.

<http://ling.arts.chula.ac.th/ThaiConc/> (2011/11/18 最終閲覧日)

思言 東京外国語大学記述言語学論集 **第8号**

2012 年 12 月 1 日発行

編集・発行： 東京外国語大学 記述言語学研究室（風間伸次郎）
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
電話 042-330-5357

Edited and Published by Department of Descriptive Linguistics
Graduate School of Global Studies
Faculty of Foreign Studies
Tokyo University of Foreign Studies
3-11-1, Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo,
183-8534, JAPAN

SHIGEN

vol. 8

Articles

- A Consideration of Adverb “aju” in Korean — Based on an analysis of the written language corpus—
..... AHN Jihye (3)
- The function of prefix sə- in the Myitkyina dialect of Jingpho..... ONISHI Hideyuki (21)
- The usage of onomatopoeia as predicate in Chinese — Focus on disyllabic onomatopoeia—
..... HUANG Hui (41)
- The semantic features of verbs as E-infinitive instructives in Finnish..... SAKATA Haruna (65)

Abstracts of the MA Theses

- A descriptive study on conditional forms corresponding to “nara” in the Miyagi dialect of Japanese
.....UTSUMI Yu (83)
- A descriptive grammar of the Myitkyina dialect of Jingpho..... ONISHI Hideyuki (93)
- A study of temporal converbs in Nivkh CHAE Heekyung (103)

Abstracts of the Graduation Papers

- Generational differences in dialect vocabulary use in NaplesITAKU Shiori (115)
- The dative case without preposition in German and corresponding expressions in Japanese
..... SUZUKI Mai (123)
- Similarities between the syntactic and semantic functions of the genitive vs. adessive and allative cases in Finnish
.....TAKAHASHI Kentaro (131)
- Sentence-final usage of "SHI" in Japanese..... NAKAZAWA Akie (139)
- Expression of the potential in verbs in Brazilian Portuguese YASUDA Aya (147)
- “Verb+Object/(φ)+Directional Verb lai” construction in Vietnamese..... YAMAMOTO Kazuya (155)
- The meaning and usage of ‘Imperative Form + Shi’ by young people in Tokyo District
.....YAMAMOTO Chihiro (163)
- Meaning and function of serial verbs in Thai - The case of verbal co-occurrence-..... WAKAYAMA Ayako (171)

2012

Department of Descriptive Linguistics
Graduate School of Global Studies / Faculty of Foreign Studies
Tokyo University of Foreign Studies